論理学、世界観、生き方へ

永久に未完成の哲学ノート　第一部

５版

高原 利生

大阪学院大学 中川 徹 名誉教授 解説

目次

前書き **p.5**
改版履歴 **p.7**
論理学、世界観、**生き方　永久に未完成の哲学ノート　第一部**
1. 事実、基本概念、価値と思考 **p.8**
1.1 事実 p.8
1.2 事実についてのいくつか p.11
1.3 全体への態度と基本概念：仮説、オブジェクト・粒度・網羅 p.13
1.4 思考が生まれる歴史と論理 p.21
1.5 価値の全体と価値の実現：生き方の前提と準備 p.23
1.6 思考の機能 p.33
1.7 生きることの全体 p.34
2. 弁証法論理：矛盾モデルと論理的網羅思考 **p.36**
2.1 目的と定式化 p.36
2.2 対象の解 p.37
2.3 論理の解 p.37
2.4 弁証法論理学 p.38
3. 矛盾モデル（運動モデル） **p.39**
3.1 矛盾モデルとは何か p.39
3.2 矛盾の構造の発展 p.48
3.3 小さな問題の認識と変更 p.53
3.4 大きな問題の認識と変更 p.54
3.5 矛盾の運動領域、矛盾の原動力 p.55
3.6 矛盾の種類（まとめ） p.56
4. 論理的網羅思考の内容と方法 **p.60**
4.1 論理的網羅思考の内容：全体、本質への指向 p.60
4.2 論理的網羅思考の方法：粒度決定と推論 p.61
4.3 論理の原理 p.67
5. 対象化と一体化、自由と愛の統一による生き方 **p.81**
5.1 弁証法論理と歴史 p.81
5.2 物々交換の開始以前 p.84

5.3　物々交換の開始とその後　p.87
5.4　対象化と一体化の矛盾　p.98
1)　対象化の誕生　p.98
2)　一体化、その不十分な展開　p.99
3)　対象化と一体化の歴史総括　p.101
5.5　実現の課題　p.115
5.6　実現の課題の検討　p.116
付１ マルクス再考　p.123
1　「経済学・哲学手稿(草稿)」の４文　p.123
2　「資本論」　p.126
3　マルクスの長所、短所、展開すべきところ　p.129

大阪学院大学 中川徹 名誉教授による高原利生論文集解説　p.131
後書き　p.133
謝辞と詫び辞　p.134
文献　p.135
高原利生論文集(4) 解題 抜粋　**p.140**

前書き 2021.09

本稿は、論理学の再構築、それによる哲学、生き方の提案の第１部である。永久に完成しない**仮説**の哲学ノートであり、必要な精髄を含み、各人が新しい哲学を作るための基礎を目指した。2021.08.22

ゼロから考え直そうとして書いていて常識と異なる内容が多く、読みにくいが、時間がかかっても論理を追っていける人なら読めることを目指した。一文、一節からも全体が見えると理想的であるが、おそらく実現できていない。
2020.12.23,2021.01.18

初版との違いは、次の二点である。1 ほぼ毎日、新しい発見があり、多くを考え直し関連する箇所の修正をした。事実、矛盾の歴史などは大きく直した。2 重複を整理し、内容は充実した。

感情、感性は論理以上に生き方にとって重要だが、本稿は論理だけを扱う。出発は、事実から、今扱う情報であるオブジェクトを、知覚とある粒度（抽象の程度）で抽象化して抽き出すことである。

・1　概念の把握を容易にするために、多様な意味で使われている概念を、意味を限定して使っているものがある。意味の限定と言っても、全て従来の意味を含む一般化である（例：価値とは大事なこと,その基準）2021.05.28。a 事実（存在、関係,運動,矛盾）、オブジェクト,粒度,網羅、哲学,常識、b 価値、保守,革新、自由,愛、機能,構造、c 技術,制度,科学,芸術などが概念の例である。

・2　全てが関係しているので、書く内容は、同時に要素の両立とその間の関係が決まっている。しかし、文は時間的に順次書いていくしかない。そのため、書くのに苦労し、読む人には両立とその間の関係が分かりにくい。

・3　提起している論理的網羅思考（16 版まで、根源的網羅思考と言ってきた。改める 2021.08.18）により、考えている事項の全体の中の位置が分かるように、粒度、網羅の結果を書きながら記述をしているので煩わしい。2021.05.28

・4　思考の経過、分かりかけていることは何か、分かっていないことは何かを（「未完成の哲学ノート」９版以降は、訂正した内容も）なるべく書くようにした。分かった内容だけを閉じた形にして書くとすっきりするが、将来への展開の途中であり、未完であることも示そうとした。

・5　仮説は、常に見直しを行うべきものである。書いている新しい常識,哲学も近似、仮説である。ゼロから考え直そうとしているが、おそらく中途半端で理解されにくい。また、自分の常識になっていない粒度(抽象度)、網羅による論理を書こうとするとぎこちない悪文になるが、恥ずかしい美文よりは良い。

以上から、本稿は、おそらく読みにくく、あいまいさも残り、また間違いもあろう。述べた理屈は、今あるものを、こう変えた方が良い,共有した方が良い、と思っているものである。

これで、今までの混乱が多少は解消されて問題がはっきりし、短く単純に、人類に共通の必要な哲学（論理学、世界観）、生き方を述べることができた。世の哲学との違いである。2021.05.30

2019 年 9 月以降、気づいた年月を付記していることがある。完成に近づいたら消す。[引用文献名はかっこ内に略記号で示す] 小さな字で、引用又は例を示す。下線は文章上の強調か課題を示す。

章以下の項の振り方は１　1.1　1)　11)　文字下げの１．11．が基本である。

本書は、AMAZON 公式サイトで高原利生を検索すると、概要が読め、購入手続きもできる。

改版履歴 2021.10.27

本書は「永久に未完成の哲学ノート」第１部５版である。「未完成の哲学ノート」17 版の第１部の改版に当たる。

初版を書く前から、ゼロから少ない原理でなるべく単純に、哲学（論理学と世界観）を作り直そうとしている。ゼロからと言っても、当時の常識を変えようとしたデカルトと初期マルクスの態度から学んだ。彼らと同様、今の常識を変えようとしている。初版以来、1. オブジェクト、粒度、網羅という３つの概念から事実をとらえる態度、2.「歴史と論理の一致」という仮説の前提、3. 六千年前の所有の誕生が、物々交換、お金を生み、そのため、経済が発展し、人口が増え、その管理のため宗教や組織への帰属を生んだこと。所有と帰属は一方向一体化であること、4. 対象化と双方向一体化（自由と愛）の統一の実現という目標、は変わっていない。

2020 年１月に中川 徹先生のご依頼で「論理的網羅： 永久に未完成の哲学ノート 第一部第二部 の 今」を書いた。題に示す書物が本書の９版に相当する。中でマルクス「経済学・哲学手稿」の二文に触れた。http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Takahara-Papers2019/Taka-54-RET-Memo-200106.html

「未完成の哲学ノート」11,12 版で、演繹、帰納は仮説設定に統一できることを書いた。12 版で、論理学が世界観を決め、単純化すると論理学が哲学であり、論理学が生き方を主導することを書いた。

「未完成の哲学ノート」17 版で、次のことを追加した。

1. 全体を求める態度、新しく求める価値、歴史から学んだ論理を強調した。

2. お金の所有だけの価値、所有を求めて戦争を生む組織への帰属の二つの弱点は、同時になくすしかない。そのためには、悪しき所有と悪しき帰属の一方向一体化を、双方向一体化に変えるしかないという、初版からの結論を再確認することになった。生まれるものは超所有と超帰属だが、いい名前がない。それが生まれれば、お金だけの価値と戦争は同時になくなり現在の身近な問題、復讐、いじめ、労働疎外なども解決する。

本版で、次のことを追加、変更した。

・1 「永久に未完成の哲学ノート」第２部４版の新型コロナウイルスの事件を書き直した。この再検討で、問題解決の前に、事実の把握が必要と気づき１，３章の両立矛盾を修正。・2　４章論理原則の見直しを行った。・3　５章で問題点としていた多様化、一体化の課題を、議論の本流にし、前に移した。・4　付１の斎藤浩平さんなど批判を削除。「未完成の哲学ノート」17 版 p119 の 32 は 3.2 の間違い。

論理学、世界観**、生き方へ　新しい哲学ノート　第一部**

1. 事実、基本概念、価値と思考 [FIT2010-16] [TS2012]

1.1 事実

1) 事実 : ある もの

1. 事実の歴史と把握の準備

138 億年前、ビッグバンが起こる。初めは**存在と運動、空間と時間、**内と外は分離しておらず一体だった。存在の形式は空間と時間、関係（運動）の形式は時間である。空間があって内と外がある。原初の物質から、空間と時間の区別が曖昧な差異と運動が生じ、エネルギーを前提として、存在・運動、空間・時間からなる宇宙が誕生する 2021.03.03。存在と運動、空間と時間、内と外の分離が明確になる。2020.0322,27,30　今ある「物」だけを、事実ないし客観と扱う素朴な扱いは多い。

何かが分かるとは、1 **何か**とは何か 2021.12.03、2 何かの**本質と構造**を把握することである（一般的には機能は本質的でなく構造が一次的 2021.10,02。機能なしに構造は単独でありうる）。**構造**は下位の要素群と要素間の関係（運動）の全体である。多くの定義は、単に関係の集合体とするが、要素と関係は同時に決まるので構造の定義に要素は不可欠である。上位、下位は相対的なので、当のオブジェクトの全体の中の位置を意識し述べることも重要である。2020.07.11,2021.02.20.10.25

運動、関係、過程も構造の要素になりうる。

構造の属性がその外部に対して発する意味が**機能**である。何かを機能と構造の集合としてとらえることができる場合が多い。機能は、その時の主体の価値観に依存するので、この機能と構造の集合は、それを扱う特定の人にとっての機能と構造の集合である。機能と構造は、従来の弁証法論理の内容と形式にほぼ等しい。機能と構造でない内容と形式が思い浮かばない。対象化と一体化は内容と形式ではない。客観世界においても擬人的に機能と言う語を使う。(機能と構造という概念の下位に空間、時間概念があるととらえる、と 2020.01.05 に書いたが取り消す) 2020.01.05,2021.02.20

2. 何かは事実、事実とは何か

人にとって、**事実**の本質は、**ある** ものである。事実の構造は 1「どこにあるかについて（これは、ある段階以降の生命にとっての事実に特有）」客観的事実と人の観念の中の像の二つ、1′ 両者間の関係、2 事実の要素は、存在、関係（運動）の二つ、2′ 要素(存在、関係)間の関係で網羅されている。2019.09.21, 2021.07.19

事実の内容はその属性で表現される。2020.12.13　ある ものの中に扱えるものがある。**ある もの ⊃ 扱えるもの = 認識できるものと操作できるもの ⊃ 操作できるもの**

目の前の**現実**は宇宙誕生以来の歴史の網羅的総括である。

現実は論理と偶然の微細な事情の作用の二つによって決まってきた。その上で今後の認識、働きかけについては論理による。2021.01,02.01

21. 存在のとらえ直し

事実を存在と関係（運動）で網羅的に全体をとらえきるために、次のように存在を考え直す。

存在は、一時的に固定的にとらえられる実在の 物理的生物的等の もの と固定的観念である。関係、運動がそれを変更し新しい実在の もの や新しい観念にする。

この観念の固定的状態を扱う「存在」のとらえ方は常識と異なる。ある木の部品の集まった状態が椅子の状態Ａであることが持続する時間は、数十年、観念のある状態Ｂが持続する時間は、数マイクロ秒かもしれない。このＡもＢも、変化するまでの持続する間、存在と扱い、関係（Ａの場合は工作、Ｂの場合は思考や議論という運動）と対等に扱う。この存在に代わるいい用語がない。観念は、脳内のニューロンなどものの状態である。観念を成り立たせているのも もの であるが、もの と観念は独立していると扱う。

22. 存在と関係（運動）の不思議な関係 2021.07.05

1 関係、作用、変化、運動、過程は、同じ事実,事象を、主体が別の見方で見たものと考える。関係、作用はやや空間に寄り、変化、運動、過程はやや時間に寄って見た表現である。例えば、落下運動は、落ちる物と地球の関係である。自動車の運動は、自動車と大地の関係である。変化は、運動、過程の時間の粒度を変えた表現である。光の運動は別。光に原初の状態が残っていると見える理由は謎である。

2 存在と運動(関係)が等価な機能を実行することがある。正確には、機能的に「存在、関係(運動)」のセットが、別の「存在、関係(運動)」のセットと相互転化する場合がある。この例と根拠を、[FIT2004] [TS2005] [TS2005 スライド]で述べている。例：バケツ 10 杯分の水を川から汲み上げるために、10 杯の容量の汲み上げ装置を１回使用しても１杯用の汲み上げ装置の 10 回使用でも、機能は同等である。10 杯の容量の汲み上げ装置に１杯分だけ入れて 10 回使用しても同じである。[TS2005]　s1×t1＝s2×t2 を、s1 の t1 回の運動が s2 の t2 回の運動と、機能が等しいことを表す表現とする。上の例では 10×1＝1×10 である。この例では、物質的な「存在」と「作用」という「運動（関係）」のセットと、他の「存在」と作用のセットが等価であった。観念世界での「存在」と「作用」のセットと、他の「存在」と「作用」のセットも等価である。私は実際に汲み上げ装置を使ったわけではない。観念の中で別の抽象化をすることも、さらに今書いているような思考を進めることもできる。これは、ある 状況をまたがっては起きない。(今までこの内容を「存在と関係(運動)」の関係とし 22 の一部として扱ってきたが、間違っていた。「存在と関係(運動)」の関係でなく、23 の存在と関係(運動)が独立している場合の特殊な場合に当たる。

16 年勘違いが続いていた。2021.07.06)

23. 存在と関係（運動）

1 存在であり運動である場合がある。例：何か分からないものが動いていると感じる。光が粒子であり波動である。これらは、形式上、存在と関係（運動）が分離していなかった原初に近い。原初の非分離（の一部）が、光で実現されている。原初の非分離と、分離後の「存在であり運動である」ことの関係は何か？

2 存在と運動が相互転換する場合がある。

存在と運動(エネルギーE)が、瞬時に/ 時間をかけて、転換する場合がある。同時にこれは存在と運動(エネルギー)が等しいことを表す。例：$E=mc^2$（m はものの質量、c は光速、この式の実現時間不明）。h 上にある水を落とすと、$h=mv^2/2g$（m は今流れている単位時間の水の質量、g は重力加速度、v は水の速さ）のエネルギーを得る。二式は、当たり前だが似ている。

3 存在と関係、運動(エネルギー)が独立している場合がある。例：(後述の）矛盾モデル、素粒子とその間の運動。この場合だけ二つの存在が必要である。これは、矛盾(運動)モデル「オブジェクト１－関係－オブジェクト２」のように単純に表される。このオブジェクトは、はじめは存在だったが、矛盾の複合体でもよいように拡張される。

以後、存在と関係（運動）が分離した後の世界を主として扱っている。

3. 観念の中の事実

客観の事実は問題が少ない。客観の事実は、言わば「宇宙の神」の視点によって「宇宙の神」が認識できる全てである。全宇宙には、宇宙の全ての生命体のあらゆる時間の脳内を含む。客観的事実の例：縄文時代に、人が食べていた食べ物。今、あるトンボの目に映っている情報。絶滅した宇宙人の種の歴史。縄文時代にある集落で共有されていた観念。現に人の観念に今「ある」ものには、各個人の脳内の過去、現在、未来についての像を含む。「変化」「変更」の無数の可能性がある。この網羅される変化、変更の可能性も、観念に生ずる限り事実である。論理的に可能なものなどたかが知れている。それは現実に規定されて、今、自分が考えつく限りの種類、型の「論理的網羅」に過ぎない。

問題は、個々人によって異なる主観的内容の扱いである。主観的内容の事実の例：ある人の脳内に、昔一瞬浮かんでいた幻想、妄想や未来像。ある人に把握された法則。

今、私の認識しうる客観と私の頭に浮かび扱える全てが私の事実である。

4. 事実のまとめ

人は狭い五感と常識の固定観念により、今あるものの全てである事実の一部しか知覚できず認識できない。その今扱う事実を、人は把握し必要なら変更する。

扱う事物については、自分がどの事物を選ぶかを明確にし、場合によっては「定義」し、考え、表現する必要がある。2020.01.07

事実に、概念としての事実と現実にある事実がある。

現実に、概念としての現実と、今私のここにある現実がある 2020.01.11。私にとっての事実とその他の事実がある。誰のいつのどういう観念迄含むかを使い分ける；私にとっての事実、大多数にとっての事実、世界の誰かが把握している事実の最大限がある。

以上の事実把握は最も単純かつ必要十分な把握である。

2) 運動

・関係はエネルギーによって運動に変換される。

・運動に、位置的運動、物理的運動だけでなく、化学反応、生物学的運動、社会的運動や、心理的運動、感情の動き 2021.07.19、思考、議論も含む。実用上、運動しているかどうかの認識は、変化を観測できるかどうかによる。変化を観測できるかどうかは、認識する粒度に依存している。

・その上で 1 運動を、ある状態にあり同時にある状態にないという論理的矛盾として理解する。2 運動を直接観測できない観念について、変化が観測できれば運動があったとし思考や感情を扱う。

一般的運動の場合、変化の観測を用いその属性が「ある状態にある」と同時に「ある状態にない」ということを次のように表現することができる。これは運動の構造を示さない、最も粗い密度での運動表現で、論理的矛盾に似ている。「論理的矛盾」的矛盾ないし「論理的」的矛盾であるが、論理的矛盾と書く。ある時点 t で属性 A が c という値の「ある状態」にあり、時点 t +⊿t で A が c に等しくない c +⊿c という値である時、A は「ある状態にない」。⊿t をゼロに限りなく近づけていくと⊿c がゼロに限りなく近づいて行くがゼロにはならないことを「ある状態にあり」かつ「ある状態にない」という。但し、不連続運動は扱えない。[FIT2004, 05/2] [TS2008, 12]

1.2 事実についてのいくつか

1）事実とオブジェクトの認識の全体と認識順序

1. 客観的事実が先にある

人間がいなくても客観的事実、宇宙、世界はある。論理の単位であるオブジェクトは、事実から、人が知覚によって必要なある粒度で切り取り表現する情報である。

2. 認識はオブジェクトの知覚から始まる

ところが、単なる一つの事象の把握でさえ、（個々の一人の）自分(あるいは宇宙人)が知覚によって把握した情報から得られている。つまり、単なる事実の把握は、まず、頭の中で（事実から切り取られた）ある個々の情報の把握から始まり、次に

それらを合成した事実を把握するという順序になる。実際にこういう把握が行われるためには、生まれて以来のものや運動の学習の歴史がある。生まれた赤ちゃんには、意味のない画像や音列があるだけである。

3. 認識はオブジェクトの知覚から始まる(2.)**にもかかわらず、事実が先にある**(1.)**とする仮説を取る理由**

それは、この理解が、次の三点を簡単に整合的に説明できることである。

・人が存在しなかった昔、純粋に客観的事実、客観世界があった時がある。この時にも時の流れ、歴史はあった。知的宇宙人の住む星にも、知性誕生以前から客観的事実があった。

・人が登場して以降、事実は、観念、情報、思考世界を産み、これらを含むようになった。（古い「唯物論」では「もの」だけを事実と扱うことが多かった）

・客観的事実と観念、情報は、何重にもなった入れ子構造になっている。

もし、事実は観念の中にだけあるとすると、この三点を簡単に説明できず、人の認識が客観世界と観念にまたがって歴史的に進んで行くことを説明できない。例えば、物々交換の開始を説明できない。物々交換は、客観世界と観念にまたがって生まれた最初の行為だった。[TS2012 等]

2）昔あった「唯物論」か「観念論」か、という問題（「未完成の哲学ノート」14版を簡略化)

昔「唯物論」か「観念論」か、という問題があった。私は唯物論という言葉は嫌いで、事実主義ということにしている。エンゲルスの「フォイエルバッハ論」[F]に、唯物論の四つの意味が書かれている。1 エンゲルス「フォイエルバッハ論」の第一の定義で、物質と心のどちらが本源的かという問いに物質が本源的と答える「唯物論」。これは今、科学で答えられる問題になっている。なお、この物質は、物質と反物質に二分する意味の物質ではない 2021.04.15。

2 「フォイエルバッハ論」は、次のことを前提として述べている。「人間の物質的生活の成り立つことが思考、行動の前提である」という立場、粒度からの「唯物論」。実現価値の系列仮説「種の存続―個の維持―個の属性（自由と愛）」の中で、種の存続―個の維持は「物質的」、個の属性（自由と愛）は「物質的」と「精神的」の両方が対等で入れ子になっている。

3 エンゲルスの第二の定義で、次のように「事実」に対する態度をとらえる「唯物論」 「われわれは現実の世界――自然と歴史――を、先人の観念論的な幻想なしにそれに近づく者のだれにでも現れるままの姿で把握しようと決心した。われわれは、空想的な連関においてでなく、それ自身の連関において把握された諸事実と一致しないあらゆる観念論的諸幻想を、容赦なく犠牲にしようと決心した。一般に唯物論とはこれ以上の意味をもっていない」[F]

4 エンゲルスが、「世界は、物の集合体でなく過程の集合体である」[F] と述べた事実主義。

「世界は、過程の集合体」というのは、第一に「世界は、物の集合体」というとらえ方が、1 の意味の「唯物論」を前提にしているのに対して「世界は過程の集合体である」という表現は、この前提を必要とせず、これより広い。第二に、存在と関係の二種であるオブジェクトが、実際に動き運動して事実、世界の近似の単位である矛盾（＝項１－関係（運動）－項２）を作る。項は存在として検討が始まった。二項を三項以上に拡張することもできる。存在は、一時的に固定的にとらえられる もの か 観念である。関係が、それを変更し新しい もの や観念に変える。

1 は、哲学の領域から科学の領域に移り、2,3,4 だけが態度、哲学として有効である。1 の意味での「唯物論」という哲学はなくなっている。科学といえども仮説なので、科学的論証、実証がされれば変わり得る。3 は事実主義と言った方が良い。これは完全に生きる態度として正しい。4 にも賛成する。3 が態度としての「事実主義」、4 が事実としての「事実主義」の意味である。以上は世の「唯物論」批判でもある。

1.3 全体への態度と基本概念：仮説、オブジェクト、粒度、網羅

本質：必要なのは、常に１ 事実を認識、理解し続け、2 価値の大きさ、粒度（空間範囲、時間範囲、属性）を広げ続け、3 事実を変更してその価値を実現し続けること 2020.12.23,2021.10.04。

何かが分かる,何かを理解するとは、何かの**本質と**(機能と)**構造**を把握することである。これが分かることの全てである。構造は、構成要素の両立と関係、下位の要素群の両立と要素間の関係（運動）の全体である。変更するとは、要素の新しい両立と関係を作ることである。2021.05.29

構造は、全体は何か、全体の構造(要素と要素間の関係)は何か、要素は何かという両方向の全体に向かって続いて行く運動の流れの中にある。2021.02.23, 07.04,10.04 今、注目するオブジェクトをここでの全体として次第に右に進んで行く場合、注目するオブジェクトをここでの要素として次第に左に進んで行く場合がある。このためこの全体は、空間、時間、属性（粒度。後述）のそれぞれについてある。2021.02.23,03.23, 07.04　この階層のどこの位置かを意識し特定する必要がある。開かれた直並列、木構造という開かれた構造を想定しがちであるが、閉じた双方向入れ子の場合もあるであろう。全くのしろうとの仮説だが、個々の素粒子が双方向入れ子で一つの宇宙に繋がるのは無理なので、これを解決するトポロジーがある。
2021.05.10,29,07.05,08.03

実現の時間構造：「人類の存続－個の生－個の属性」の順の価値系列が前提で、あるものへの態度の時間的順番は、**近似**的に、１．まず事実像を作る。2．扱うものの全体の中の位置を知り、その要素の論理的網羅を行う。より大きな価値とより正しい真実を求める。3．個々の事実を整合的に両立する**仮説**を作り検証をする。4．必要な場合、論理により変更する。これらの行きつ戻りつ,の相互作用の連鎖である。（1 の補足：事実像を作るのは世界観によるように見えるが、実は認識の論理によっている。4 の補足：４の論理は操作の論理。両者の論理はいずれも両立の**論理**）2021.09.27,10.04

1）全体への態度、そのために必要な近似による単純化、仮説

このため、1 近似による単純化,仮説を作る態度と、2 概念を準備しておく必要がある。2021.08.12

まず、事実を、**1 客観的事実、2 知覚した一次的情報、3 それを対象化した二次的情報**と**近似**する。021.02.02,03.15　2,3 の中の認識と働きかけ方の論理の分かる事実が、扱える対象である。知覚した事実を対象化した二次的情報で述べる言説は**仮説**であり、その正しさは一次的情報により検証され正しいかどうかは結果でわかる。今より良い仮説は必ずでき、他により良い仮説も必ずある。

この態度の何よりの利点は、傲慢にならず他や自分の考えに向き合えることである。2020.12.22, 2021.01.19 正しい仮説は通用し続け、法則や常識,哲学になる。同時に、法則や常識,哲学は古くなり続ける。故に、法則、常識,哲学は変え続けなければならない。2021.0.2.07

複雑な事実を扱うため近似モデルで単純化する。2020.07.07,2021.07.04

例：世界を、関係命題または矛盾モデルの複合体で近似。文化・文明を、科学、技術、制度、芸術の複合体で近似。哲学の第１近似は弁証法論理学、第２近似は世界観、弁証法論理学と基本概念。

次に、**2 概念**のいくつかを述べる。

2）オブジェクト

両立に、**命題の両立**とそれを支える前提の**概念の両立**がある。2021.01.24 このうち、概念体系(オントロジー)は無意識に世界観を前提にしている。両立把握の原動力は、認識についても自分の積極的な働きかけである。次に、2 **概念**のいくつかを述べる。

事実を、ある**粒度**（抽象化具体化の程度）で、**網羅**された中から、着目し知覚と思考によって切り取り扱う情報が**オブジェクト**である。Object を訳すと「対象」である。ここでは、オブジェクトを、上の意味に使っている。オブジェクト－粒度－網羅の三つは、整合的な概念体系、オントロジーの根本を作る。この三つは、事実の把握の下位にある。2021.12.03

a 事実（存在、関係,運動,矛盾）、オブジェクト,粒度,網羅、価値、保守,革新、自由,愛、哲学,常識、b 機能,構造、c 技術,制度,科学,芸術などの概念がある。オブジェクトの組み合わせであるオブジェクト世界が、複雑な現象に対応する。重要なオブジェクト世界に矛盾がある。（存在であり運動である事象などを除く） 変えられるオブジェクトは認識できるものの中にある。

3) 粒度 [FIT2005/2]

1. 粒度とは？

粒度（の本質、機能）は、オブジェクトの抽象化の程度である。その構造、要素は、オブジェクトの空間的範囲,時間的範囲と、無数の属性の中から着目し選んだある抽象度の属性である。粒度の定まった粒を、粒度ということもある。属性が、本質で、機能になり得る。空間、時間はその存在形式である。

粒度は、まず生理的に個人の知覚が、次に個人の観念が決める。しかし、今はほとんどの人に、知覚、観念によって粒度が決まっているという自覚がない。

この自覚のなさは、人が、自分が「正しい」と無意識に思ってしまう理由の一つになっている。

地球では、空間的範囲：時間的範囲の間には経験的な法則性があり、片方が大きくなると残りの片方も大きくなる傾向がある。例：人間,生命の種：100 万年,1000 万年、社会：100 年－1000 年、人間,生命の個体：10 年－100 年。[FIT2005/2 改] [TS2008 改] [TS2012 改] [THPJ2015/1 改]

空間粒度は、語そのものに明示的に示されない。今までは意識する必要はなかったからであろう。オブジェクトを特定するだけなら粒度だけでよいように見える。しかし、ある粒度を特定するには、そのオブジェクトを要素とする上位のオブジェクトを網羅した中から選ばれないと抜けが出る恐れがある。オブジェクト－粒度－網羅の三つは、両立しなければならず、同時に決まる。[FIT2005/2]では、粒度と密度の二つの概念を使っていた。今は、密度の役割を網羅が果たすように変えている。

概念の両立把握を容易にするために、多様な意味で使われている概念を、意味を限定して使っているものがある。意味の限定と言っても、全て従来の意味を含む一般化である。

他の概念を再定義する場合は、なるべく従来の意味を含むように行っている。

しかし、この「粒度（抽象化具体化の度合い）」[FIT2005/2]の意味は、辞書に載っている「粒のギザギザの程度」という意味と異なる。ここでは、ソフトウェア分野の意味を拡張した。今、一般にも使われている。[辛島、松林、澤田, “異粒度データ分析のための非負値行列分解に基づく確率モデル”, 信学論, Vol.J100D, No.4, pp520-529, April 2017.] 面、側面を再定義することも考えたが、誤解される恐れがあるので使わなかった。部分

は空間的過ぎる 2021.01。視線、視点というのは、態度に相当する語である。態度によって決まるのが粒度である。しかしこの語も空間にとらわれすぎる。階層という語も、空間、時間にとらわれ過ぎ、またやや概念が異なる。外延,内包を合わせた概念にも近い。

普通、人は無意識に粒度を決め行動する。世のほとんどは、抽象化も推論（仮説設定）もなく、思い込みの自説を自分に都合の良い例を挙げて説明することが続いて行く。考えていないことの例ばかりである。2020.01.29 必要な時には論理的に意識して決めるのが良い。

2. 粒度の内容：属性

21. 属性、値

属性はオブジェクトを具体化して表現するものである。属性はよく分からない。おそらくオブジェクトの内容のうち空間的規定と時間的規定を除いた全てのものが属性である。オブジェクトは無数の属性を持つ。粒度は無数にあるので、属性、機能は無数にある。

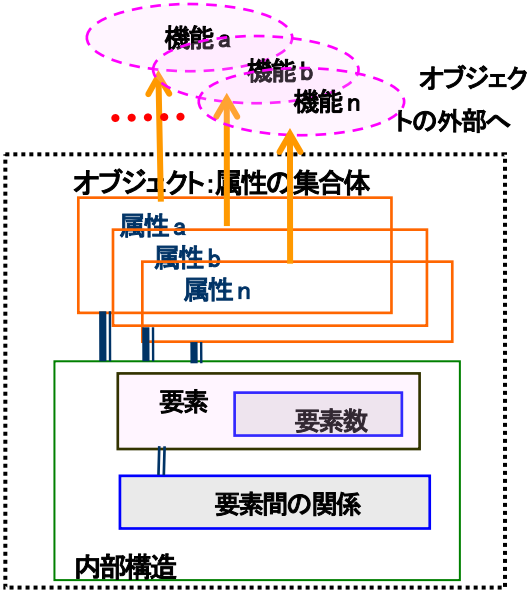

図 1.1 オブジェクトの構造[TS2008]

オブジェクトの属性は，（狭義の）属性と、オブジェクトの内部構造（要素である下位のオブジェクトの並立，要素間の関係）である。（狭義の）属性は，外部に対し

て機能となりうるものである。（狭義の）属性の数だけ機能がありうる。オブジェクトは無数の属性を持ち普段は眠っているが、粒度の指定により 2021.02.21、ある時それが現実化し機能として現れる（シカフス）。

（狭義の）属性は、変化しやすい状態と、変化しにくい（最狭義の）属性からなる[TS2007] [TS2008]。状態と(最狭義の)属性の差は相対的である。風呂の場合、普通, 水位は状態、バスタブの形は属性と扱うが、バスタブの色はどちらの場合で考えられることもある。[THPJ2012]

変化しやすい状態は、「値」と呼ばれ（狭義の）属性の場合、温度20度のように量的に、または赤のように非量的に表現される。色が属性の場合、赤、青は、量ではないが値である（波長を量で表せるが）。「値」は、内部構造が、細胞分裂の時のように変化しつつある時は、内部構造の具体的状態である。（2021.03.02 何年振りかで修正。まだ少しおかしい気がする）

量と質は反対概念ではない[TS2008]。量、内部構造の変化が, 属性を質的に変化させうる。質の反対は、量と内部構造である[TS2008]。

一属性を変更する方法に、オブジェクト操作の型（変換 D,U,P と、操作 R ; オブジェクトの持ち込み、持ち去り、取替え）がある。変換原理 D は、オブジェクトの内部構造(要素、要素の数、要素間の関係)の変更が新しいオブジェクト生成や自身の消滅、オブジェクトの複数の属性変更をもたらす。変換原理 U、P は矛盾モデルのオブジェクト 1、オブジェクト 2、関係が各オブジェクト自体またはその属性を変化させる。[TS2008, 09　TS2008 のスライド]

22. 価値と属性

価値とは、主体によって異なる、良いこと、またはその基準である。

価値と属性が同じものから徐々に分かれていく歴史の仮説を述べる。

今の私にとっての価値と属性は、次のような連鎖を経た相互規定の関係にある。

これらの差が生じる歴史は、抽象化と具体化の歴史である。今の行為の目的は、無意識の価値を具体化したものになっていて、価値は無意識の行為を規定する。何かの意味は価値に規定されている。機能は、運動、行為の「意味」である。属性は、客観的なものであり、ある状況で機能に対応する。

こうして、次の階層ができる。

1 究極の理想的**価値**→ より粒度（抽象化の程度）の細かい価値→ 具体化された**目的**、

2 この目的が目指し意図する私の機能と**意味**→ 今は意図しない私の機能と意味→ 可能性だけある私の機能と意味、属性→

3 多くの人の機能と意味→ その可能性の機能と意味、属性 → (単なる)**属性**

こうして、主観的なものが、次第に客観的な属性にまで長い歴史の末に展開される。[THPJ2012改]

この逆の流れもある。究極の価値も日常の意味の歴史を総括しても得られ、今の目的が、大きな価値、今の物事の意味の総体に規定されてもいる。上の系列の矢印は逆向きでもある。

価値 ←目的 ←機能 ←(単なる) 意味 ←属性 [THPJ2012改]。

つまり、事実の属性も価値も歴史的に変化する。歴史という事実と、価値、理想は相互規定し合っている。属性と価値の相互規定と似ている。属性の全体が事実なので、属性と価値の相互規定は、事実と価値の相互既定の一部である。

これらと歴史と論理の一致から、**事実**、事実の変化の**歴史**、事実の変化の**論理、価値、価値を実現する生き方**は、同じようなものであるらしい。2020.04.05

地球の存続は目標にすることができる。宇宙の存続は種の存続より大きい価値だが、このための努力は、今はできない。できないことを目標にはできない。将来、可能な時が来るかもしれない。

23. 内部構造

構造とは、要素である(下位の)オブジェクト群、(その数)、その間の関係である。

ものや情報の存在だけでなく運動、関係、過程も構造の要素になりうる。様々な人が把握する機能と構造がある。多くの人が共有すべき機能と構造がある。

3. 粒度決定タイミング

粒度特定のタイミングは、考え判断する時、価値と事実の差である問題をとらえ解を出す時である。個人の場合、すぐに解の出ない問題に時間をかけ取り組む時や、議論で自分の意見を相手に述べる時に、粒度を示して説得する場合に限られるであろう。取りあえず、これらの場合に、粒度を意識することから始めよう。

4）網羅

1. 網羅から考える

網羅は、より大きな全体のオブジェクトの中の、当のオブジェクトを、漏れ（と、重なり）の無いように、個々の要素のオブジェクトで数え上げることである。重なりの無いことが必要なのは、どういう場合かはよく分からない。網羅は、デカルト [RDI 精神指導の規則　原著 1701.] のラテン語 “enumeratio”の訳語で、野田訳では「枚挙」である。“enumeratio”は、英語では enumerate, enumeration である。“e”はすべてを表す接頭辞。

デカルト「精神指導の規則」規則 5 に「複雑で不明瞭な命題を、段階を追うて一層単純なるものに還元し、然る後すべての中の最も単純なるものの直感から始めて同じ段階を経つつ、他のすべてのものの認識へ登り行く」とある。この全体を、近

代合理主義を作り、かつ超える方法として読む。[RDI これの高原利生の AMAZON 書評も参照。「精神指導の規則」は、未完の書で、入社後、自然を管理するコンピュータ・通信システムの設計方法論として読んでいた] これが論理的網羅思考の始まりだったように思う。

一つしかないものは、その一つを数えて、網羅は終わりである。複数のものの物理的網羅が簡単にできる場合もある。普通はそうではないので、やや複雑な処理を要する。適正な粒度は、網羅された中から選ばれるべきで同時に網羅はある粒度に拠って行われる。粒度と網羅は、同時に定まる矛盾である。例：日本における虹の七色。虹の７色の中の「青」の属性粒度は、色を７で網羅した時の青である。[HDK] [THPH2015 /01] ある箱の中のボールは、ボールというオブジェクトの（塵を除く大きさ、固体などの抽象度で決まる）粒度で箱の中を網羅された中にある。

11. 共通の基本概念１：存在と運動(関係)。

今の事実の要素が、存在と運動(関係)の二つである。もともと同一であったものが宇宙発生後に何かに分化したとすると、存在と運動(関係)の二つに分化したのである。存在は空間と時間の二つの形式を持ち、運動(関係)は時間だけの形式を持つ。分化において主導するのは、空間か時間かはよく分からなかった。しかし、分化は時間における分化であり、存在は空間と時間の二つの形式を持ち、運動(関係)は時間だけの形式を持つので、時間が主導するという仮説ができる。これは、後に出てくる「状態より過程が良い」仮説にも、最近分かった、論理学と世界観という哲学の要素の中で論理学が主導するという仮説にも合う。

2019.12.22,2020.12.13,2021.05.14

12. 共通の基本概念２：オブジェクト、粒度、網羅

お互い相互作用のある基本概念の網羅。反対物でも他方に転換可能でもない網羅である。オブジェクトの階層毎に網羅がある。

13. 共通の基本概念２：空間的網羅と時間的網羅

空間的網羅と時間的網羅それぞれに、抽象度に応じた網羅があり、基本概念,具体的なものの区別がある。2019.08

はじめは、網羅を空間的網羅に限って考えていた。2019 年 10 月に、当たり前の重要なことに気づいた。現実は、今までの宇宙の歴史の網羅的総括であることである。網羅を、新たに時間的網羅を含むように拡張する。ある事実、オブジェクトの時間的網羅を、その事実、オブジェクトの発生からの全ての時間経過における作用を網羅することとする。歴史と論理の一致という仮説と合わせると、事実を、論理（と小さな偶然の変化）が作った歴史の網羅として扱うことができる。何のことはない。今の事実である現実、オブジェクトは時間的網羅の結果の一つである。

14. 網羅の応用例

・事実の網羅。例：概念としての事実と、現実にある事実がある 2020.01。

・対象化と一体化：お互いに反対物で、同時に入れ子になっている理想の網羅。

・新しい機能を作ること、不具合解決、理想化による機能実現の方法の網羅：粒度の違いによりどれも可能で、お互いがダブっている網羅。[TS2009,10,11]

15. 網羅の内部構造

ア. **閉じた世界の個別的物理的網羅**

ア1. **離散的なものを数える場合の網羅 例：箱の中の 10 個の玉を数え上げる。**

ア2. **連続的なものの網羅 例：日本における虹の七色。**

イ. **種類,型の網羅である論理的網羅**

イ1. **種類** 例: 生命の種。技術手段は、操作系から始まり、産業革命以降、容器・輸送・動力系(ものの保存・輸送系、エネルギーの生成,変換・保存・輸送系) [ここまでは資本論第一巻第13章] が加わり、情報革命以降、情報系(情報処理・伝達・保存系)が加わる。論理的網羅が歴史とともに変わる例である。2020.11.02,2021.02

イ2. **型** 例：運動と矛盾の型 [本稿。THPJ2012の 5章6章]、概念も型の一種である。

この分類自身、論理的網羅の例である。

オブジェクトの分類結果を、存在に対しては**種類**、運動(関係)や命題に対しては**型**と使い分ける。同じ種類、型には同じ形式的処理が、異なった種類、型に対しては異なった形式的処理ができ、かつ種類、型の総和が全体を網羅する両立矛盾が、種類、型の数だけある場合、この矛盾を満足する分類結果が種類、型である[TS2008改]。固定している種類、型、変化する種類、型がある。

これらが本稿の骨子を作る。4.3　1)「粒度、網羅の原理」に粒度と網羅の要点を書いた。

2. 網羅の機能、意味の網羅、網羅としての事実

粒度、網羅に関する多くの矛盾について[THPH2015/1]で述べている。

無限の内容を持つ無限定の事実を、どのように概念としてとらえるべきかについての、今までの多くの人の把握を網羅してできた仮説は、発見である。より正確な本質と内容を、把握し続けなければならない。一方、個々に扱う事物については、今、自分が何を特定したかを明確にし、場合によっては「定義」し考え表現する必要がある。

もともと同一であったものが宇宙発生後に時間的に何かに分化したとすると、存在と運動(関係)の二つに分化したのである。

3. 網羅が作る全体

何事にも、全体は何か、全体の機能と構造(要素とその間の関係)は何か、要素は何かという三つの課題がある。さらに１ 要素が、新しい全体になり次に行く場合、

全体が何かの要素になり次に行く場合がある。2 認識の場合、操作像生成の場合がある。後者の場合、求める全体の機能と構成要素の機能の二つが矛盾を構成することがある。2020.08.10,2021.03.03

1.4 思考が生まれる歴史と論理

1) 生命が誕生し動物が生まれる。動物は、世界を知覚し変更して生きる生命である。動物は、最初は一方向に知覚に反応し一方向に対象を変更する。カエルが目の前を通り過ぎる虫を捕えて食べる。これは次第に高度な行動になる。（食べる機能がなく、交尾し繁殖だけを行うある種の「かげろう」がいると知った 2020.01。その後、かげろう以外にも同様の生き物がいることを知った。感動的な話だが彼らを除いている）

次いで、**2)** 相手とのコミュニケーションが必要な段階が来る。知覚によって危険を察知した鳥は、自分が逃げると同時に叫び声を挙げて仲間に知らせる。一つの情報の他への一方向の伝達が行われる。何らかの手段で現実との差が伝わる。これを実現するのは一種の「単語」である。

複数の「単語」を持つ生命もいる。だが「論理」はないか不十分であり、言語はまだない。

3) 言葉がない間の、行動を変更させ目的を達成する言葉以外の手段の一つは、一方向の物理的行為である。オスがメスにプレゼントをする。馬に水を飲ませるのに、水を馬の近くに置くか馬を水のある所に連れて行く。物理的行為による変更は単純になりやすい。

単純な解の極端なものは単純否定である。単純否定の極端な一つに相手を殺す行動がある。

4) ライオン、オオカミなどの集団による狩りがある。目的を二つ以上の個体間で作り上げ伝達し分担行為の内容を決める必要がある。分担行為の内容は、個体ごとにそれぞれ異なる。言葉がまだないので、目的も分担内容も、おそらく、同じ空間,時間にいる二つ(以上)の個体間で双方向に同時並行的に生成される。内容をこの個体間で作り上げる段階と実行する段階もまだ分離しておらず同時に行われる。この狩りの中には、生命誕生当初の一方向知覚、一方向対象変更から進んで、高度の抽象力、超感覚、「空間的判断」力があった。単一目的に特化されているものの、複数個体間の高度な双方向コミュニケーションと極めて高度の抽象力により行動の目的の全員の一致、全体の中の自分の位置の把握、高度な超感覚、「空間的判断」による個体毎の行動像が一瞬の内に実現されている。

この動物の高度な判断は、今の人の時間的推論過程でなく一瞬に空間的に行われる。

言葉と論理以前の、行動を変更して目的を達成する手段は、このような、種の存続をかけて身に付けざるを得なかった高度なメカニズムであろう。

5) この段階に欠けている知的能力が必要だったので、人類はこの過程を一般化し単一目的から全体把握、複雑高度な目的、実行力の獲得の方に進んでしまった。それが「空間的判断」力を失う代償で得られた時間的言語だったのではないか。言語誕生により人は空間的超能力を失っていった。超感覚、空間的超能力は今もおそらく潜在的にある。

おそらく、4)の高度なメカニズムを 3)の物理的行為などより複雑な形で効率的に実現し一般的能力を得るため、事実の変化から観念の中に**論理**とそれを担う**言語**が発生した。さらに論理、世界観、生き方が分かれていく。2020.03.13 この一般的能力がその後に続く全ての人の潜在的可能性の基になったというのが仮説である。ある時、人に生物的な個の多様性の無限の可能性が生まれた。それはいつかは、分かっていない。(5.6 節) 2021.03.02,15,05.11,06.17

文化・文明誕生は、思考と多様化の可能性を全ての人に広げ、産業革命、資本主義は、個の多様性の全面的開花の社会的必要性と可能性への道を拓いた。(5.6 節)。2020.08.04, 2021.03.02,15

地球の植物、動物全体は地球の一日、一年の時間粒度によって生き変化している。これに加え、地球の生命の一部は、「空間的」な判断力を得る。昔の人も同じように同等の判断力を持っていた。今の人の論理は、これらと異なり空間だけでなく数マイクロ秒の時間で変化する汎用性を生んだ。論争の結果が暴力に至ることも、戦争に限らずまだ多い。物理的行為による変更と、言葉による変更の区別は明確にしておく必要がある。

言葉による弁証法論理が、自分と相手の双方を活かした解を可能にする。相手の一語に一語を返す動物に言語はない。論理はまず二つの要素の間の関係であるから、必ず二語以上の単位の連鎖が必要である。正反合なら二語以上の単位からなる三単位の意識が要る。弁証法的止揚は、困難で逐次的に進んで行かない不連続な運動である。

弁証法的止揚による思考や議論は、事実に強制される科学や技術、労働において、実質的に日常、行われている。しかし、弁証法的止揚による思考や議論は、まだ、特に政治、行政、マスメディアなど、事実に直接関わらない領域においては、殆ど行われていない。かつ、政治、行政、マスメディアが実質、支配層を作っているという問題がある。しかしこれは人類に可能性があるということである。多数がこれを実現している「国」はない。せっかく「空間的判断」力を失う代償で得られた汎用能力を人類はまだ得ていない。哲学が人の価値観、潜在意識、態度、感情に

作用し生き方を作る。人はこれらによって対象を認識し働きかける。言葉、論理を、思考、議論の手段と考える。

動物の無意識の価値は生だけだったが、言語、哲学が生の属性；対象化と一体化、自由と愛の統一という新しい価値の段階を作ることができるようになった。これが生とその上位の種の存続という価値を画期的に高める。これが、生の属性の重要さの意味、下位の価値の上位の価値にとっての意味である。2021.10.07

1.5 価値の全体と価値の実現：生き方の前提と準備

自明である種の存続、個の生物的生を超える価値の探求を行う。

1) 実現価値の全体像の準備：価値系列

人々の価値認識は多様であるべきだが、「1 種（オブジェクト）の存続、2 個(人)の生物的生、3 生（オブジェクト）の属性」という価値系列があり、この順に、大きさと共有の必要性が重要であることが共有されるべきであると思っている。（国は入っていない）

おそらく 2 個(人)の生物的生だけが自明である。自分の今の生より大きな価値があることもおそらく全ての人に自明だと思うが、それが何かは各人によって異なる。自分の家族の存続、地球上の全ての生命の存続、地球の存在、宇宙の存続、、

それでとりあえず、人類の存続を、仮に、個人の生の上位にある価値としている。はっきりしないが、個人の生の上位にある価値は何かある。2021.11.24

求めようとしているのは、（仮の）種の存続－個体の生という自明の実現価値に続く「生の属性」の内容である。これが分かって初めて「人は、皆、平等で基本的人権がある」。少なくとも近づける。

この内容の検討が本稿のテーマの一つである。

2019 年 6 月、この「生の属性」が得られれば「種の存続」を究極の価値にしても良い可能性が生まれるのではないかということに気づいた。

人は、目の前の課題を解決しながら、同時に世界と人の事実を認識し、より大事な価値を求め、その価値実現のため努力してきた。これが人類の歴史だった。

大きく長い空間時間の価値が、小さく短い空間時間の価値の前提になっている。

従ってより重要度と優先度が高い。そして、価値が目的、機能、属性を規定する。

価値の中にも、より大きな価値から小さな価値に至る階層がある。[THPJ2015/1] [FIT2015] お金は対象化（と自由）だけの価値だった。

人の行為には、対象との向き合い方として没入行為や何かとの一体感を感ずる行為のような一体化の方向のものと、設計のように何かを突き放して扱う対象化の方向のものの区別がある。

また、行為を左右する精神として、論理より常に強力な感情がある。[TS2006 改] [TS2010]

1. 前提1：客観的事実認識

種の存続については、数百年後には化石燃料が枯渇することを含め、次のような事実認識が人によって大きく異なる。[FIT2017]

例1：直径数十メートルクラスの小惑星は月と地球の間を、年平均三個通過している。西暦2135年に直径500メートルの小惑星ベンヌ(101955 Bennu)が2700分の1の確率で地球に衝突することが予測されている。全部の小惑星が把握できているわけではない。

例2：日本で十和田湖や鹿児島湾を生み出したような火山のカルデラ噴火が起こる確率は、一万年に一度くらいらしい。世界に広げると、千年に一度の確率で、全地球で長期にわたり太陽光が雲に遮られる。

日本は世界の1割の火山、地震が集中している。日本に限った話だが、東京、京阪神、東南海沿岸など今後の三十年間に、最悪数十万の死者をもたらし、都市壊滅に近い被害の地震が予測されている。数十年千年おきに大地震大津波が起きることが予測されるのは日本の殆どの場所である。世界に広げるとこの十倍の災害が起こる。

例3：大規模太陽嵐・太陽フレアは、地震と異なり過去のデータが殆ど記録に残っていない。しかし、千年に一度程度の確率で、国を横断する規模の停電を起こす大規模太陽嵐・太陽フレアが起こるらしい。

例1,2,3と合わせて五百年に一度程度の大きい確率で（五百年後ではない）、地球規模で長期にわたり再生エネルギー（さらに場合によっては通信や電気が全て）が停止する事態が起こり、今のままでは、人類の大半の死亡が起こりうる。

例4：地球の磁気はマントル運動が作っている。マントル運動はいずれ消滅するので、生命を守っている磁気は将来消失する。他に宇宙線から生命を守っているオゾン層、酸素の消失の恐れも重大である。

例5：他の惑星の衛星と異なり、月は相対的に地球にとって大きい。地球との距離と公転が地球の自転速度に及ぼす影響も比較的大きい。徐々に地球との距離は大きくなり自転速度は遅くなりつつある。これが地球内部のマグマ運動、地殻変動や地震、火山活動に影響する。例6：例4，5と同様、あるいはもっと時間の長い将来の話であるが、今が第4間氷期で氷河期が長く続くのか、このまま温暖化が続いていくのか今は明らかになっていない。どちらの場合も想定しておく必要がある。地球から大気がなくなってしまう恐れも想定しておく必要がある。

2. 前提2：人の生の価値とは？

21. 身体性と感情、感性に規定される価値

価値は、論理以上に、身体性と感情、感性にも規定されている。身体性、感情、感性は、それ自体、自律的な抽象力があると同時に、世界観、価値観に相互規定さ

れ影響される。身体性、感情、感性には、具体化する力はなく抽象力だけがあるか？よく分からない。

22. 人の生の価値再検討

「人は、皆、平等である」という命題は、歴史上、多くの人の血と汗の努力の結果で得られた。人種、性別、宗教などによる価値の区別はなくなった。これは画期的であった。

しかし、なかなか難しい命題である。人それぞれの価値は実際には等しくない。

人の生の価値は、まずその人の今後の人生の価値である。老衰で死が近い老人の生より、若い人の生の価値はより大きい。また、人それぞれの価値を増す力は、外部に価値の結果の差を生む。

これが、どういう理由によるどういう差なのかは、今まで明示的には表現されていない。人がこれからどういう価値を生むか分からなくても、全ての人は生きる意味があると考えられる。

ただ、これでは次の問題の答えが出ない。

例1：歳を取り、労働から引退する。もう充分働いたから社会の価値を増す行動はしなくてよいか？

例2：極端な場合、自分が、常時、介護が必要になり、コミュニケーションができなくなった時、一見何の価値も生まないように見えるこの人に、生きる意味、価値があるとしたらどういう意味のどういう価値か？

2016年、相模原で、そういう人は安楽死させるのがよいと大臣に提案し聞き入れられず、介護施設の入居者19人を殺害した人がいた（犯人の実名は明かされ、2020年この人は上告せず死刑が確定した）。

この人はどういう意味で間違っていたのか？コストが唯一の価値なら、相模原事件での殺害は正当化され得る。だからコストが唯一の価値でないポスト資本主義は必要である。しかしこれは積極的理由ではない。

新しい価値を提案しているが全く普及していない 2021.05.08 ので、彼を間違っていると批判できない。

事件直後（半年後くらいだったか？）のNHK特集では、全く犯人批判の理由が述べられておらず、亡くなられた被介護者が、残ったものにとって「大事な」存在だったという例が述べられただけであった。

大事と思わない家族がいることはあり得る。それに大変なコストはかかる。そのコストは他に使うべきではないのか？この疑問を提起したのが「犯人」だった。

これを考える中で仮の答えの案がやっと出せた。新しい価値が実現していない段階でも、個体の生が、「生の属性」より重要なのは、生は生の属性の前提であり、生きていると、本人と本人を支える多くの人の生き方の一歩が、人類に小さくとも必

要な何かをする可能性があるからである。その一歩が、全体の革新のための閾値を超えさせるかもしれない。小さくとも人類に必要な何かをするか閾値を超えさせる人が、いつの誰かは、今は分からない。かつ全ての人が生きてみないと分からない。社会や宇宙から見れば、全ての人は生きなければならない。

人とは、その人の社会的関わりの総体（マルクス）である。若きマルクスがフォイエルバッハテーゼで述べたこの有名な言葉は、人について述べられた。本質は機能で近似される。

社会からも観なければならない。**社会**とは、全ての人の自然的社会的関わりの総体である。この再帰的表現は、人と社会の相互依存を表す 2021.03.08,04.08。この事件の２年後、2018 年の NHK テレビ特集は、周囲の人が被介護者の人間性を伸ばす努力を行っていることを伝えた。この努力をされている人は、この努力の中で得たものを是非公表し、マスメディアは是非とも伝えてほしい。これは全ての人が知る必要のある内容である。

全く別の問題として、条件の厳しい死ぬ権利、尊厳死の問題がある。

3. 前提３：共有すべき価値と多様な価値の二種

31. (観念の)多様性は重要だが共有すべき(価値の)内容の方がより重要

最初に価値系列の共有を述べた。共有されなければならない価値と多様であるべき価値の関係について考える。その上で多様性、多様な価値がある。共有すべき価値は、まだはっきりしていない。個人毎にその把握の内容は異なる。はっきり把握されれば多様性の重要さも明らかになる。共有価値は各人に強制することになるかもしれない。実際に人に危害を加えれば法による強制を受け、多くの国で死刑さえある。[THPJ2015/3]　本稿は、共有すべき基本的な哲学（論理学、価値観を含む世界観）、生き方を述べ、その上で多様な個性展開を主張する。

32. 静かに受け入れるべき多様性と展開すべき多様性

自分で変えられない人種、肌の色、LGBT などは展開し広める多様性ではない。そのまま静かに受け入れるべき多様性である。これと展開すべき多様性を区別しなければならない 2021.06.03,07.19。

33. 共有価値以外の多様な個の価値の中から新しい価値が生まれるかもしれない

4. 前提４：価値と歴史、真理

41. 歴史から価値を求めることができる

歴史と論理の一致という近似命題によって、歴史から価値、理想、本質を求めることができる。この本質は、扱う歴史の長さ、どういう前提の歴史であったか、歴史が成熟しているか依存する。

事実が変わると時代時代の共有される価値が変わる。人の歴史の中で、人間の歴史に限定して 価値－属性 という系列がある。価値、理想は、この逆方向の論理があり、事実と双方向で長い年月をかけて、価値、理想は得られ、歴史という事実と価値、理想は相互規定し合っている。これは、前に述べた属性と価値の相互規定と似ている。属性と価値の相互規定は、事実と価値の相互既定の一部だろう 2019.09.03。

42. 価値の把握のために事実の法則、真理が必要

価値の把握、価値実現の論理のために、事実の法則、真理が必要である。 2020.04.30

5. 実現価値：対象化の価値と一体化の価値

世界の価値に客観的に寄与することと、主観的な人の幸せな生き方の両立を目指すことが、今、可能になってきた。そのために、対象化と一体化の統一の必要性も分かった。価値が、主体によって異なる「良いことまたはその基準」であるのは、主体による対象化を前提条件にしているからである。一体化が、より普遍的な価値への道を拓く。

2) 価値の実現：生き方の前提と論理

1. 生き方の前提

誠実であることを検討の前提としている。嘘をつかない、約束を守ること、偽善、欺瞞のないことは誠実さのイロハであるが、誠実さの内容ではない。誠実さの内容を述べることが本稿と言えなくもない。

2. 論理

人は価値を実現する論理も作ってきた。これからは、よりよい論理が作れる。 2020.04.13

21. 歴史と論理の近似的な一致から作る論理学

明示的に、近似的に歴史と論理は一致すると述べたのは 1915,16 年ころのレーニンだった [哲学ノート]。これらの元はヘーゲルである。ヘーゲルにとっては自明なので、明示的にそう書くことはなかった。彼によれば、神により、物事に内在する論理が展開して現実の運動が行われるので、論理は歴史と正確に一致する。神により展開されるということは、理想的合理的にノイズなく展開されるということである。「現実的なものはすべて合理的であり、合理的なものはすべて現実的である」[法の哲学]という彼の有名な言葉も、歴史と論理の一致の表現である。

文化・文明成立後の歴史と論理の近似的一致の、大雑把な根拠は、次のとおりである。

・1 事実の歴史的積み重ねの把握、歴史的変化の把握、条件設定による推論から、それぞれ帰納、演繹、仮説設定が生まれ論理ができていく。歴史が論理の原型を作る。

・2 文化・文明成立後、徐々に論理が事実を作る歴史が続いていく。論理が歴史を作る。

・3 事実は、現実の目の前の存在、関係だけでなく、各人の観念世界の中の、事実の歴史や思考の歴史の記憶と、未来像、論理、感覚、世界観、価値観を含む。また、逆に各人の思考世界、観念、情報は、その事実を含むようになった。これが繰り返され、一つの客観的歴史的事実と、知的動物の個々の観念,情報は、何重もの入れ子になり、お互いに含み合う。1,2 と併せ、歴史的事実と、観念、論理はお互いに似た内容になっていく。

地球では、論理の**歴史的結果が、が、今の多様な矛盾モデル（または関係命題）**（後述）に**結実**する。

矛盾（運動）モデルに、以下の順に、後の高度な矛盾が、前のより基本的矛盾の上に積み重なりながら発展する構造ができた。

（宇宙創成後）外力による変化・変更と(擬人的な)機能と構造の矛盾。自律運動をする生命の誕生。

→（生命誕生後）無意識の一体型矛盾(例：進化)。

→（知的生命誕生後：人に生物的な個の多様性の無限の可能性が生まれた後）意図的変化・変更。

→（技術開始後）意図的な可能性と現実性の矛盾（機能の可能性が現実になり得る客観的事実を意識する運動）、意図的な機能と構造の矛盾（機能を実現する構造を意識的に作る運動）。

→（農業革命、６千年前の物々交換、制度・技術の文化・文明開始後）矛盾の発展した変形として、矛盾の二項の向上をもたらし続ける一体型矛盾として、意図的な対象化と(間違った所有と帰属の)一方向一体化の一体型矛盾（が機能と構造の矛盾と併存）。

→（今後）意図的な対象化と双方向一体化の一体型矛盾（が機能と構造の矛盾と併存）。

・4 事実や歴史についての世界観は、論理から作られる。かつ論理の中の矛盾も論理である論理的網羅思考も、歴史的事実の把握を含む世界観の中核に拠っている。

これらが歴史と論理の大まかな一致の根拠の概略である。

但し偶然の微細な差異がその後の歴史に影響を与えてきた。客観世界もそうである。

1 この歴史のエッセンスが**論理学**になる。この論理学と、2 世界観、3 オブジェクト、粒度、網羅という基本概念が哲学である。事実に、客観的事実、客観的事実を知覚した一次情報、それを対象化した二次情報の順に、前のものから次第にやや独立していく三階層があり、二次情報で述べる言説は常に仮説である。これらの全体が、例えばカントの判断における悟性や理性の代わり、ヘーゲルの即自、対自、有、定有、定在などの代わりである。歴史の論理、その発展方向と蓄積の精髄が、今の論理、仮説設定（後述）の内容になる。方法(論理学)が世界観を作り、知覚と把握した哲学が、潜在意識、態度、感情を作り生き方となる。2021.01.18 カントなど生き方を哲学に含む既存哲学もある。

論理と歴史が一致するような、空間、時間、抽象化された属性がある。歴史と論理の一致は、思考の歴史、論理の歴史が、思考の発展のために重要であることを示す。現に対象化と一体化の矛盾の発見はこれに因っている。これにより、従来の哲学と異なり誰にも分かる哲学ができる。2020.05.12

22. 価値を実現する論理は必ずできる

意識できる価値を実現する論理は必ずできる。新しい価値は、機能と構造の矛盾を解けば実現できるので、新しい可能な価値を見付けるのが重要である。2021.06.07 これは未来についての態度を産む。2020.03.31 過去に対しては「その時代は、何が論理的に解決可能な課題であったか、しかし実際にはどういう解決策しか取れなかったか、その論理的理由は何だったか？」という問いを産む。これが、歴史と論理の一致という命題によって歴史から得るべき教訓である。必要なのは、歴史論理学、論理歴史学である。

23. 思考、議論の本質と構造

思考、議論の機能、本質は、事実の認識や変更について、より良い新しい像を作ることである。2021.07.06 その構造、方法は「抽象化－推論－具体化」の論理の連鎖である。実質的にこれをはじめて述べたのは、中川徹先生である（後述）。

抽象化は、無数の情報を持つ事柄の中から、解くことのできる「問題」＝矛盾(または関係命題)の粒度特定、定式化をするための運動である。

2020.10.06,11.10,2021.10.05

問題は、1（認識の場合）真実と事実の差の論理的網羅的把握、または2（変更の場合）目的,価値と事実の（網羅的把握の中の位置が明確になった）論理的網羅的把握の双方が必要である。（認識の場合）真実の把握には、他のものと自分の空間的関係と、自分の時間的変化の二つの粒度把握がある。

2021.10.07 認識の場合の新型コロナウイルスについての時間変化の認識例：今の新型コロナウイルスによる死は殆ど持病による死である。ウイルスの場合、一般的に３年半ほどで収束する経験則があるらしいが、日本では２年弱で収束する例だった。1 α株でパンデミックになり

かかった頃の死者数と、2 Δ株が優勢になった2021年7月以降の死者数、が両立するのは、3 Δ株ウイルスはインフルエンザ並みの強さのウイルスになったということである。1,2の時間差の両立をもとに、3という発見があったと考えることも、1,2,3の両立が事実を作っていると考えることもできる。これを前提にこれから何をどう変更するかという問題がある。[永久に未完成の哲学ノート第2部「宇宙論理学とポスト資本主義の準備へ」3版] 2021.10.05,07

定まった問題を、矛盾(または関係命題)で表しその解で結論を出すのが、**推論**という（狭義の）論理である。矛盾モデルは関係命題と等価である。粒度設定を間違うと論理は必ず間違う。

認識でお終わりの場合もある。変更の場合の、推論で答えがでた後の具体化は、ある構造で実現できると終わる。2021.10.05

3) 哲学と生き方へ

事実の変化の歴史、事実の変化の論理、価値を実現する生き方は、今までは大きくは同じことの別表現だった。(同じになるような生き方が良いと2020.04.05,14に書いたが削除)。2021.10.02

複雑な事実を扱うため近似モデルで単純化する2020.07.07。エネルギーを前提とする。

事実を、近似的に、1 客観的事実、2 知覚した客観的事実の一次的情報、3 それを対象化した二次的情報とする。これは、事実（+観念）の近似最小モデルである。実際には、2 一次情報さえも、3 二次情報によって作られる世界観に規定されており単純ではない。2021.02.02,03.15

人の、事実と向き合う態度には、科学が明らかにした事実の把握を前提として、1 事実に対する今後の「今より良い仮説」を考え出す認識,働きかけの方法(論理、論理の集大成である論理学)、2 事実のとらえ方の世界観と、3 これらを支える基本概念の体系、オントロジーがある。論理学と世界観は一体型矛盾の２項（さらに基本概念を含め３項）である2021.04.13,05.02。

あるものへの態度は時間的には、近似的に、**1．まず事実像を作る。2．扱うものの全体の中の位置を知り、その要素の論理的網羅を行う。より大きな価値とより正しい真実を求める。3．個々の事実を整合的に両立する仮説を作り検証をする。4．必要な場合、論理により変更する。これらの行きつ戻りつ,の相互作用の連鎖である**。（1の補足：事実像を作るのは世界観によるように見えるが、実は認識の論理によっている。4の補足：４の論理は操作の論理。両者の論理はいずれも両立の論理（後述）である）2021.09.27,10.02,03

人の作った何事にも完成したものはない。完成したと思う思考は死んだ思考の絞りかす、完成した本は死んだ思考の絞りかすである。特に問題定式化中の未完、未発表の書には比較的に思考が残っている。2021.01.30,06.03 哲学も虚構かもしれない

仮説である。より正しい常識、哲学、科学を目指して変更を続けていく必要がある。しかし人は、教育やマスメディアにより作られた共同観念、常識を疑わず生きてしまう。

本稿は、古い既存の思考の論理、方法や世界観、常識などの共同観念と世界変革の内容を、歴史の総括によりゼロから作り直す。事実の認識,働きかけの方法、論理が、事実のとらえ方である世界観を決める。世界観は、そもそも、把握の方法、論理によって得られ、1 認識の方法、論理のない事実をについてはただ論理と科学による解明を待ち（ほとんどの宗教に世界生成神話がある）、2 方法、論理によって分かった事実は、科学の論理と僅かな偶然によって明らかになった結果である。

哲学を構成する弁証法論理学と世界観は、双方向一体型矛盾の入れ子の二項を構成しお互いを含み合いながら、次のように発展させていく。1 弁証法論理学により、世界観の対象である事実は変わっていく。2 一方、世界観は価値観を作る。3 新しい事実と価値は新しい問題を生み、新しい論理が必要になり、弁証法論理を発展させていく。4　1 に戻る。

これは、弁証法論理学が主導権を持っている運動である。既存の常識・哲学によらず、方法(論理学)が世界観を作り、新しい哲学が出来上がる。

2020.12.25,2021.02.26,03.16

本稿の哲学の単純な近似表現は弁証法論理学になった。2021.05.27

人は常識,哲学により新しい観念を作る**思考**をする。知覚と哲学が、潜在意識、態度、感情に作用し**生き方**を作る。感情、感性は重要だがなかなか変えられない。論理がやがて感情、感性を豊かにしてゆく。本稿は論理だけを扱う。**一人一人の哲学(論理学と世界観)・常識、潜在意識、態度、感情、生き方**は、同じものの別の現れである 2021.02.17。人は、知覚と生き方によって、事実を認識し現実に働きかける。

一人一人の人が**今、生きること**を、次の相互作用の系列の繰り返しで近似する。

今、生きること＝ 事実に対する（知覚 ⇔ **（世界観→ 価値観）** ⇔ **（潜在意識、態度、感情）** ⇔ **（思考の論理(学)**、認識,行動の決定象）⇔ 文化・文明の支援による認識と行動）

これから、物理的知覚と認識と行動そのものを省いたものが生き方である。

生き方＝ (世界観→ 価値観) ⇔ （潜在意識、態度、感情) ⇔ 論理(学)

論理学と世界観を作っていく歴史過程を知ることが、論理学(と世界観)を潜在意識に組み込み、生き方を作る 2020.10.25。潜在意識そのものは意識できないが、論理学と世界観を作っていく過程を意識し続けると潜在意識に入り[ES]、態度、感情に作用する。

論理学も世界観も、真理も価値も変わっていく 2021.01.30。大雑把には、できあがった世界観、論理は同じようなもので、哲学を 1 空間を全体的に、長期的に見たら世界観であり、2 今、着目する空間を、今、変更するという短期で見たら論理学である。

今の意識的生き方を、**少ない概念,原理**により**作り直す**。新しい生き方の基本原理は、1 手段、方法として 11 事実と価値の全体を求める態度,論理的網羅、12 結果より論理重視,状態より過程重視,一体型矛盾、2 目的として、対象化と一体化（自由と愛）の統一（後述）である。対象化と一体化（自由と愛）の統一は、今、1 抽象的な客観と主観の統一を具体的に一瞬に実現し、2 復讐、いじめ、労働疎外等人の問題や、経済や「国」間の問題を解決する。2021.03.13,05.13

既存の哲学、現代哲学によらず、知覚と、事実と人の関係の歴史蓄積だけに基づいて、少ない概念と原理によるシンプルで合理的、正確、厳密という点、時代に合った論理学・世界観という二つの利点を持った哲学の骨子を作る。

以上における注目する個々の事実は、関係する人々間で意味を共有するべきものである。同様に関係する人々間の価値共有、問題共有の前提で、論理による変更が前提とされる。

以下、事実について仮説を作り考えていく。2021.02.06

人は、人の作った事実より上位にあり常に事実を超えていく。生きることは、「価値、目的を実現するために事実を知り変える」ことである。論理学も世界観も、真理も価値も変わっていく

2021.01.30。

以下、事実について仮説を作り考えていく。2021.02.06

人は人の作った事実より上位にあり常に事実を超えていく。生きることは、「価値、目的を実現するために事実を知り変える」ことである。論理学も世界観も、真理も価値も変わっていく 2021.01.30。

新しい論理学を作り哲学、常識を変え続けることが生き方になり、自分の生き方と新しい社会を作ることを同時過程にする。2021.08.05,10.02, 11.20

4）価値の役割と重要度緊急度の数値基準

価値は、実現とそのための行動に関し次のような役割がある。[THPJ2012] [THPJ2015/1]

1．価値の行動における役割

第一に、価値は多くの場合無意識に実現の優先度を決めてしまう。

第二に、価値は、多くの場合無意識に実現のための行動の目的を決めてしまうので意識すべきである。第三に、価値は、多くの場合無意識の実現のための行動の原動力となるので意識すべきである。

第四に、行動の結果は、目的を規定する価値、論理、実際の行動の有効さの全体で決まる。

このうち、日常の領域が制度の場合、結論は、論理の「正しさ」よりも価値の粒度 (誰のどのような時間のためという空間時間の範囲、属性)とその全体構造に、実質的に殆ど依存してしまう。

第五に、価値とその全体構造は、行動結果の正しさの検証のために必要である。行為の検証は行われないことが多い。検証の方法は確立されていない。

2. 価値の認識における役割

また、価値は、認識における役割、意味がある。

第一に、価値は、多くの場合、無意識に、認知、認識の対象を規定している。

第二に、価値は、認識結果、法則や学説の検証のために必要である。[THPJ2012] [THPJ2015/1]

3. 重要度緊急度の数値基準

意識的に重要度緊急度を出して実現の優先度を決めることを提案する。重要度緊急度は、次の一人の個別の値を求めた後、ある期間の全地球について各人毎の各項の積の和を作り各案の比較をする。[FIT2015]

a) 一人の生について 1(実際には異なるが若者と老人なども同じとする)。

b) 生の属性である自由と愛について一人ずつに対して1以上。

この重要度緊急度は一次近似で、実際の判断には建物、公共インフラ、個人の財産が付け加わる。

重要度緊急度はa) b)の積なので、人の数が多いほど重要度緊急度は大きい。

1.6 思考の機能：像の生成と変更

一般的な思考、一対一の対話、集団による大勢の討議：思考は、前の自分と今の自分の対話である。思考、議論は、機能的内容的には、事実、過去の自ら,他人の観念を 1 把握し、2 それを活かし両立する、あるいは機能とそれを実現する構造を両立する新しい像を作ることである。2021.04.17

1) 思考、一対一の対話、集団による大勢の討議の構造、形式

思考、対話の要素は、個々の「発話」の交換のリアルタイム性、単純化すると、一文、文章、数文章 (例：ブログへのコメント、投書)、もっと大きい文章である。この分類の意味は小さい。

2) 思考、一対一の対話、集団による大勢の議論の機能、内容

思考、一対一の対話、集団による大勢の議論は、機能としては同じものである。いずれも、思考、対話で、文、文章、その複合から、人は、次の思考の機能を得る。

1 相手（又は前の自分）と自分の持っている情報の同一、相違を確認し、事実や自分の思考内容についての情報を与え合うか（これは、思考における矛盾の項への入力である）、

2 ある事象の全体の中の位置、それが実現する価値を判断し、

・1 新しい認識,行動像を作るか、

・2（世界観による個人の価値観、態度、粒度（抽象化具体化の程度）、論理、方法を前提にして）認識を変え、（多いのは価値という機能を実現する構造により）行動を変えるか、

・3 前提となっていた世界観、価値観、態度、論理、方法を変える。

1.7 生きることの全体

1）認識と変更

生きることは、エネルギーの前提で、価値を実現するために事実を認識し変える運動である。

運動に、値の変化・変更と、二つが両立しているあるいは両立を目指す運動の二種がある。世界も人の行動も、運動の集合体である。その近似単位が矛盾モデルである。

認識を、知覚から法則の把握までを含む広い意味で使う。事実を変更する場合だけでなく、認識も、受け身ではなく、仮説を立てる積極的行為である。これではじめて、様々な事象や意見が理解でき変更ができる2020.02.02, 2021.04.13。ある一つのものの変化・変更の認識が、知覚され「受け身」で行われることはある。例1：何か分からないものが、チカチカしているのが見える。この例と宇宙創成時の「存在であり運動である」ことや、光が「光子であり波である」ことの関係は不明。例2：自動車の運動は、「自動車－関係－土地」で表される自動車と土地の関係であるが、自分が土地に一体化しているので、自動車が変化・変更の運動をしているように感ずる。

一般的に、何かの認識の例：今、部屋に、テレビ、PC、ボールペンなどがある。事実の「問題」は何もないように見える。しかし、これらを、対象として、でなく、彼らと一体化して見る場合、大きな問題があるかもしれないがまだ分からない。結果として、無数の実際にはほどほどの数の矛盾モデル（関係命題）ができる。[FIT 2014,15, THPJ2015/1,2 改]

事実を変える運動の答え、解への態度、解の数について、1 解を一つ求めればいい、2 解をいくつか求める、3 解を全てあるいはできるだけ多く求める、4 最も「良い」解を求めるという場合、態度がある。4 の最も「良い」解を求める場合、「良い」解の基準（根本的な解か、安価な解かなど）も網羅しておく必要がある。この前提の、解の有無について 5 解があるまたはないことを証明する問題があり、

解がない場合、6 解に最も近いものを求める問題がある。理想的にはあらゆる状況のあらゆる矛盾と解を求める。通常は状況を判断し、どのような解を求めるのか、一つだけで良いのか、出来るだけ良い解を求めるのかを決める。[OTW1992]

事実を変える運動の解の目的に、現状をもっと良くする理想化、不具合の解決、新機能生成の三種がある。重なりのある網羅の例である。これらの差は相対的なものでいずれでも定式化できる [TS2007]。ASIT [RH] は、問題解決を新機能生成に置き換えて解く手法である。

生き方の基本原理は、対象化と一体化の統一（自由と愛の統一）と、常に全体を求める態度(特に論理的網羅)の二つである。これは今のあるべき生き方であると同時に、今の世界の問題解決の基本原理でもある。これは、理想化と不具合の解決が同じためである 2020.07.02。**この実現には大変な努力**を必要とする。過去の歴史から学んだ論理が根拠であるため、歴史と論理と結論は、常に見直しが必要である 2021.07.15。（5章に詳述）

2）思考の順序 [FIT2014, 15] [THPJ2015/01,02] 矛盾については次章

1 事実がある。(順序を変更する指定がない限り次に行く。以下同じ)。

2 事実からある粒度で複数のオブジェクトを切り取る。複数のオブジェクトの両立を理解する。両立には、あるものの時間変化（前の値と今の値）、他のものとの比較を含む。例：新型コロナによる死者数と他の死因による死者数の比較。2021.10.03

3 何か変えるか又は新しい何かを作るか？3.1 YESの場合、4に行く。3.2 NOの場合、1に戻る。

4 事実の矛盾（後述）（オブジェクト1－関係－オブジェクト2）を確定する。つまりその機能に関する全ての矛盾の網羅的総体からなるオブジェクト世界を認識する。法則の認識である場合、粒度と網羅の矛盾の中の型の矛盾を認識する。

5 事実の矛盾を解の矛盾（後述）に変換し機能を確定する。

6 法則の変更以外の変更の場合、機能と構造の矛盾で解の矛盾を解き、構造を実現し、1に戻る。

法則の変更である場合、粒度と網羅の矛盾の中の型の矛盾も解き変更し、1に戻る。

7 新しく発見,発明された命題はないか、それによって可能になる価値がないか、基本概念の変更の必要がないか検証し、必要なら見直しを行う。1に戻る。

2. 弁証法論理：矛盾モデルと論理的網羅思考 [FIT2010-16] [TS2012] [THPJ2015/01]

2.1 目的と定式化

宇宙、地球が生まれ、事実が歴史的に変化、発展していく。生命、人が誕生し、事実から観念が生まれ、ともに発展していく。認識と操作の論理の分かる事実が扱える対象である。故にまず論理がある。2021.03.19 事実の変化から**思考**が生まれ、事実の歴史的変化から論理ができていく。

思考、対話の内容は、その思考、対話の要素間の関係である。この関係が論理である。形式論理、文法はある。命題論理や一階述語論理など数理論理やそれより広い形式論理は、小さな細かい粒度では正しい。

形式論理と文法の中間の粒度の、認識と変更双方の近似モデルである**弁証法論理学**を作る。新しい論理学を作る要件は、1 形式論理より広い、今必要な完全な全員の論理学、2 少ない概念、原理、要素で、ゼロベースでできるかぎりシンプルに作ること、3 歴史を反映した論理学であること、4. 価値を扱え、生き方につながること、である。2020.10.13,12.18,2021.06.19

事実に対する対象的な態度を分類すると三通りがある[FIT2016]。1 ゼロベースで物事を考え新たに作り運用する。2 既存の物事を作り替え運用する。3 既存の物事を変えないで運用する。この三つで網羅されている。近似である。この他に一体的態度がある。1 は理想であり、実際には、2 または3 がある。「作る」と「運用する」の区分も曖昧である。一般的、理想的には、1 の「ゼロベースで物事を考え、新たに」理想像を作り、その実現はこの理想像に現実的に近づけるような2 または3 がよい。要するに、常に理想像を考え実現は、当然既存の現実や資源を活かしながら現実的に行う。

価値を具体化する目的は、新しい機能を作ること、不具合の解消、理想化のいずれかである。これらは相対的でどれでも目的にすることができる[TS2009,10,11]。これは網羅され、全てダブっている分類の例である。論理学を作る今の場合も「新しい機能を作ること」が適切である。論理学を作ることは、全ての対象についての全ての論理の体系的網羅という新しい機能を持つ構造を作ることである。この論理学は今ないのでゼロベースで作る。ゼロベースに二つある。1 論理のゼロベース；分からない時はゼロから考え直しゼロから論理的に網羅し直す。2 事実のゼロベース；今の事実である現実は、宇宙誕生以来今までの歴史の網羅的総括である。今をゼロとし細部までそのまま認め、これからの変化、過程を重要視する。この二つは両立する。20190904,1025,1221, 2020.03.01

新しい論理学は、形式論理と文法の中間の、今、必要な、完全でシンプルな全員の論理学であり、そのため少ない概念と少ない原理によりゼロベースで作られ、歴史を反映した論理学である。この論理学だけが、生き方につながる。

2020.10.13,2021.02.24

全体が最も単純になるように、事実についての概念整理と問題分割を行い二つの要件に分ける。

・対象の要件：事実から、扱う対象を漏れなく正確に特定できる。

・論理の要件：事実の認識,変更とこれに関わる全てを、漏れなく単純に正確に扱える。

解決を二段階で行う。矛盾の発展の歴史から学び、システムと運動の二つに分けて作る。

2.2 対象の解

存在と関係（運動）が独立している場合を前提として(１章)、まず、システムを考える。

一案は、「もの」（例：道具）をシステム、その利用,運用を運動とする。これは一見分かり易い。しかしこれではシステムが世界を網羅できない。一案は扱う世界が限定される。あるものの運用だけ、単純なものの運用だけに適用できるだけで上の要件を満たさない。二案はオブジェクトをシステムとする。三案は、矛盾（運動）モデルをシステムとする。一案と三案の中間が二案である。第二の意味の事実を考えているので、二案、三案のどちらでも世界は網羅される。一オブジェクトでなく現象や問題に着目するため、オブジェクトより一段上の矛盾モデル（運動モデル）である三案とする（ただし、存在と運動が別々にある場合）。矛盾（運動）モデルが世界の近似単位であり矛盾モデルの合成で、世界のあらゆる事象を表せる。（存在命題、属性命題を表せない欠点がある。後で触れる。2019.09）三案は、オブジェクト間の関係を表す「オブジェクト１－関係－オブジェクト２」という矛盾モデル(運動モデル)；(必要に応じて３項以上に広げる)をシステムとして使う。オブジェクトは、最初は存在だったが矛盾の集合でもよい。運動のモデルをシステムにするということは一見奇妙に見える。

2.3 論理の解

この運動は、オブジェクトについての操作の全てである。この場合の運動の目的は、新しい像を作る本来の思考、議論を作ることである。

運動の一つは抽象化による矛盾(または関係命題)の粒度特定（問題定式化）、二つめはそれから新しい認識像、行動像を作る矛盾の求解(推論)、三つめがその結果の具体化、さらに周辺にある論理である。矛盾の解を出す、または関係命題の変更

を行うのが推論である 2020.07.24 改。後で述べるが「関係命題－推論」と「矛盾－矛盾の解」は同じである。

推論の要素は、帰納、演繹、仮説設定である。矛盾の解は仮説設定について求めれば十分である。これも後で述べる。「全てが関係している」ので、論理は、単に認識と変更だけでなく、これらに関連するあらゆる周辺の論理を含んだ論理学でなければならない。この推論は、抽象化具体化の粒度と論理的網羅が正しい限り正しい推論である。

論理的網羅は粒度に依存し粒度の客観性は様々であり、比較的に固定的なもの、そうでないものが混在している。抽象化と推論（仮説設定）の二つは、実際には同時決定過程に近い。

この抽象化具体化と推論、これらに関する全てを、論理的網羅思考（16 版まで、根源的網羅思考と言ってきた。改める 2021.08.18）ということにする。思考、議論における、自分の今の観念と、過去の観念や相手の観念をともに活かした統一は、論理である論理的網羅思考だけが可能にする。これで思考、議論ができるようになる。

論理(＝論理的網羅思考)とその単位である矛盾モデルとをあわせ、弁証法論理学ができあがる。

2.4 論理学

論理の生成と歴史の全体が、論理学である。[FIT2019]

本書の殆ど全てが論理学に関する。論理学の体系があるか？あると便利だろうと思う。あるとすればそれは、事実、思考と矛盾の生成と歴史と体系の全体で、特に以下を含む。

---

1. 事実とはなにか：　1 章 1.1 節
2. 思考の歴史：　1 章 1.4 節
3. 論理学の生成：　2 章、4 章（論理的網羅思考）
4. 人間と論理の歴史　論理的に：　3 章（矛盾）
5. 人間と論理の歴史　歴史的に：　5 章（矛盾の歴史、抽象化・具体化(粒度決定)の歴史、推論の歴史などがある）
6. できあがる論理の体系：　3.6 節、4 章（論理的網羅思考）、5 章

今必要な、矛盾の歴史的発展をすべて含み、今までより、豊かな弁証法論理学を、分かっている範囲で本書に述べた。弁証法論理学が殆ど世界観に等しい。

3. 矛盾(モデル) [FIT2006-16] [TS2006-12] [THPJ2012] [THPJ2015/01, 02, 03]

人にとって、知覚でき、認識と働きかけ方の思考の論理の分かる**事実**が対象である。人の、何かへの向き合い方は、対象のとらえ方・世界観と、それに対する思考における認識と変更の方法・論理、それらを支える概念からなる。世界は、全ての要素が関係し合い、両立し、変化している。哲学を、世界観と論理（方法）ととらえる。哲学が、人の価値観、潜在意識、態度、感情に作用し生き方を作る。人は、生き方により対象を認識し働きかける。

3.1 矛盾(モデル)とは何か

1）カントとマルクス

オブジェクトとは何かの答えを得るのに２年かかった(高原利生論文集 解題 抜粋)。オブジェクトとは何かを考えていた時に出会ったのが、二人の言葉だった。[TS2005] 一人はカントである。

「相互作用或いは相互性の法則に従う同時的存在の原則：およそ一切の実体は空間において同時的に存在するものとして知覚される限り完全な相互作用をなしている」[KNT p. 286] カントは地球と月を例にしてこの原理の証明に数ページを使っている。これは第一の「実体の不変性の原則」第二の「因果律の原則」に次ぐ第三の原則である。[KNT pp. 286-294] ヘーゲルはこの同じ３項目を、別の順で扱う。

もう一人はマルクスである。

「太陽は植物の対象であり、植物には不可欠の、植物の生命を保証する対象である。同様にまた植物は、太陽のもつ生命をよびさます力の発現、太陽の対象的な本質力の発現として、太陽の対象なのである」「それ自身が第三者にとって対象でない存在は、いかなる存在をも自分の対象として持たない」[EPM 岩波文庫 p.223]

二人とも「もの」に限定し、また二つのものの相互作用、関係を扱っている。これを、オブジェクト（「対象」でなく「事実からある粒度で切り取った今扱う情報」）に拡張し、オブジェクトとその関係は矛盾としてとらえるのが良いと考えた。[TS2005]

2）思考の単位としての矛盾、矛盾モデルの生成

弁証法論理は形式論理と異なり、空間的に関連しつつ時間の中で発展する物事を扱う。

関係(命題)に限る思考（後述）の単位だけなら話は単純である。関係(命題)、矛盾(運動)は、事実を扱う情報単位で、値のＡと非Ａの２項の両立である**変化・変更**か、属性Ａ、Ｂの２項の**両立**を表すことができる

2021.01.09。矛盾モデル（運動モデル）が、あらゆるものが関係しあっている世界の最少近似単位であり、矛盾モデルの合成で、世界のあらゆる事象

を表せることから、思考の単位を、オブジェクトから作る矛盾モデル（運動モデル）とする。矛盾モデル（運動モデル）は観念である。矛盾と略す場合がある。矛盾の両立に、事実に関する両立と、その前提となる概念の両立がある。

ある物事の生成とその後の運動を合わせて運動ということがある。矛盾は全く運動に等しい。矛盾(モデル)とは二項の関係の生成と運動である。矛盾と運動は、どちらも二項間の関係である。項はオブジェクトであり、考察のはじめには存在だったが、関係（運動）でも矛盾でも矛盾の集合でもよい。運動という言葉は既に普及して多くの意味を持っているので、矛盾を運動と言い換えるのはためらわれた。意味を特定した二項間関係を、変化,変更と両立矛盾（一体型矛盾）とし合わせて矛盾と括る理由を[THPJ2012]で書いた。当面「矛盾モデル」「運動モデル」という複合語を使うことにし、将来「運動モデル」と言い換えた方がいいかもしれない。（と書いたが、矛盾モデルは、存在と関係が分離している条件に限定したモデルであることに注意。2020.11.21）

3）矛盾の発生

事実に、変化・変更と両立の運動、過程がある。「存在」は、その両立の結果として二次的に出てきた。この「存在」もミクロにみると運動している矛盾の一部ととらえることはできる。2020.11.27

世界も人の行動も運動、過程の集合体である[エンゲルス, F]。あらゆる事象は関連し変化しているというのはそれ自体近似モデルによる。その近似モデルが矛盾モデルである。この矛盾は、単純に、「相互関係を有し変化する何か」である。大雑把に言うと矛盾モデルは「オブジェクト１－関係－オブジェクト２」の生成と運動を表す[THPJ2012]；基本はオブジェクト 1,2 の関係だが必要に応じて 3 項以上に広げる。矛盾もオブジェクト、オブジェクトの複合体もオブジェクトである。オブジェクトをどうとらえるかということと、矛盾をどうとらえるかは、ほぼ同じ問題である。

矛盾は、TRIZ を含め従来の弁証法論理に使われてきた。論理である論理的網羅思考が矛盾モデルを管理し、二つを併せて弁証法論理ができる。これが方法になる。

中川徹先生による TRIZ の本質の説明「TRIZ のエッセンス－50 語による表現」(英文で 50 語)が[Naka-2001]にある。これは矛盾の説明とも（生き方の説明とも）とらえられる。「[技術]システムが，理想性の増大に向かって，大抵，リソースの最小限の導入により，矛盾を克服しつつ進化する」 ことの認識。そこで，創造的問題解決のために，TRIZ は弁証法的な思考，すなわち，問題をシステムとして理解し，理想解を最初にイメージし，矛盾を解決することを薦める。」[Naka-2001]（和訳） 但しこれは技術に限定して述べられている。この「TRIZ のエッセンス」は、生きる全領域に拡張して適用で

きる優れたエッセンスである[TRIZ2015/01]。上の引用から、[技術]、[technical]を取り一般化して理解しても正しい。

4）矛盾と世界

宇宙、地球、生命、人の始まりがあり、今の多様な自然と社会がある。この歴史と現在を統一的に認識し変更していく、客観と主観の差を考慮した統一理論、方法,論理ができる。客観世界は、エネルギーを別にするとそのモデルは「ある粒度での差異が生じ運動が行われる」。これだけである。

エネルギーが矛盾という運動を始める(ダークエネルギーは扱わない)。理想の前提はいかなる空間時間でも使えるエネルギーである[CGK2016]。矛盾モデルを、どういう空間時間粒度で作るかによって、この差異とエネルギーが、外部の力なのか内部の力なのかは、相対的で矛盾の粒度によって変わる。これについて昔、無駄の多い「論争」が続いていた。[牧野弘義「弁証法的矛盾の論理構造」文理閣, 1992.]

矛盾モデルは観念で、世界の近似モデルの最小単位として用いられる。

矛盾は、客観領域においては、二項が作る「運動」、人の領域では、あるべき価値の姿と現実の差である「問題」とその解決＝差異解消である。客観領域における二項が作る「運動」も、擬人的に「問題」の差異解消とする。この二つの領域で、矛盾と論理的網羅思考を統合して自由に扱うことができる。客観世界の近似モデルは、客観世界自体にはない。人による認識モデルがあるだけである。

今、語られている宇宙や太陽系や地球の生成の歴史は、差異により運動が起動されて起こった「結果」か、複数の物事の両立の「結果」だけである。結果を見る粒度は後から分かる、というのは、おそらく人の意識的努力の矛盾が始まり、その矛盾の変化形式が理解されたのち、客観的な自然における矛盾が理解されるようになるからである。

矛盾の歴史があり、矛盾を理解する時間順序があり、今の矛盾の体系がある。以下、客観的な自然における矛盾の形式が始めからあったように述べる。

矛盾は、自然世界の運動と人を含む生命世界の問題を扱える。運動を直接観測できない観念について、変化、変更が観測できれば、運動の結果と理解することによって、思考や感情の運動を扱う。自然のどの領域においても、運動は、エネルギーが最小になるように行われる。生命の領域においても、長い目で見れば、近似的にエネルギー最小になっている（仮説：この粒度で、論理と歴史が一致している）が、生命は意志によってエネルギー最少を実現しない行動をとることがある。論理である論理的網羅思考による行動は、意図的に高度な価値実現を、エネルギー最少で行うことを目指す（と書いたが、分からなくなった。人類の統一理論の章で触れる 2021.02）。自然世界と人を含む生命世界に共通に、内容と形式（機能と構造の矛盾）がある。

5）他の人の矛盾

ギリシャ哲学、ヘーゲル、マルクス主義、プラグマティズム[CSP1] [CSP2] [UEYM1] [UEYM2]、西田哲学など様々な哲学、哲学者が弁証法を扱った。

資本論第一巻第一章に表れているマルクスの矛盾の欠点は、ヘーゲルの矛盾の欠点そのままである。この矛盾の欠点の「原因」は、何かを始める運動の分析ができないことと、外部の運動の作用を分析できないことにある。資本論第一巻第一章で、「商品ありき」で分析を始めてしまったことは、前者をもたらし、商品流通を効率的に行いたいという「外部」からの要請の無視は、後者をもたらした。[THPJ2012 に、資本論第一巻第一章数十ページの代わりを、数ページで書いている。付 1]

TRIZ の創始者アルトシュラーは、当時、旧ソ連で教えられていたマルクス、エンゲルスの矛盾概念を拡張した。アルトシュラーはまた、二変数の生成も両立と同じく矛盾ととらえ、属性の矛盾と値の矛盾を区別して扱った。

ここでの矛盾概念は、さらに、このアルトシュラーのものを拡張した。[THPJ2012] アルトシュラーの矛盾も、本稿の矛盾も、プラグマティズムの立場の矛盾[THPJ 2012]と言えるかもしれない。彼らの矛盾概念を、より大きく「網羅」することを目指して拡張してきたと気づく。

マルクスやアルトシュラーの概念についてだけでなく、他の概念を再定義する場合は、粒度を別にすれば、従来の意味を含み一般化するように行っている。これも意味の限定である。

後述の一体型矛盾は、西田哲学の徒、三木清の「人生論ノート」[MIKI1947]の「混合の弁証法」の意図と似ている点はあるが異なる。三木清もアルトシュラーも従来の矛盾ではだめと気付いていた。

6）矛盾の種類：変化変更矛盾、両立矛盾、一体型矛盾

矛盾とは、二項の関係の生成とその運動であり、様々な分類がある。[THPJ2012] [THPJ2015/1]　カントはカテゴリーを三項に分ける。それは、第一のカテゴリー、第二のカテゴリーとその結合による第三のカテゴリーである。[KNT pp. 149-159] その例は、純粋理性批判にいくつか挙げられている。例：性質（実存性、否定性、制限性）、様態（可能性、現実存在、必然性）

矛盾は二分を使う。理由は、次のとおり：1 二項は、あるべきものと現実とか、過去の思考結果と新しい思考内容や、相手の言っている内容と自分の思考内容など容易に思いつく。2 二分は、必要なら三分には容易に拡張できる。また三分は二分に簡単に縮退できる。3 より大きな全体は、二分モデルの合成によって作り表示することができる。[TS2006 に図] [THPJ2015/1 に図]

矛盾モデルは、客観世界と人間に共通である。世界を「項１－関係－項2」という矛盾モデルの集合体で近似する。

事実の矛盾、解の矛盾(後述)ともに、変化変更矛盾と普通の両立矛盾に分かれる。

1. 変化変更矛盾（差異解消矛盾を改め、変化変更矛盾にする。単に変化変更と言えばよさそうに見えるが、全体の矛盾の運動の一種だと意識するためにこうする 2021.05.31）

変化変更矛盾は、通常の変化、変更である。一つのものの運動を「ある状態とない状態」の二項の同時「両立」ととらえる。次の両立矛盾の一種ととらえることもできる。一つのものの変化、変更、運動のようにみえるものは「オブジェクト１－関係(運動)－オブジェクト２」という(両立)矛盾モデルで表せる。例：自動車の運動は「自動車－関係－土地」のように自動車と土地の関係。これで変化または変更を分解でき、運動の各項を改善することができるようになる。

変化、変更は「ある値を持ち同時にその値でない値を持つ」こと、Ａであり同時に非Ａととらえることだった。変化変更矛盾の二項は、値に関するＡと非Ａである。実用上、運動しているかどうかの認識は、通常は、変化、変更を観測できるかどうかによっている。その上で、運動を、ある状態にあり、同時にある状態にないという矛盾として理解する。本書は、全体に差異解消を扱うが、ここでの差異解消(矛盾)が最も狭い意味で、それ故に殆ど全ての運動である。2021.10.23

2. 両立矛盾の本質と生成

Ａと（非Ａでない）Ｂの二項が、両立している、あるいは両立を目指す運動は、弁証法の意味の通常の矛盾で、両立矛盾、または単に矛盾という。両立矛盾も広義の差異解消と呼べる。両立矛盾は、両立していないある差異を解消し両立の状態に至るからである。同じことだが両立のために常に変化、変更が行われている。その意味で、両立矛盾は広義の変化変更(矛盾)である。

仮説だが、自然の場合、１ お互いどうしの変化・変更の運動がまずランダムに起きる。２ その運動の中から、自然の微細な差異によりいくつかの運動の空間時間の集約が起きていく。例：重力によりいくつかの場所に密度の高い所ができてくる。星ができる。３ その集約の中から、最初はお互いの条件として作用し合うような２項がでてくる。４ 運動発展のために、矛盾を解消し両立の解が出てくる。例：２つの星が楕円運動 [TS2012、資本論] を始める。2020.12.17。これらの把握は知的生命の観念の中にある客観世界についての情報による近似である。矛盾概念は観念であり仮説である。

人の矛盾の場合も、１ ランダムに見える人の事象が多い。２ その中から価値実現のため変えたい事実が出てくる。３ その事実の中から、最初はお互いの条件とし

て作用し合うような２項が出てくる。４ 運動発展のために、２項から定式化した両立矛盾を解消し両立の解を作る。[TS2012] [DI] 2020.12.17。両立ができた。

両立矛盾は、関係命題（４章）に内容は等しい。本章の矛盾についての記述は総括的で認識と変更に分けている。４章の論理的網羅思考における関係命題の記述は変更の推論に絞っている。内容は等しい。 2021.10.19

21. 両立を目指す運動過程を見る粒度と両立した結果を見る粒度が、従来は混在していた。エンゲルスのいわゆる三つの法則は、全く的外れでもないが、「対立物の統一」は、「対立しながら統一、両立している」ので、本来は(対立と目指す両立の両面の)運動過程を見る粒度での一般的表現、「否定の否定」は、その運動の結果が、たまたま矛盾の２項が「正－反－合」で高度に統一された結果での表現、「質量転化」は、運動の一部の結果についての表現である。[FIT2009] 。

221. 事実の矛盾 2021.10.04,05,17

その後、第２部新型コロナウイルス問題の検討のまとめとして次を１章に述べた。2021.10.04 あるものへの態度の時間的順番は、１．まず事実像を作る。2．扱うものの全体の中の位置を知り、その要素の論理的網羅を行う。より大きな価値とより正しい真実を求める。3．個々の事実を整合的に両立する仮説を作り検証をする。(以下は解の矛盾へ)

222. 解の矛盾 2021.07.01, 2021.10.05(タイトル変更)

4．必要な場合、論理により変更する。認識と変更の全体はこれら１－４の行きつ戻りつ,の相互作用の連鎖である。事実像を作るのは世界観によるように見えるが、実は論理によっている。3、４の論理はそれぞれ認識、操作の論理。両者はいずれも両立の論理。2021.09.27,10.04,18 コロナ問題についてこれを意識した。

運動過程を見る粒度で、概念変更を除く変更という視点,粒度の矛盾は、1 認識については、11 自然の擬人的な機能と構造発見、12 人世界の機能と構造発見(例：物々交換という制度の開始)と、2 操作変更については、21 自然の変更における機能と構造生成、22 生き方における価値実現における機能と構造生成、である。2021.06.01, 07.01,10.04 概念を変更する矛盾は、機能と構造の矛盾ではなく、その概念とその真の反対概念を統一する両立矛盾である。

3．一体型矛盾の本質と生成

一体型矛盾の歴史は古く、雌雄のように、もともと一体である単性生殖が分かれて発展し、もう一度、二つの性が一体という全体の要素として両性生殖に発展する進化の歴史のような場合である。

生命と人類の長い歴史の中で、もともと一つだったものが、二つのオブジェクトに、二つの思考に、または二つの態度に分かれていく。そして、分かれたそれぞれ

は独自の発展を始める。ある時から、その二つは再統合の運動を始める。二項がお互いに発展させ続けることができるようになった。

人はもともと、原始的一体化状態にあり、自分、相手、外界は区別されていない状態にあった。

おそらく「原始的一体化状態→　発展のため分離→ 再一体化」というのが、歴史的順番であろう。

歴史には「(原始的) 一体化→ 分離」と「 分離→ 一体化」の二つが含まれている。歴史的に一体型矛盾は、もともと一つであったものが、両立矛盾である機能と構造の矛盾によって発展した変形である。両立矛盾の解が質的構造変化を生起しないまま、お互いに両項の向上をもたらす続ける場合と考えれば、新しい型の矛盾ととらえられる。[TS2011] [FIT2015]

機能という概念は、何らかの価値を前提にしているので、擬人的に見える。ここでの価値はエネルギー最少である。生命はエネルギー最少で環境変化等を生き延びた。2020.11.28,12.04

機能と構造の矛盾には、一回きりの設計の中の機能と構造の矛盾と、生命進化などの中の機能と構造の矛盾があり、後者が一体型矛盾である。生産力と生産構造の矛盾(生産の機能と構造の矛盾)は、普通は一体型矛盾であるが、今の生産力に対応する生産構造を検討する時は普通の両立矛盾である。

次のいずれかの条件があると、次のような永続する一体型矛盾ができる。

・**1** 条件：**外部に永続する強制力**があること。例1：種の進化における機能と構造の矛盾では、生き残るという基準が矛盾を永続させる。生き残っている種では、矛盾が永続している。例2：生産の機能と構造の矛盾の場合も、うまくいかないと会社などは、つぶれてしまう。生き残っている会社では、矛盾が永続している。この２例は、いずれも項の「存続」に関わっている。一般化できるか？仮説：項の存続に関する強制力が永続すると一体型矛盾ができる。2021.06.07

・**2**　条件：矛盾に、**永続性を内蔵する入れ子 構造 注** があること。

お互いに、1 各項が、他項を自らの発展の条件としているか、例 :システムと運用 2 または各項が、他項を、自らの情報のサブ要素として取り込んでいると、永続性内蔵の入れ子ができる。[TS2011] [FIT2016] 例：雄と雌。

・ものまたは情報のどういうものが、片方の中に入ると入れ子なのか、明確でない。

・ものまたは情報のどういうものが、片方の中に入ると、各項がお互いを変化させ合うことができるのか、明確でない。片方の条件だけある場合と両方の条件がある場合の違い、両者の条件の関係、内外の境界を変えてみる必要性の検討も今後の課題である。

この場合の矛盾の内容は、何らかの粒度で全体を構成する２項からなる。粒度に、全体を表す概念の場合や態度、行動の場合がある。（後述）（５章）

注 入れ子：ものか情報が、もう片方の中に入ること。お互いに入れ子になり合うのが双方向入れ子である。以下[THPJ2015/2]からほとんどそのまま引用する。

一方向入れ子

入れ子は、もともと、ロシア人形のように、同じ形のものが物理的にもう片方の中に入っていることを指していた。これを、1．何か同じものまたは同じ形式のものがもう片方の中に入ること、と拡張し、さらに、2．入れ子の対象を、ものから、もの、情報に拡張する。つまり、同じか同じ形式の、もの、情報が、もう片方の中に入ることを**入れ子**というように広げる。

これで一方向の入れ子が定式化できた。対象が、もの、情報の場合の差異の検討が課題である。

例：フィードバック、引用（引用されたものが自分の中に入る）、再帰性(再帰的な定義は、定義の中に定義されるものを含んでいること。「存在とは、他の存在と関係するものである」というのは再帰的な定義)、教育、洗脳、スパイ、寄生虫、相思相愛。文の例：寺沢恒信は、変化、変更の起こる構造を次のように述べている。「発展は、その内容に関しては現実性と可能性のカテゴリーによってとらえられ、その形式に関しては内容と形式のカテゴリーによってとらえられる。」[TRSW p.157 これは間違いだと思う。現実性と可能性は発展の起動力、内容と形式は発展の実現手段であり、どちらも発展の内容である 2021.08.13,31]

双方向入れ子

入れ子の拡張として、お互いに入れ子になり合う形式がある。対象が、もの、観念（情報）の場合の差異の検討が課題である。例：客観と主観、客観的世界と主観的世界。例：手段としての双方向入れ子として、二重スパイ。観念を中心とする主観的世界は、初期にはものを中心とする客観的世界の像であったが、次第に客観的世界は主観的世界を含むようになり、お互いを何重にも含み合う何重にもなった入れ子ができている。一体型矛盾は双方向入れ子の形式と考えることができる。

一体型矛盾を自覚すると解を早く得られる。よりよい解にするためには永久に努力を続けなければならない。将来は、よりよい一体型矛盾を作り続けることが人生になるかもしれない2021.07.04。

矛盾を決めるのは、粒度（抽象化具体化の程度）であり、矛盾を解決するのも粒度である。両者は入れ子になっている。粒度を決めるのも、粒度と網羅の矛盾の解であるという入れ子もある。世界の近似単位としての矛盾特定,解と、粒度の管理のための論理的網羅思考が、双方向入れ子になっている。[THPJ2015/2 改]

理想的な労働、教育、技術,制度、相思相愛は、自分と対象と相手を向上させ合う双方向入れ子である。過去に世界や相手、対象があるから自分がありその逆もある。一体型矛盾の解の連鎖による。

入れ子を2次元で表現するのは難しい。入れ子を表現する数学的形式はよく分からない。ハイパーキューブはその候補で、入れ子、再帰構造を表現する数学的形式である。[松本明子,岡本秀輔,曽和将容, “拡張ハイパーキューブについての研究”, 情報処理学会計算機アーキテクチャ研究会117-12, 1996.3.6. これは、コンピュータ内通信ネットワークに関するものだが一般的な内容がある]

4. 一体型矛盾の機能と構造、課題

41. 一体型矛盾の機能

一体型矛盾は、持続的に外部と自分を変化または変更し続ける（[FIT2016]では「発展」としていたのを「変化または変更」に訂正する）。お互いの価値を増す好循環の一体型矛盾、値を減らす悪循環の一体型矛盾、どちらでもないものがある。どれに該当するかは、扱う主体に依存する価値による。したがって両立矛盾から一体型矛盾に変えていくことが、常に良いかどうか一概には言えないが、適切な一体型矛盾を作ることは、理想の解の一つである。（４章）

価値が、主体によって異なる、良いことまたはその基準であるのは、対象化を前提条件にしていると気づく。一体化が加わると大きく価値のとらえ方が変わる。2020.03.11

一体型矛盾の２項は、お互いを変えていく。

42. 一体型矛盾の仮説と課題

人の世界で外部への機能が発展し続ける運動は一体型矛盾である、という仮説を作る。[FIT2016]

さらに仮説を作る：「人の世界で『ある項とその反対項が両立する一体型矛盾は真の発展をもたらす』という条件を満たす項、一体型矛盾がある」。

これから、発展する一体型矛盾を作る論理は、論理の方法原理になる。生き方における「対象化と一体化」だけでなく、哲学の「論理学と世界観」も一体型矛盾である。2021.04.13 ここで、「発展」は人の価値に依存するので、人の世界に当てはまり、客観世界には当てはまらない。2021.04.13

１章で、何事にも、全体は何か、全体の機能と構造(要素とその間の関係)は何か、要素は何か、という両方向の全体に続いていく三つの課題がある、と書いた。ここでの機能を擬人的に使うことにすると、これは客観世界にもあてはまるかもしれない。この両方向に続くトポロジーは直並列と木構造を何となく思い浮かべるが、実は双方向入れ子かもしれない。発展を続ける宇宙の構造は、双方向入れ子構

造が本質的で、部分的に直並列、木構造なのかもしれない。さらに超弦理論は、宇宙と素粒子を統合できる理論である。2021.04.05,13,17

入れ子を構成する一体型矛盾の二項は、相互作用し、発散するか、収束するか、その中間である。もし、哲学や生き方に一体型矛盾が含まれているとすれば、それは収束と発散の二つを共に持たないといけない。収束する形式と、発散,発展する内容を持たないといけない。日常の思考も、収束する形式と、発散,発展する内容を持たないといけない。こうすると二項は、発散する場合以外は、双方向入れ子のため次第に同じようになり一体に近づく。2020.12.18

3.2 矛盾の構造の発展

以下の順に、後の高度な矛盾が前のより基本的矛盾の上に積み重なりながら発展する。

1) 外力による変化変更矛盾と両立矛盾

宇宙誕生の原動力については、よく知らない。宇宙誕生の原動力により、客観的な自然における変化変更矛盾が始まる。変化変更矛盾によって、両立矛盾も始まり、解の安定状態が作られる。解は、おそらくエネルギー最少原理が作る2020.03.13。太陽と各惑星の運動は、楕円運動という重力と遠心力の両立矛盾の集合で近似される。

2) 無意識の両立矛盾（機能と構造の矛盾）、一体型矛盾

自律運動をする生命が誕生する。これを可能にしたのは偶然（か自然2020.03.09）の進化である。進化は、個体又は種の存続という機能を実現するために、構造を変え得たものが生き残った結果である。つまり、生命は、無意識の機能と構造の矛盾、その解の連鎖である進化と、個体の生の持続という基準が永続しているために発生しそして続いた。

3) 意図的変化変更矛盾：技術の基の誕生

次いで、普通の意図的変更、意図的変化変更矛盾を始めることができるようになる。

意図的変更、つまり意図的変化変更矛盾は、おそらく最初は、偶然、何かを操作して、有意な結果を得られたことに始まる。これが繰り返され、意図が加わるようになる。模倣も広まっていく。

「原因―結果」であるとは最初は分からない。

次第に「原因―結果」であると知るようになる。

偶然の「原因―結果」から意図的な「原因―結果」を作るのに、生命は数十億年を要した。

この意図的変化変更矛盾は、例えば、石の道具をより尖るように変える。

4) 意図的両立矛盾（機能と構造の矛盾）：技術の本格化と制度の誕生

必要性と可能性の矛盾は、人の意識的行動の基本でもある。人に必要なものは問題として意識でき努力すればいつか可能になりそうになる。人はいつか可能になりそうなものを「問題」として意識することができる。次いで、可能性と現実性の矛盾がある[TRSW]。可能性と現実性の矛盾は、あるべき価値と現実の差である問題を意識する段階である。2021.06.01

必要性と可能性の矛盾、可能性と現実性の矛盾が起こすのが、**機能と構造の矛盾**（内容と形式の矛盾にほぼ等しい）である[TRSW]。技術上の、機能と構造の矛盾の初期形態は、道具の利用、製作以来、数百万年の歴史がある。機能と構造の矛盾は、実用上の最も大きな問題で、いつ始まったかも重要である。道具と共同観念による間接化によって、それぞれ技術と制度が分離する[TJ2003Jun]。技術は、個と対象の関係である。制度は、個と共同体の関係である。この二つの分離自体、機能と構造の矛盾の解による。おそらく四千年前、文化・文明の始まった時、技術上の機能と構造の矛盾が本格化し、二千年遅れて、最初の制度上の機能と構造の矛盾ができる。

例1：機能と構造の矛盾の例：エンジンの大出力と軽量の両立。この例の場合、「項1－関係－項2」は、

1 「望ましい重さ(軽さ)」が項1、「今の重さ(軽さ)」が項2という値についての「TRIZの物理的矛盾」、

2 「あるべき大出力と軽量」の全体が項1、今のそれが項2という属性についての「TRIZの技術的矛盾」、

3 「大出力(機能の属性)」が項1、「軽量（構造の属性。なぜこれが構造の属性かというと、構造は「要素と、要素間の関係の二つ」だから）」が項2という「機能と構造の矛盾」、

4 「大出力(機能)」が項1、「軽量でない(反機能）」が項2という「機能と反機能の矛盾」、

という言い方、粒度がある。実際は最後の反機能、副作用の克服に進むとらえ方が多い。2020.12.24

例2：[FIT2016] [FIT2017]には、矛盾に関する多くの例を挙げている。

二人以上が関係する制度上の両立矛盾の開始は難しい。必要なのは、次の条件である。

1 始めるために必要な、外部条件、2 人の前提条件（物々交換の場合、所有意識）、3 始める矛盾の生成とその矛盾の解の同時実現（5章）[THPJ2012]。

3 は、必要性と可能性の矛盾、可能性と現実性の矛盾でもある。物々交換も、一種の機能と構造の矛盾の解である。物々交換については、5章で詳しく述べる。

5）意図的両立矛盾（機能と構造の矛盾）の分割・媒介化による展開

技術と制度は、ともに媒介化と分割を続け人類の歴史ができる。これらは機能と構造の矛盾の連続である。技術と制度は、それぞれ、道具と共同観念による媒介化

に始まり、オブジェクト分割と統合の繰り返しによって進展してきた。分割しても発展するかどうかは、論理的に事前に分からない。歴史は、どう媒介、分割、統合するかの失敗と成功の連続だった。2020.12.14

コロナ問題で、重症者と死者数変化の前後という**複数の事実（変化変更矛盾の結果と観た方が良いかも）と両立する複数の仮説**を見つける経験をした。項の数の多い矛盾の発見であった。[永久に未完成の哲学ノート第２部「宇宙論理学とポスト資本主義の準備へ」５版] の内容は、事実変更前の認識の、視点,粒度に関する議論である。2021.10.04,28

これらは一体型矛盾につながり、人は次第に「大きな問題」を解くようになり、目的と手段が複雑化していく。

6）一体型矛盾

1. 一般的一体型矛盾：二項の継続する弁証法的止揚による高度化

分かれたそれぞれが、全体の一部として一体となる再統合の運動を始める。

二項の場合、弁証法的止揚を行い、単純な全否定でなくより高度の新しい段階を作ることは易しい。これは普通の意味の矛盾を解けばよい。

一項しかないものについて、根本的に一段高めるのは難しい。（仮説）その方法は、何かの本質（正）とその反対の本質（反）の弁証法的止揚（合）である。そのために、ある概念とその反対概念の統一が新しい段階に行くような、「ある概念とその単純否定でない反対概念」の定義をする。

定義：全体がＡと、単なる非ＡではないＢで網羅されているとき、その全体に関して、Ａの真の反対はＢであるということにする [IEICE2018]。

仮説：Ａと、単なる非ＡではないＢの弁証法的止揚が全体を根本的に一段高める。

11. 同じ次元の領域の二つのオブジェクトの一体型矛盾 2021.06.18変更

例（二つの客観的オブジェクト、人システム）：男と女。

例（二つの客観的オブジェクト、二つの運動）：労働、交換、保管、消費 (多くの動物では分離していない)。態度と認識・行動。技術と制度。

例（二つの客観的オブジェクト、固定的なものと運動）：システムと運用。矛盾モデルと論理的網羅思考。

例（客観的オブジェクトと思考）：客観と主観。認識と行動。歴史と論理。感情と論理。

例（二つの思考）：思考と学習。受容と思考と表現。思考と議論。多様化と単一化1。粒度と網羅と矛盾。科学と芸術。リアリズムとロマンティシズム。

例（複数の態度）：謙虚さと批判。多様化と単一化2。

12. 異なる次元の領域に作用する一体型矛盾 2021.06.18追加

驚くべきことであるが、ある一体型矛盾が、異なる次元の領域に作用する場合がある。

個人の主観の中の抽象的な客観と主観の一体型矛盾は、一瞬毎の、具体的な対象化と一体化の一体型矛盾の解で解決でき、一人一人の一瞬毎の努力が、世界、宇宙に貢献し、かつ自分の幸せ、喜びになるようにすることができることが分かった。2021.04.15,06.13。抽象的な主観と客観の統一は、具体的な個人の労働と生活の中での具体的な対象化と一体化の統一で可能になる。この解決過程が進み人の廃棄物ゼロ,省エネルギーなどの条件を満たすと、長い時間をかけて、もともとの客観と主観自体がお互いを高め合う地球と人類全体の客観的一体型矛盾に成長していく。こうして将来は、二つの一体型矛盾、「対象化と一体化」と「客観と主観」の矛盾が並行し同時に進んでいくようになる。前者は一人一人の主観的生き方を作り、後者は、最初は、抽象的な主観と客観の統一だったが、今は、客観的になった。(５章)

新しい論理学を作ること、自分の生き方を作ること、新しい社会を作ることの同時過程も、異なる次元の領域に作用する一体型矛盾の例である。2021.08.05

2. 特に対象化と一体化の一体型矛盾

21. 世界と態度の網羅

1 自分とオブジェクトからなる世界に、自分というオブジェクトと、それ以外の他のオブジェクトがある。これを略して「自分と他のオブジェクト」と言う。「自分と他のオブジェクト」からなる世界に、無限の態度、行動がある。しかし、論理的に種類や型を網羅することはできる。

2 態度（と行動）は、自分がオブジェクトをオブジェクトとして扱う対象化の態度（と行動）の型と自分とオブジェクトを一体化して扱う態度（と行動）の型として網羅される。自分もオブジェクトとして扱う。対象化に自分の対象化と他オブジェクトの対象化がある。

オブジェクトを、客観的に高めることは、自分を高めること、オブジェクトを高めること、自分と他オブジェクトの関係を高めること、その組み合わせで網羅される。

対象化とは、(自分の体、心を含める)オブジェクトを自分のために良くしようとして、操作対象として見る姿勢、態度と行動である。この場合、オブジェクトを自分のために良くする対象化の価値を、対象を変更する能力である**自由**としている。この自由は自分だけの価値である。通常のように自由を制限すべきととらえない 2020.03.04。自由は常にプラスの価値であり、別の価値、一体化、愛と統一すべき価値である。**一体化**とは、対象を、自分と一体として見る態度と行動である。一体化の価値が**「愛」**＝自分とオブジェクトを一体として扱いこの両方を良くする態度と行動の広さと強さである。「愛とは、私と他者が一体であるという意識」と言ったヘーゲ

ルに倣い、一体化を愛ということもある。ただここで、ヘーゲルは愛の対象を人に限定しているように取れる。

地球人が、1 人の種の存続、2 これに従属する個体の生を価値とし、3 やっと自由と愛、対象化と一体化の統合も、それに次ぐ価値としようとしている。

これに対し、他の星の宇宙人は全く別の価値実現のために生きているかもしれない。ここの自由と愛は、少し常識を拡張している。（5章の自由と愛）

本稿には、「歴史と論理は同じ」という定理（か仮説）が底流にある。この歴史は、全歴史である。哺乳類は胎内で進化の歴史を再現する。

対象化に自己対象化が含まれる当然のことに 2018 年に気づいた。ほとんどの人の「問題」は自己対象化が足りないことが原因だという気がしてくる。

一体化と対象化の矛盾は、自分とオブジェクトからなる世界を扱う矛盾の一種である。

一体化と対象化の矛盾以外に、自分とオブジェクトからなる世界を扱う矛盾があるか？2020.12.15

はじめは、一体化と対象化の矛盾は、必ず一体型矛盾であると思っていた。しかし個別の一回かぎりの場合がある。つまり、普通の両立矛盾の場合がある。例えば、ただ一回の一体化をして対象化の対象が増しそれが解に繋がることがあり得る。

どちらも、機能と構造などの矛盾より一つ次元が上の矛盾である。どちらも網羅が済んでいない。

22. 対象化と、一方向と双方向一体化の一体型矛盾：歴史の例を5章に示す

価値を増やすのは、自分を含めた対象を変更する行為による。仮にこれを労働と言っておく。この労働は、賃労働に限らず、対象を変更する一切の行為である。コミュニケーションや議論を含む。対象化の意味は変わっていく。価値を増やすのは、自分を含めた対象を変更する行為による。仮にこれを労働と言っておく。この労働は、賃労働に限らず、対象を変更する一切の行為である。コミュニケーションや議論を含む。

大きな変化は、６千年ほど前に、対象化が初期の一方向一体化である一体化、「所有」と「帰属」を生んだことである。（5章）ある時、対象化の反対概念である一体化の原型、一方向一体化が発見され、次いで特別で重要な一体型矛盾として、対象化と双方向一体化の一体型矛盾が生まれる。（5章）一体化と対象化は非対称な項である。1. はじめに一体であるものがあり、それからが対象化が生まれ、さらに一体化が、高度に復活する。2. 一体化は対象の粒度を広げ、必ず対象化に貢献するが、対象化は必ずしも一体化に貢献しない。良き対象化だけが一体化に貢献する。

対象化と一体化、自由と愛はこの限り網羅されており、一体型矛盾の二項でお互いを変化させる。

「自分と他のオブジェクト」は、自分にとって最小の世界であり、かつ全世界の最小モデルととらえた。これが本質（正）とその反対の本質（反）である。「自分と他のオブジェクト」以外にも、本質（正）とその反対の本質（反）はある。

本稿の最も重要な矛盾が、対象化と一体化の矛盾（自由と愛の矛盾）[TS2011]である。

3. 特に多様性と単一性の一体型矛盾

高度化していき多様になると、単一的に管理する必要がでてくる。

多様性に、空間的な属性の多様性、時間的な属性の多様性がある。

さらに以下のように形式(構造)、内容(機能)、方法の粒度がある。

・多様性と単一性の形式として、分散と集中。展開と集中。拡大と集中。

・多様性と単一性の機能として、豊饒性と単純性。複雑性と単一性。

・多様性と単一性の方法として、分析と合成。

3.3 小さな問題の認識と変更

あらゆる事象は、矛盾の集合体で近似でき、関連しながら運動し結果として変化していく。

問題とは認識された現実とあるべき価値の差である。全ての「問題」は価値を具体化した目的の実現手段を作ることで解決する。機能と構造の矛盾を解くことと言っても、目的と手段の矛盾と言っても良い。

問題（事実と価値による目的の差異解消をする矛盾）は、次のいずれかにより、区分できる。[IPSJ2017]

1 目的が、具体的なある状態の達成であるか、運動,過程であるか、

2 目的が、短期か、長期か、

3 問題が、一つの矛盾か、複数の矛盾か。

この三つにより「小さな問題」「大きな問題」に分ける。

「小さな問題」は、目的が 1 状態、2 短期、3 問題が一つの場合である。これは、解決のために既存の態度行動を一回変えればいい問題である。多くの場合、次の２段階からなる。

第１に、1 エンジンの出力を２倍にする場合、出力２倍という機能を実現する構造を作ればよい。これは機能と構造の矛盾を解けばよい。これら自体機能と構造の矛盾である。重さが増すという副作用が生じる。2 或いは、気温が低いので上げる(ための手段ができている場合)変化変更をする。湿度が下がるという副作用が生じる。多くの場合、案の「副作用」が機能に悪影響を及ぼす。

第２に、この悪影響除去と本来の目的を両立する機能と構造の矛盾ができる。

[FIT2015] [THPJ2015/1, 2] は中川徹の「六箱方式」[Naka-2005,2019]と内容は同様のもので、その別表現になっている。そしてこれは大きな問題の場合の基礎となる。「小さな問題」の場合も、「副作用」が他に悪影響を及ぼすことまでは、定式化されているので、かなりの範囲の問題が解ける。

3.4 大きな問題の認識と変更 [IPSJ2017]

歴史が進んで行くと、目的が小さな機能から大きな機能に、短期の一つの目的実現から長期の複数の大きな目的の同時実現に、拡張されていき「大きな問題」ができる。矛盾モデルは単位であるから、これ自体は「大きな問題」を表現できない場合が生ずる。これに対処するには、1 今の矛盾の形式のまま内容を豊かにしていくか、変形していくか、2 複数の矛盾をそのまま扱う方法を作るか、3 矛盾を合成をするか、あるいはその組み合わせをする。矛盾の合成で、世界を近似的に表現できる。合成の表示方法も提案している。合成は、項か運動(関係)か、その属性を介して行われる。[FIT2005/1 表示法] [TS2006] [TS2008、同スライド] [THPJ2015/1]には**合成の例や図**がある。

典型的な大きな問題に次の二つがある。

「大きな問題 1」: 目的が 1 状態、2 短期、3 問題が複数の場合、

「大きな問題 2」: 目的が 1 運動,過程、2 長期、3 問題が複数の場合。

「大きな問題1」は、日常のほとんどの「問題」である。これを、技術の問題を中心に [DC　Denis Cavallucci, “How TRIZ can contribute to a paradigm change in R&D practices?”, 2012年第8回TRIZシンポジウム] と[LB　L. Ball,「階層化TRIZアルゴリズム」] が扱っている。但し、後者は、全体像が本で述べられていて明確であるが、前者はこの論文だけでは全体像は明確にならない。両者は、いずれもTRIZの個々の要素を統合して問題を分析し、取り組むべき矛盾を絞っていき、「物理的矛盾」を重視する点が共通した統合理論である。特に[LB]は、ゼロからあらゆる分野の全ての段階の「システム設計」をする態度と行動の指針になり得る。TRIZの個々の理論を制度に適用するように改良すること、矛盾モデルと論理である論理的網羅思考により、制度の統合理論の整理をすることが課題である。

これらに共通に、1 全ての認識や矛盾の両立を可能にする概念、用語の(再)設定、2 命題群、個々のオブジェクトの各階層の両立が必要である。つまり、概念・用語の問題、大きなオブジェクト、個々の小さなオブジェクトの両立が同時に必要である。例：後に出てくるマルクスの「必要労働」をめぐる検討。2020.09.22.23

「大きな問題 2」[IPSJ2017] の典型例が、本稿の論理的網羅思考という論理学をつくる問題、世界観を作る問題、生き方を作る問題である。

人は、「大きな問題 1」の目の前の課題を解決しながら、同時に「大きな問題 2」である世界と人の事実を認識し、より大事な価値を求めその価値実現のため努力してきた。これが人類の歴史だった。

「大きな問題 2」の解にいくつか可能性がある。

・自明である 1 種の存続、2 個の生物的生以外の、新しい 3 生の属性(の何か)を実現する。

・自明である 1 種の存続、2 個の生物的生を超える価値の探求を行う。

・共有価値以外の多様な個の中から生まれる新しい価値を見付ける。価値が、主体によって異なる「良いことまたはその基準」であるのは、対象化を前提条件にしている。

一体化が普遍の価値への道を拓く。

論理、世界観、生き方が、順次分かれて行った歴史がある。

これらから、概念を変える問題、論理学を作る問題、世界観を作る問題、主観と客観が一致する生き方を作る問題は、同時に解くべき「大きな問題 2」の要素と推測する。対象化と一体化の統一という解も出ている。ここから論理的検討を進めるのがよい。

3.5 矛盾の運動領域、矛盾の原動力

1. 変化変更矛盾の開始の原動力は一般に運動の原動力と同じである。

変化変更矛盾の開始の原動力、運動の原動力には、a 自律的力（二項間に働く力)、b 二項の外部からの力がある。b 二項の外部からの力には、b1 人が介入しない自然の客観的力、b2 人の価値に規定された意図的力、b3 人の価値に規定された力が働いているが長い時間、広い空間で人の意図が隠れ客観的力のように見えるもの、b4 それらの複合体がある。重力などの純粋な a と b3 の差は相対的である。b4 それらの複合体には、a－b3 までの力の副作用とそれを修正しようとする力が含まれる。

図 3.1 主観世界の、事実の認識と変更、技術と制度、事実の矛盾と解の矛盾

要するに、原動力は、自然の客観的力、人の価値に規定された意図的力、それらの副作用と修正作用である。[THPJ2012]

主観世界の運動領域の分類を図に示す。事実の認識と変更、技術と制度、事実の矛盾と解の矛盾が、それぞれ、領域の全部を覆っている。

2. 制度の場合、両立矛盾を始める時は、始めるための両立矛盾の条件と矛盾の解を同時に求めないといけない。

3. 一体型矛盾の原動力は、客観矛盾の場合は、外部の永続する強制力**（例：進化）**が矛盾を永続させる。いずれもエネルギーが前提である。

3.6 矛盾の種類（まとめ）

地球では、論理の歴史的結果が、今の矛盾モデル（または関係命題）に固定化されて行き、順に、後の高度な矛盾が、前のより基本的矛盾の上に積み重なりながら歴史的に発展する構造ができた。

（宇宙創成後）外力による変化・変更と（擬人的に言うと）機能と構造の矛盾。

→（生命誕生後）無意識の一体型矛盾(例：進化)。

→（知的生命誕生後）意図的変化・変更。

→（技術開始後）意図的な可能性と現実性の矛盾（可能な機能が現実になるかもしれないと意識する運動）、意図的な機能と構造の矛盾（機能を実現する構造を意識的に作る運動）。

→（農業革命、物々交換、制度・技術の文化・文明開始後）矛盾の発展した変形として、矛盾の二項の向上をもたらし続ける一体型矛盾として、意図的な対象化と(間違った所有と帰属の)一方向一体化の一体型矛盾（が機能と構造の矛盾と併存）。

→（今後）意図的な対象化と双方向一体化の一体型矛盾（が機能と構造の矛盾と併存）。

この歴史、エッセンスが論理学になる。

矛盾を分類することができるようになった。

矛盾の様々な分類について [THPJ2012] [THPJ2015/1] に書いている。おそらく不十分であると思う。なお、論理的に考えた矛盾と歴史を総括した矛盾は少し違っている。

同じオブジェクトに二つの運動がある。1 変化変更矛盾（変数 1）と 2 両立矛盾（変数 2）は独立した運動をするように見えるが、現実は無数の 1, 2 の運動の複合体である。

下記が今のところ、運動の構造を網羅していると考えている。しかし、矛盾の形式的網羅もまだ不十分である。今の時点での完全でない網羅である。

1) 変化変更矛盾

1. 量的変化を起こす（値）

2 に移行することがある。

2. 量的変化と内部構造変化が属性変化を起こす（値、属性）

エンゲルスの「質量転化の法則」に近い。例：水の沸騰、蒸気の液体化。以後 1 の運動を続ける。

2) 両立矛盾

両立を目指す運動過程を見る粒度と両立してしまった結果を見る粒度がある。

3) 一体型矛盾 [TS2011]、対象化と一体化の矛盾のまとめ 2020.12.01

宇宙開闢当初は存在と運動、空間と時間は分離しておらず一体だった。その後、これらが分離し、自律的に発展し続ける矛盾ができる。その後の、一体だったものが分化していく矛盾の原型である。

対象化と一体化に関して、細かく言うと次のような項目がある。

1 対象化の矛盾：変化変更矛盾と両立矛盾

両立矛盾に、必要性と可能性の矛盾、**機能と構造の矛盾**がある。

機能と構造の矛盾は次第に複雑になる。機能実現の副作用解消も、多様性と単一性の矛盾も、機能と構造の矛盾である。

2 一体化に関する矛盾

進化のような無意識の一体型矛盾と思考と学習、システムと運用のような意識的一体型矛盾がある。今までの意図的な対象化と(間違った所有と帰属の)一方向一体化の一体型矛盾が、今後の、対象化と双方向一体化、自由と愛の一体型矛盾に変わっていく。いずれも、自分とオブジェクトからなる世界を扱う一体型矛盾である。

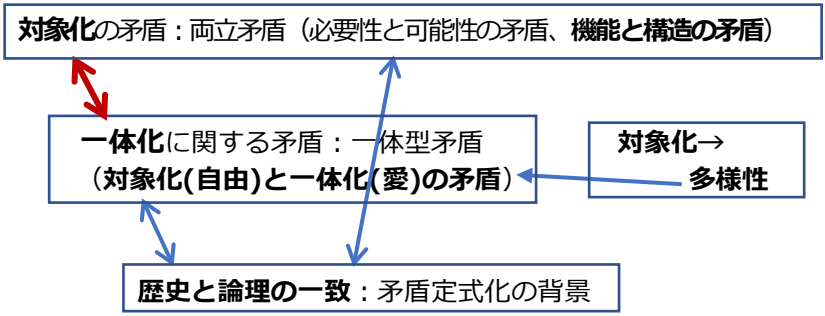

図 3.2　対象化と一体化の矛盾の概略位置

十分な対象化がないと多様な個は広がらない。個の多様性の開花には、可能性だけでなく社会的必要性が要る（5.4,5.6 節参照）。多様性が、双方向一体化を作る。

一体型矛盾、特に対象化と双方向一体化の一体型矛盾には、分からない点が多い。2020.11.28

各矛盾の属性、値との対比は[TS2011]にやや詳しく述べてある。

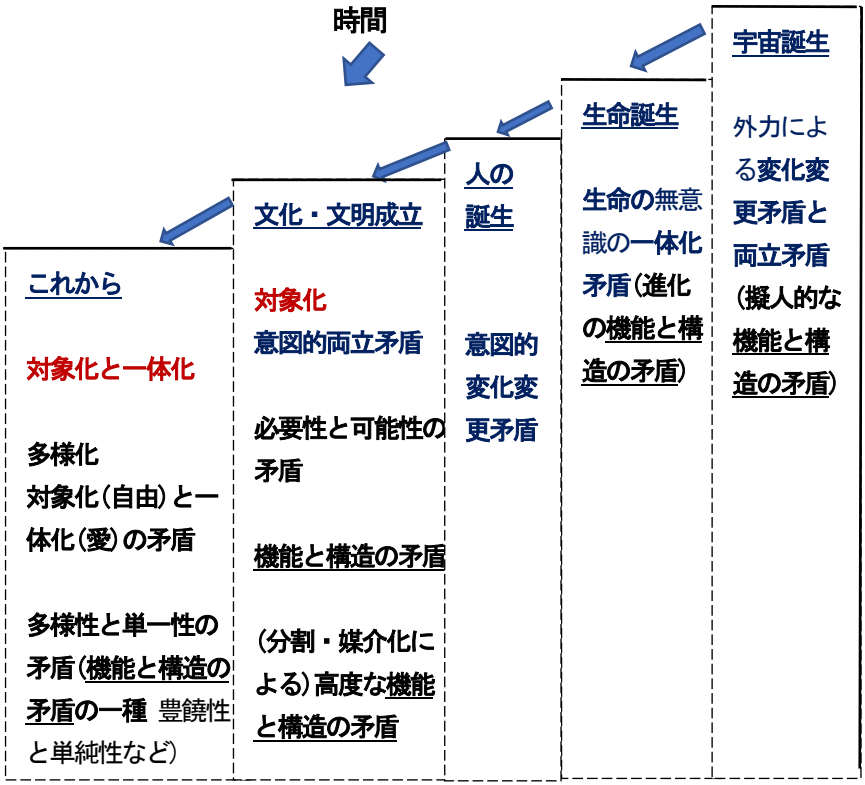

図 3.3 矛盾モデルの発展

表 3.1 矛盾（運動） [FIT2016 改]（おおざっぱ過ぎ見直しが必要）

矛盾	矛盾結果の型	運動の型	変化の型	注
1.変化変更矛盾	**11. 量的変化**	**永続的**	**値：量的**	自然、人工システム、生活における通常の変 変更。例: マントル運動
	12. 質的変化	**一時的**	**値から属性へ：質的**	自然、人工システム、生活における通常の変 質的変化を起こす。 例: マントル運動が起こす地震。化学反応
2.両立矛盾	**21. 二項の両立を実現** 通常の矛盾	**一時的**	**値：量的と質的**	例:機能と構造。二項が二値。例：暖かさの である温度は値。
			属性：量的と質的	例:機能と構造。二項が二属性。例：暖かさ 性。例:エンジンの大出力と軽量
	22. 二項の両立が質的変化	**一時的**	**値と属性：質的**	統合された二項の弁証法的止揚。 「正－反－合」
2 の一部：一体型矛盾	**23.** **特別な両立矛盾で両項を変更し続ける**	**永続的**	**オブジェクトまたは属性** **量的と質的**	各項が、他項を、自らの発展の条件とするた 項のサブ要素とすると、各項がお互いを変化 る。 例(二つのオブジェクト): 男と女。労働、交 費。生命の機能と構造。矛盾と論理的網羅性 対象化と(双方向)一体化。態度と認識・行動 虚さと批判。自由と愛。
				例(オブジェクトと思考)：認識と行動。技術 度。歴史と論理。感情と論理。内容と形式。 テムと運用。
				例(二つの思考、態度)； 単一性と多様性。 と豊饒性。集中と展開。展開と深化。分析と 成。思考と学習。リアリズムとロマンティシ ム。対象化と(双方向)一体化。謙虚さと批判 由と愛。 例(二つの概念)：対象化と(双方向)一体化。

4. 論理である論理的網羅思考の内容と方法 [FIT2010-16]

[TS2012] [THPJ2015/01]

行為を左右する精神のはたらき 2021.10 として感情と論理がある。本稿は論理だけを扱う。まず論理学を作らねばならなかった。論理の単位が、関係命題、矛盾モデルであった。次はその運用である。

4.1 論理である根源的網羅思の内容：全体、本質への思考

1) 思考、議論の機能、本質は、事実の認識や変更のより良い像を作ることである。2021.07.06 ,10.20 思考の大半は、意識していようがいまいが、意味のある並立を理解し論理の成り立つような粒度を決めることが占める。残りが、推論を進めて行くことである。推論がうまくいくように矛盾、命題を決めている。矛盾決定と推論の二つは同時に行われる。

重要な命題の両立に、1（認識の場合）原因と結果の両立である真実の発見、2（変更の場合）機能と実現構造の両立である制度や技術の実現がある。このためのキーは両立を成立させる粒度である。さらに議論の場合の前提は、お互いにこの両立を共有することである。2021.04.05,08,10.20

2) 論理である論理的網羅思考の内容は、事実と価値のより大きな全体と本質を求め続ける思考である。論理的網羅思考が始まるきっかけは、何か感じる、経験する、読む、書くことなどである。その感じる、経験する、読む、書く内容に、何か足りないという無意識の感覚、および意識的に網羅的なもの、全体を求める態度が、思考の原動力になる。読むこと、読み直すことは、考えることである。何かの「全体」を常に求め直し続け、どんな短い文でも網羅的並列的「全体」を表現しているようにすること 2020.12,2021.11.25。

論理的網羅思考の良いところは、扱うものの全体構造が、自然に透けて見えてくることである。そして一見、今までの既存の意見とは全く違う結論が出る。

本稿は、論理を扱い、感情・感性を扱わないが、機能を実現する構造を作る点は、工学の設計も制度設計も芸術作品を作るのも同じである。

認識は、受け身ではなく仮説を立てて行う積極的行為である。そうして 1 事象の並立が理解でき、2 変更や法則発見の思考ができる。3 議論も、相手の言の並立、整合性を理解して、はじめて批判ができるようになる。相手が事実誤認をしている場合は、事実誤認の理由を把握した上で、事実を提示する必要がある 2021.07.15。論理的網羅思考(の特に網羅の概念)が身に付くと、より事実と価値の全体を自動的に志向するようになる。FIT2013 は自動的に筆が進んで行く経験をした最初の論文だった。これにより、新しい思考と古い思考、あるいは自分の思考と他の思考が、弁証法的止揚により統合されて新しい像ができる。

そして既存の像が高い段階の像に作り替えられる。

生産労働では、客観世界に強制され、不十分であるにせよ弁証法的止揚は行われる 2021.04.26。弁証法的止揚による思考や議論は、政権、政党、行政、マスメディアなど、生産労働に直接関わらない領域においては、まだ、殆ど行われていない。かつ、政権、政党、行政、マスメディアが実質、支配層を作っているという問題がある。これらの領域では、あらゆる思考と対話がほぼ無効になっている。今までの政権、政党、行政、マスメディアなどにおける思考、対話の欠点は、既存のものの全否定、全肯定だけで、実質的に思考は進まず、議論は自分の意見の押し付けになり、相手の意見が自分の意見と同じだと安心し、違うと、相手が自分と違うのが気に入らないと表明して終わっている。

しかし、これは人類に可能性があるということである。これを変えると人類は画期的に進化する。変えられた集団、「国」は画期的に進歩する。いかなる立場の人との議論でも、**敬意**を払うこと、相手の言が整合的に両立していることの把握は大前提で(可能ならどうしてその言が出てくるかを理解して)はじめて議論ができる。

民主主義は、論理である論理的網羅思考によって実現できる。論理的網羅思考は、思考、議論の基礎であり、民主主義の基礎である。論理的網羅思考が難しいということは、民主主義の実現が実は難しい、ということである。多数決は例外的に非常手段としてはあり得る。多数決が許される場合の検討が必要である。

論理的網羅思考と矛盾による弁証法論理を普及させなければならない。思考方法、世界観、世界観が規定する価値観、潜在意識は、生まれて以来、行政主導の「教育」やマスメディアに刷り込まれていて、知覚、生理さえその影響下にある。上から与えられた民主主義は定着しておらず、日本の風潮は「空気を読む」「出る杭は打たれる」。今、インターネットの普及で意見の対立が顕在化している。

論理的網羅思考は、世の評論家の意見が、容易に対象化できその限界が丸見えになる長所、そう見えてしまう欠点がある。残念ながら、これは、論理的網羅思考をする人を孤立させてしまう。

4.2 論理的網羅思考の方法：粒度決定と推論

1) 準備

意識的な論理的網羅思考は、方法的には命題、矛盾モデルを使って、抽象化という粒度決定の縦の論理１と、推論という横に進む論理、具体化という粒度決定の縦の論理２の連鎖である。これが本来の思考である。中川徹先生の 2005 年の６箱方式 [中川Naka-2019]を、本来、思考の論理であると理解する。中川先生は、この思考の構造を世界で最初に明示的に明らかにした。私は FIT2014 以降、箱の「状態」

を「過程」に代えて述べている。一般に発想法、発明方法論は、全て思考全般の方法で、発想、発明に限らず、生活や労働の改善、生き方の改善等、考えること全般に適用できる。

論理は、認識の場合であれ事実変更の場合であれ、それらの対象である世界像、世界観を前提にしていて、世界像、世界観も論理によって作られている。

誰かが、全ては、自分とそれ以外の世界からできているという単純な世界像を言うとすると、その人は今の体と心からなる自分がいて、その自分とそれ以外の世界で全てが網羅されていると言っている。この中には、単純ながら極めて高度の抽象と推論が入っている。抽象の結果が、自分とそれ以外の世界,であり、推論は、この二つで世界が網羅されているという仮説設定である。抽象と推論の二つが論理である。多くはこの二つは同時に生成される。これは入れ子の同時生成でもあるが、主導しているのは論理であると考える。言葉の遊びのようだが、この発見は大きかったと思う。世界像の集積が世界観である。

おそらく、入れ子がはじめて作られるためには、入れ子を構成する２項のどちらかが原動力になる。原動力になるのは必ず運動である。運動である論理と、存在である世界像があるが、論理が主導して世界観は作られた。個々の論理の集大成が論理学である。

抽象と具象は単純な反対概念であるが、抽象化と具体化という運動は簡単ではない。抽象化は、事実、物事という全部から、その一部を引き(抽き)出すという一見簡単なことである。**抽象化**は、今、扱うことのできる「問題」(理想の目的,価値と事実の差)(新しい機能が必要か,理想化が必要か,不具合を直す必要があるか)を抽出するための運動である。無数の抽象化があり得る。2020.10.06,2021.05.02

「問題」には、目的,価値の（できれば網羅的把握の中の位置が明確になった）粒度把握と、それに対応する事実の網羅的粒度把握の双方が必要である。場合に応じた正確な抽象化は、物事を成り立たせている機能と構造の要素の二つの把握と、事実をどのような価値においてとらえようとしているかという態度に依存する困難な作業である。例えば、鉛筆を機能でみると、紙のような何かに何かを付着させて記録するための手段である。この鉛筆の機能の抽象化は、例えば「大気中で、何かに何かを付着させ結果が見えるようにすること」を抽出することである。2020.11.15

推論で答えがでた後の具体化は、問題が生じた現実に応じて答えを現実に実現する。**具体化**は抽出し特定した機能を実現する構造を作る運動である。

具体化は一つしかない。2020.11.15,2021.05.02 具体化は、次第に階層が細かくなっていく単純な流れではない。教室－筆箱－鉛筆というのはある空間的視点から見た構造の階層であり、次第に具体的になっているようにみえるが、教室の中のある要素が筆箱、筆箱の

中のある要素が鉛筆であるに過ぎない。それに、教室は、まず機能として制度であり、次いで制度の機能を実現する手段の一つとして部屋である。

2) 文、命題変更の種類、形式

1. 存在命題、属性命題、関係命題の区別 [THPJ2015-3]

命題は一文以上からなり、内容から、存在を表現する**存在命題**、オブジェクトの属性,機能を表現する**属性命題**、オブジェクト間の関係を表現する**関係命題**がある。属性命題は、述語が静的な形容詞、動的な動詞であるので、適切な用語でないかもしれない。関係命題は、二オブジェクト以上の関係,運動を扱い、次の二つがある。

1 オブジェクト間の関係命題：**演繹**。**帰納**。

2 条件命題：**仮説設定**。[TS2011] [FIT2014,15] [THPJ2015/3]

これらが論理の単位である。関係命題だけが矛盾で表される 2019.09.06 ので、とりあえず存在命題は形式論理に任せ、**弁証法論理では関係命題だけを扱う**ことにした（後で狭い意味の演繹、帰納は仮説設定で統一できることを述べる 2021.10.17.）2019.09.28。 **注**

注 関係する存在は ある という仮説を作る。私が何かを見れば、その何かはあるという仮説で考え行動する 2020.05.21。属性を持つものは ある という仮説を作る 2020.05.21。属性命題は、関係命題で扱うことができ属性は変更できる。

「われおもう。ゆえにわれあり」という言葉がある。（第２部）「われあり」は「神は実在する」と同様の存在命題である。従って本稿の弁証法論理では扱わない。一方、制度における神は共有観念で、共有は共有主体間の関係であり、その生成は、物々交換と同様に扱える。（５章）もの の存在と、神などの共同観念内の存在は紛らわしい。2021.02.16

また、始めに、事実を存在と関係（運動）で網羅的に全体をとらえきるために**存在**を考え直し、ものと観念の固定的ととらえられるものを、ともに存在ととらえた。この関係（運動）との対比でとらえる大きな存在と、存在命題の小さく限定した存在の区別も紛らわしい。2021.02.16

2. 形式：主部、述部の変更

命題生成と命題変更がある。命題変更だけを扱っているように見えるが、その過程における仮説設定が、命題生成である。命題変更の目的は、今の命題を正しい命題に変更することである。“正しい”を「正しい」と書いている時もある。正しさはいつも相対的であることを示すためである。

命題の変更の起動力は、目的と現実の差異で、手段は、論理的網羅からの選択である。

推論は、判断,命題を変更するための逐次思考である。変更には、同じ属性粒度の別の大きな又は小さな空間時間粒度への変更（帰納と演繹）と、同じ空間時間粒度

内の異なった属性粒度への変更（仮説設定）がある、と書いていたが分からなくなってきた。網羅できていない、又は正しい網羅でないかもしれない。2021.03.23

判断、命題の主部、述部の変更形式は次のとおり。[FIT2011]

21. 判断の主部と述部の構造そのままで変更

判断の主部、述部の1. 属性を変化させる、2. 属性を削除する、3. 属性を追加する。

22. 判断の主部と述部の構造を変更

判断の主部、述部について、同じ述部が成立する主部を網羅し新しい主部とする（より大きな粒度（抽象化具体化の程度）の主部に置き換える）。こうできると主部と述部は、同じ内容となり、言い換えとなる場合がある。そうして主部と述部を入れ替えると定義になる。例：存在は他の存在と相互作用するという命題(カント、マルクス)から、存在の定義を作る。例：商品は属性の集合体だという資本論第1章の把握を一般化し、存在またはオブジェクトの定義に拡張する。

23. 判断のインプットアウトプットの要素、条件の要素を網羅し変更

判断のインプット、アウトプットの要素、条件の要素を網羅し、それぞれと全体の粒度（抽象化具体化の度合い）を変化、削除，生成する。例：質量転化の法則の拡張。[FIT2009][FIT2011改]

3) 演繹、帰納の歴史、従来の定義

今の帰納と演繹などの命題の説明は、従来の形式論理の定義とそれ以外の定義が混在している。例えば、論理に「演繹と帰納がある」という説明もあり、「演繹、帰納、仮説設定がある」という説明もある。ここでは両方を扱う。

（分類1）事実の1 歴史的積み重ねの把握、2 歴史的変化,論理の把握、3 条件を実現する行為から、それぞれ1 帰納 induction（こうであればこうである、雑な表現である。以下も同じ）、2 演繹 deduction（この論理であればこの論理である）、3 仮説設定 abduction（こう変えればこうなる：二つのサブ命題が、条件たる前件と結論たる後件になる）が生まれ論理の原型ができていく。仮説設定は、仮説的推論などの訳もある。演繹は、事実の歴史的変化の蓄積からの「原因と結果」などの規則性把握によるもの、論理の把握による２種がある。2020.05.21,11.30。

（分類2）

・命題の別の小さな空間時間粒度の命題への変更である**演繹 a**（一般の特殊化 [石本新 ニッポニカ]）である。この演繹 a では情報が増えない）と「「原因と結果」などの規則性把握に基づいた正しい」推論の連鎖による(関係)命題の変更である**演繹 b**、**注**（形式論理でない「因果関係」の法則利用の推論以外の正確な推論もあるかもしれない。）

・粒度の命題の別の大きな粒度の命題への変更である**帰納**（特殊の一般化 [石本新ニッポニカ]である。この帰納は必ずしも正確でない）、**注**

・同じ属性粒度の命題の、別の空間時間粒度への変更、または同じ空間時間粒度内の別の属性粒度への変更である**仮説設定**（特殊の別の特殊化である。演繹bはここに入れるべきかも？2020.11.19）。

[DIA] [FIT2014] [FIT2015改] [THPJ2015/3改]

注：世の演繹、帰納の説明は多いが、その内容はバラバラである。特に演繹には、大きく上に書いた二種の説明がある。前のほうの演繹の定義は、形式論理上の定義である。

「人は必ず死ぬ。私は人である。だから（小さな空間時間粒度の）私は必ず死ぬ」といった通俗的な三段論法の例に、aとbの二様の説明が行われる。

4) 演繹、帰納の問題と解決

1. 演繹、帰納の問題

問題は、次の、従来の演繹b、帰納の問題を解決することである。

・演繹ｂの定義の正しさは、条件や、原因－結果の粒度に依存している場合がある。この定義の正しい条件を求めること。

・従来の演繹a,bの二つの定義の関係を明らかにし、情報の増える正確な演繹を作ること。

・従来の帰納は、物理的網羅ができないため類推であり厳密でないことが多い。厳密な帰納を作ること。

2. 解決：形式論理以外の推論を仮説設定に統合する [IPSJ2021]

問題を再検討し、演繹、帰納、仮説設定を統合する単純な仮説を述べる。（今までの改版は、概ね前の内容を保ちながら豊かにしていった。しかし７版の内容が違っていたので８版で書き直した。９版で８版の「一般－特殊」と「抽象－具象」の記述を書き直した。演繹と帰納が仮説設定で統一される理由に３種類あることが分かった。それを書いたがうまい書き方ではない 2021.08.31）

21. 準備１

混同されやすいのは「一般－特殊」と「抽象－具象」である。この感情に作用する影響を除く。

具象から抽出されたものが抽象なので、抽象は具象より論理的内容は必ず貧しい。同じことだが具象は抽象より内容は必ず豊かである。これは、今まで言われてきたことである。2021.01.09,10.27

しかし、特殊、個別から抽出されたのが一般、普遍だから、一般、普遍は特殊、個別より内容は貧しいとは言えない。一般、普遍は、特殊、個別に、粒度の普遍性

が加わるため豊かであり得る。これは、普遍性の論理的作用が大きいからである。(前に,似ている抽象化と具体化を述べた) 2020.12.18,01.17, 2021.05.02,07.06,08.05

なお、従来用いられている「一般－特殊－個別」は、単に「一般－特殊」を細分化したもので無駄である。というより、一般－特殊の相対性を意識させないなら、むしろ有害になる。2020.09.23,11.30

22. 準備２

１ 推論の正しさは、推論を行うものの価値観、粒度と論理的網羅の正しさに依存する。

２ その上で、一般、特殊の相対性の扱いを活用する。一般、特殊の差は相対的で曖昧である。

例えば、一般的命題にはさらに一般的普遍的な命題があり、特殊的命題にもさらに特殊な命題がある。2020.09.23,10.19, 2021.01.09 何となく普遍のほうが一般より普遍的だが、ここでは「一般－特殊」と「普遍－個別」をほぼ同じ意味で扱う。論理的網羅の粒度の大きい命題が一般的、普遍的命題であり、論理的網羅の粒度の小さい命題が特殊的、個別的命題である。

23. 検討の第１段階：個々の推論の論理的網羅による改善 [FIT2014,15]

・形式論理上の演繹ａは単に形式的な一般の特殊化である。変更のしようがないようにみえるが、論理的網羅を活用することはできる。(未検討)。2021.08.22

・ 正しい推論の連鎖による演繹ｂは、論理的網羅による仮説設定を行うことでより正確になる。例１：因果関係の法則的認識による原因を仮説として演繹を行う。例２：両立矛盾から条件を狭めて一体型矛盾を作る。2020.09.26

・ 従来の帰納の無条件の一般化を、論理的網羅の結果によって選んだ条件での一般化に代えることでより正確になる。例えば、従来の単なる今までの状態の延長を、要因の論理的網羅の結果によって過去から選んだ似た状態の延長に代えることでより正確になる。例：今後の気象を予測するのに、今までと似た気圧、気温、風速、海水温と同じ過去の気象のデータのパターンを選びその後の気象データを使う。この例では、今までの状態が,今後の状態であるという類推が、今までの状態と同じ型を持っていたものの、その後の状態が今後の状態であるという推論に代わっている。2020.10.17,2021.01.08 こうすれば、もう命題の一般化ではなくなり仮説設定である。これ自体が、演繹と帰納が仮説設定で統一される理由にもなっている。2021.08.26

24. 検討の第２段階：仮説設定で統一

一般、特殊の区別は相対的なので、特殊を極限まで拡大し、仮説設定(特殊化の別の特殊化)に、演繹(一般の特殊化)、帰納(特殊の一般化)を含ませる。[IPSJ2021 改] 2021.04.06 分かりにくいので別の言い方をする(こちらのほうが良いかも)。仮説設

定は、一般的な 条件－その実現 であり、演繹、帰納は特別な 条件－その実現 であるので、仮説設定は、演繹、帰納を含む。2021.08.23

こうして形式論理以外の推論である演繹、帰納、仮説設定を、論理的網羅のもとに仮説設定で統一する。2020.08.24, 10.11,11.19,08.26 論理的網羅と、一般と特殊の実際上の相対性の二つに依存している推論なので、完全ではないが、人が行いうる,より善い推論が得られる。2020.10.02,2021.04.06

推論を仮説設定だけに限ると「矛盾－矛盾の解」を「関係命題－推論」と同じように使え、矛盾（運動）モデルの今までの知見が活かせる。2020.10.24

全ての過程を、論理的網羅によって行えば、問題が改善する。どのような粒度と網羅を行ったかを明示するのが良い 2020.05.10。論理的網羅により決定する矛盾モデル(関係命題)と、論理的網羅による仮説設定による矛盾両立の求解 2020.09.16 が推論となる。

この論理の厳密さ正しさは、論理的網羅の中から選ばれた粒度（抽象化具体化の度合い）と推論の二つの正しさに依存して決まるヒューリスティックな推論である。

推論、矛盾の求解(仮説設定)は、次のように機能と構造生成が多い。

（外れるのが対象化と一体化のような概念変更）である。2021.07.01 1 認識については、11 自然の擬人的な機能と構造発見、12 人世界の機能と構造発見(例：物々交換という制度の開始)と、2 操作変更については、21 自然の変更における機能と構造生成、22 生き方における価値実現における機能と構造生成。2021.07.01

例えば、価値実現のための事実変更の場合、次の順に行う。

1 価値を目的に具体化した目的と現実の矛盾モデルの生成を行い機能の変更（例：部屋の温度が低いので暖めようとする。エンジンの出力を大きくしようとする)、

2 その副作用回避ともとの解の両立矛盾モデルの生成（例：エンジンの出力大と軽量化の両立)、

3 機能と実現構造の矛盾モデルの生成と解（例：エンジンの軽量化を実現する構造生成)。 [TS2010,12] [THPJ2012]

事実のより正確な法則認識も、自分の思考の変更も、他人の批判も同様にできる。これ自体、容易ではない。内容は例えば [LB 階層的 TRIZ アルゴリズム] に詳しく述べられている。

3．本稿の案の考察、今後の課題

根源的網羅による仮説設定という論理学の積極的態度は、自分でやってみないと身に着かない。それ故、今のあるべき生き方、社会を作っていく原動力になる。同時に、今の世界の問題解決の基本原理でもある。

論理学が主導して、哲学（論理学と世界観）、生き方、全世界の社会は、将来、基本が共通され、かつ個は多様に個性を伸ばしていき、同時に世界は発展していく。2021.01.09

本稿の案は（価値と事実の）論理的網羅が正しい限り近似的に正しい推論である。問題は、価値と事実の論理的網羅がされた中から選ばれた粒度の正しさの基準が、今のところ個人毎に異なっていることである。例えば、本稿で述べている網羅は、すべての人が納得してはいないだろう。これが、実際上、今の論理的網羅思考の限界である。全く普及していないが、考えること、書くこと（芸術作品を除く）は推論をすることである。論理的網羅の粒度の正しさと推論が命題の正しさを決める。新しい命題の新しい意味が重要さを決める。

4.3 論理の原理 [FIT2013] [THPJ2015/01]

最低限の共有すべき論理の原理をまとめる。二種の原理がある。細かな**オブジェクト操作の原理**と粗い**論理の全体原理**である。

まず個々のオブジェクトを操作する細かな粒度の原理がある。TRIZの「40の発明原理」（経験則）[THPI2015/2]を、[TS2008等]でやや体系的に見直した。この40の原理を、構造だけの原理に代える。点線下線は「40」に類似表現がある。下線はTRIZの40の発明原理に含まれていない。（**・オブジェクトの操作**を、全体を求めるために網羅し直し、粒度変更（抽象度の変更）を削除し、次の全体原理に含**まれる**ことを明確にする。2021.05.27,10.01）

・オブジェクトの操作：オブジェクト追加、取り去り、置き換え。オブジェクト分割、統合。二項を関係させる[SB]、これらの重要な応用；仲介(媒介)、入れ子。

あまり検討は進んでいない。これらについて、古謝、三原、中川の「TRIZ の解決策生成諸技法を整理して USIT の 5 解法に単純化する」[https://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2002NakaPapers/ETRIA02USIT0209/ETRIA02USIT020905.html] [TS2008 等]がある。優れた内容である。見直す必要があるかもしれないが行っていない。

もう一つは**論理の全体原理**である。目の前には必ず 粒度（空間時間、属性）の一部 がある。その扱いの基本は、1) 粒度と網羅の原理である。2) ここから全体への三つの道がある。2.1) 部分からより大きな全体を求める客観的内容、2.2) 主観的態度（理想的には、部分からも全体が見えることも目指す。2020.12.11）、2.3) 全体に向けての解決方法。次は、これをまとめた論理の構造である。

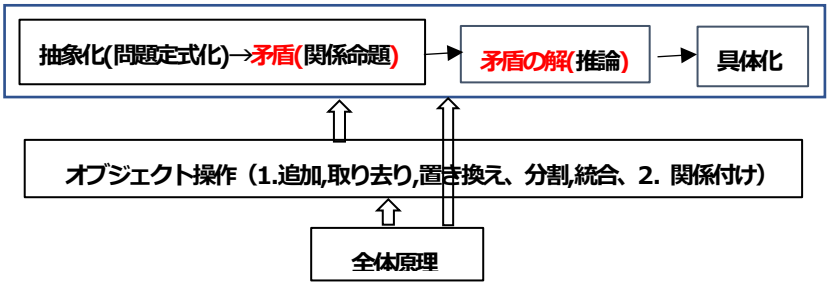

図 4.1 論理の構造

3) 最後に今、横行しているほとんどである 負の論理をまとめる。

なお、平松民平さんから教えていただいた「吉田民人ゼミ 13 条」がある。全体への態度をほぼ網羅するすばらしいものである。しかし何か足りない気がすると平松さんにメールで書いた。以下が、一応、網羅に近いと思う結果である。まだ改善が必要である。

1）粒度、網羅の原理 [TKHR 54]

1. 粒度、網羅について

論理を成立させる単位（粒）の内容を決めるのが、粒度(抽象度具体化の程度)である。扱うオブジェクトは、無限の事実から、ある粒度によって切り取られる。普通、人は粒度を全く意識しない。

有効な思考の大半は、意識していようがいまいが、意味のある論理の成り立つ粒度を決める抽象化が占める。残りが、仮説設定という推論を進めて行くことである。粒度決定と推論を進めていくことは、同時進行の過程かもしれない。オブジェクトの正しい特定から、より全体的本質的な認識像、変更の像の生成に進むことができる。

11. 粒度の原理 1：粒度変更により全体へ

何事にも、**全体は何か、全体の構造(要素間の関係)は何か、要素は何か、**という**両方向**（要素が新しい全体になる方向、全体が新しい要素になる方向）**の全体に向かって**続いていく三つの課題がある。空間、時間、属性のそれぞれの全体がある 2021.02.23,03.23。例えば今、注目するオブジェクト－上位の大きなオブジェクト－さらにより上位の大きなオブジェクト、というように続いていく。

これは思考や議論の基礎として本質的に重要で、すべての人とコンピュータに有用である。

粒度と網羅のうち、粒度が基本である。しかし網羅も方法上、大きな役割を果たす。これらが論理的網羅思考の重要さを生む。粒度、網羅は、以下各段階に共通に重要である。

12. 粒度の原理２：オブジェクト、関係の一般化 2021.07.17

扱っているオブジェクトを一般化できないか,考える。例：「商品は属性を持つ」（資本論）を、「あらゆるオブジェクトは属性を持つ」に変える。扱っている関係（例えば法則）を一般化できないか,考える。

13. 粒度特定のタイミング

意識的な粒度特定のタイミングは、理想的には、今、考え判断する時、問題をとらえ、解を出すあらゆる時である。実際には、個人の場合すぐに解の出ない問題に時間をかけ取り組む時、議論の場合自分の意見を相手に述べ粒度を示し説得する場合に限られる。

もう一つの、時に行う価値、真理、基本概念の粒度見直しタイミングがよく分からない。一週に一度とかタイミングを決めておいたほうが粒度の必要性を忘れないかもしれない。

粒度決定時の「問題」は、理想の価値と事実の差であるから、価値の（できれば網羅的把握の中の位置が明確になった）粒度把握の結果と、それに対応する事実の網羅的粒度把握が必要である。

新しい結論が出るまでは、粒度を変えないで、仮の仮説設定を繰り返す。結論が出たら、それは新しい粒度が確定したということである。小さな問題の場合、問題は粒度が決まれば解決できる。大きな問題の解決は検討し始めたが完全な答えは出ていない [ISPJ2017]。

2. 論理的網羅という論理,方法

本稿ができたのは、前提として「歴史と論理の(大まかな)一致」という仮説と「論理的網羅」を徹底して考えたことによる。「歴史と論理の(大まかな)一致」は前提なので、論理的方法としては「論理的網羅」だけである。「論理的網羅」の結果は仮説であり、常に見直しが必要である。論理的網羅思考の内容は、事実と価値の本質、真理を論理的網羅的に求め続けることである。

21. 網羅１：推論における網羅の利用

推論の中核が論理的網羅なので、網羅は粒度とともに重要である。

22. 網羅２：思考の手段(思考の出発点の全体把握のための網羅と、思考の途中経過での網羅)

1 何事も、全体は何か、全体の構造(要素の関係)は何か、要素は何かという三つの網羅がある。1. 要素が、新しい全体になり次に行く場合、全体が何かの要素になり次に行く場合、2. 認識の場合、構造生成の場合がある 2020.08.11。

網羅は全体思考の出発点になる。網羅によって必ず今より大きい全体が得られる。例：本稿の事実などの網羅的全体把握。本稿の矛盾の全体把握。本稿の論理学の構築方法。本稿の世界観の構築、その出発点になった対象化と一体化での網羅。本稿の生き方提案。

次のような問題は、小中時代から身につけるのが良い。

[東洋経済online 『頭の良い人は「何を、どのように」考える』『具体的で自分に近い話＝ミクロの話と、抽象的で自分から遠い話＝マクロの話。この２つを普段から意識して思考する習慣があるかどうか。2020.08.14]

２ 例えば、今書いている文の節区分、書く内容が、全体の構造が見えるように、扱っている事象を網羅するようにする。例えば１．思いつくまま列挙した断片について、２．個々の項目に名前を付け、関係を明らかにし、3．全体の中に位置づけ、4．足りないものを追加して網羅する。2020.11.01 平松さんの[HT2020]についてメールのやりとりをした時、こうした。

23. 網羅３：概念の網羅

・存在と運動(関係)。事実の要素が、存在と運動(関係)の二つに分化する。両方に含まれるのが時間なので、時間が主導するという仮説ができる。これは、「状態より過程が良い」等の仮説に合う。

・対象化と一体化：お互いに真の反対物である入れ子の網羅。もともと同一で後に分化した。

24. 網羅４：目的の網羅 [TS2007]

・価値を具体化する目的は、新しい機能を作ること、問題の不具合解消、理想化のいずれかである。これらは相対的でどれでも目的にすることができる。これは網羅され、全てダブっている。

25. 網羅５：目的と手段の同時網羅

新しい生き方の中に新しい論理学を作ることを作ることが入り、自分の生き方と新しい社会を作ることを同時過程にする。2021.08.05

3. 網羅の三段階の応用 [FIT2013] [FIT2012]

31.根源的網羅それ自体の有用さ、厳密な仮説設定

あらゆるものの個別の網羅は実際上、不可能である。だが型（種類）の網羅が構造的網羅的に行われれば、厳密な仮説設定が厳密な推論を構築する可能性が生じる。[RDI] [FIT2012]

次のいずれかから新しい発見、意味のある変更が得られる。

・ 同じ粒度（抽象化具体化の度合い）の網羅による発見、変更

文について、粒度（抽象化）を意識的に明確にし、主部述部の 1) 属性を変化させる、2) 属性を削除する、3) 属性を追加することが必要な例は多い。特

に、3）の例は多い。[TS2011改] 例：矛盾の型の網羅は、運動の種類を網羅、拡張した例である。[FIT2008-12] [TS2008-12]、[FIT2009] の量質転化の法則の拡張。

・新しい粒度（抽象化具体化の度合い）での関係の発見、変更 例：生産力と生産構造、生産の機能と構造の矛盾。進化の法則の発見。

32. 論理的網羅思考単独の思考サイクルによる有用さ [THPJ2012]

設計は、機能、負の機能、構造の三者を次第に具体化し両立させていく作業であり、論理的網羅思考のサイクルの例である[ISPJ1994][LB, A-E章]。

33. 矛盾と論理的網羅思考の相互作用による認識と行動の進行[FIT2013改]

変更についても、認識特に法則の認識にも有用である。例：[FIT2016]、本稿の対象化と一体化の矛盾の発見。

4. 網羅の把握の困難さ

空間、時間、属性の粒度、網羅の把握は難しい。粒度（抽象化具体化の程度）と網羅は、普通意識されていない。・オブジェクトの粒度→ 網羅された当オブジェクトを含む全オブジェクトの粒度→ その一段上の全オブジェクトにおける粒度→ さらにそれより上のオブジェクトにおける粒度を決めないといけない、というように続く、またこの逆方向に続くからである。実際には、全体の中の位置把握にとどめないといけない場合が多いが理想は網羅である。

・一直線に並ぶ目の前のオブジェクトの網羅のように簡単にいかない。世界の事実、人の認識は日々変化し、実現可能な価値も時間をかけて変化している。

・事実自体の空間的複雑さ、事実自体の時間的複雑さ、ある現象に関係しているのがどの現象なのか、自分が価値としているものが事実のどういう粒度（抽象化具体化の程度）と関係しているかがよく分からない。

網羅の対象も、単純な直列、並列だけではなく木構造、入れ子構造も含む複雑な構造を認識して後、決めなければならない。

2）論理の全体原理（再構成 2021.10.01）

2.1）客観的内容

1. より大きな価値と全体を求める１：条件より内容。大きな価値が優先

11. 条件より内容が良い。条件より目的、内容の問題の方が圧倒的に重要である。例：今 2019-21 年の働き方改革の欠点は条件改善だけになっている点にある。働く目的が金儲けで、人の主観的幸せと客観的価値増大ではないことが心に重圧を与えていることが主問題である。今の労働運動は、ただ労働条件改善運動である。

12. 大きな価値が小さな価値に優先。価値についての原理は、空間的、時間的、機能(属性)的に大きな価値が小さな価値に優先する。[THPJ2015/1,2]

本稿では、仮に種の存続－個の生－個の属性という実現価値の大きさの系列を前提にしている。衣食住の水準の向上は、「個の生」の価値の向上である。大きくいうと、歴史は今まで、小さな価値の実現からより大きな価値の実現をし続けて来た。

「種の存続－個の生－個の属性」の三つの中にも階層があり、空間的、時間的、機能(属性)的に大きな価値と小さな価値をうまくとらえられてない。

・ヨーロッパでは死刑廃止が主流である。日本は死刑賛成が大勢である。・人の遺伝子操作も問題になっている。・人の生死以外の全ての日常にも、これに類する多くの課題がある。・2018 年に、人を殺す判断を AI に任せて無人で行うことの是非が問われたが、平行線が続いた。

2. より大きな価値と全体を求める２：過程重視

・同じ意見を共有する人の集団より、考える方法の共有の集団が良い。

・個々の行動より常なる態度が良い。例：聖書「山上の垂訓」、「ヨハネの第一の手紙 3 章 15 節『兄弟を憎む者は皆、人殺しです』」2019.11.27, 2019.12.22,24

・存在、その状態より、関係（運動）、過程が良い。

一般に、理想を、ある水準を超える状態だと考えると、努力を持続してもいつまで経っても理想は得られない。努力が不可欠である。これも時間から述べた理想への近づき方である。

理想は状態ではなく、努力の運動、過程であると言う意味の文が「ドイツイデオロギー」にある。マルクスとエンゲルスは「『共産主義』とは「つくりだされるべき何らかの状態、現実が則るべき何らかの理想ではない。（中略）現実の状態を廃止する現実的な運動のことである」と語った。[DI p.68]

ここでのマルクスとエンゲルスによる理想への態度は正しい。ただ、共産主義の二人の把握内容は完全ではなかった。彼らの解は完全でない。この引用は理想のあり方について語られた内容でありその限りで正しい。宮沢賢治が 1926 年に「農民芸術概論綱要」で「永久の未完成これ完成である」と似たような表現をした。マルクスとエンゲルスは、これより 80 年ほど早い。ある人から「これを知るを知ると為し、知らざるは知らざると為す、これ知るなり」（論語）という文があることを知らされた。石崎徹さんのブログ内であるが、石崎徹さんに消されてしまった（第2部）。

実は、「理想は状態でなく運動、過程である」ととらえることが、生きる態度にどう繋がるのかと自問し、答えが出るのに一日かかった。普通の人には自明なのかもしれないが書いておく。

生きる態度は、今の一瞬の「態度－方法－行動または認識」という連鎖の中の一番はじめにある。

「態度－方法－行動または認識」の全ての要素が運動、過程であるとより整合的な全体ができる。

これから次のようになる。全部を完全に求めることはいつまで経ってもできないので関連する努力をいつまでも続けるしかない。これは空間的関連と時間から述べた理想への近づき方である。

以上は、理想とそれを求める方法だけについてだけではない。法則や原理を求めること、全ての人が幸せにならないと誰も幸せにならないことについても同じである。さらに、複数の課題解決を必要とする生き方のような大きな問題の場合、全ての人、少なくとも多くの人の努力が要ることになる。

空間と時間の二面から同じ結論が出る。関連する全部の課題の努力を常に続ける必要がある。

2.2) 主観的態度：事実と価値の見直し、自己対象化と他オブジェクトとの一体化による全体化

1. 常に事実と価値の見直し

11. 事実、価値の空間的論理的相対性ゆえの態度

事実にも、価値にも、論理（または方法）にも事実や価値の法則性にも、そのそれぞれに、より大きく正しい**本質、全体**がある。空間的な事実と価値の全部を完全に求めることも、いつまでかかってもできない。だから努力をいつまでも続けるしかない。より大きく正しい**価値と真実**を求め続けなければならない。例：「歎異抄」の「悪人」。

12. 変化性ゆえの態度

価値も事実も長い時間粒度（抽象化具体化の度合い）で変化している。時間的に事実と価値の全体、本質は、いつまで経っても完全にはよく分からない。だから努力をいつまでも続けるしかない。

ヘーゲルが「悪とは歴史の発展の推進力が現れる形式」と述べ、エンゲルスもフォイエルバッハ論[F]で賛成し論理を展開している。これは、今の価値が常に新しい価値に代わっていくという前提で述べたものである。誤解される表現だが、価値の見直しが常に必要であることの、極端ではあるが別表現と言えなくもない。彼らの善悪の価値と、本稿の種の存続、個人の生、生の属性である自由と愛という価値は粒度が異なる。どちらも正しい。従って、今の価値の見直しも時々行う必要がある。

事実も、より大きな粒度（抽象化具体化の度合い）に変更し、見直しを続けなければならない。国についての態度などである。

13. 関連性ゆえの態度

弁証法的世界観では、あらゆる物事が相互に関係しながら、運動、変化をしている。内容の本質、全体を理解し全ての個々の問題を同時に解く必要がある。事実の各粒度（時間空間、属性）も、価値の各粒度（時間空間、属性）も、論理（または方法）もお互いに関係している。そして、法則性は、事実の各粒度（時間空間、属性）にも、価値の各粒度（時間空間、属性）にも論理(方法)にもある。これらを定式化することを、永久に続ける必要がある。これらは同時にしか求められない。

個々の結果を得ることもさることながら、内容的には、同時に全てを求めようとすることが不可欠であり次第に可能になっていく。当たり前かもしれないことが自分にとって大きな発見であった。

2. 自己対象化と他オブジェクトとの一体化による全体化

さらに、まだよく分からない次の問題がある。

人の属性についての価値である自由と愛については、誠実さを前提としている。（客観的な）口先だけ善を装う偽善、人を騙す欺瞞は、誠実でない最たるものである。多くの場合は、偽善・欺瞞であることを意図せず意識もせず、結果として偽善・欺瞞になってしまう場合が多い。もちろん意図的な偽善・欺瞞もある。両方が客観的偽善・欺瞞である。

問題は、「価値の大きなものが優先」という「原理・原則」をそのまま機械的に適用すると、より大きな正しい価値、「大義」のために「偽善・欺瞞」である手段を取ることがあり得る、実際にも多いが、これが良いのか？ということである。形だけ「大きな価値が小さな価値に優先する」と、テロや諜報界の無法を正当化する場合がある。

これを扱う大きな原理がない。そのためにも、自分を相対化し続けより大きな全体を求め続けなければならない。自己、自組織、自「国」の対象化,相対化、相手を含む他オブジェクトとの一体化意識、敬意が、常に同時に必要である。これは全体を求めないと一部も得られない好例でもある。

2020 年、年明け早々の、米軍によるイランの革命防衛隊スレイマニ司令官殺害があった。スレイマニ司令官殺害はトランプ大統領の指示による。オバマ大統領時代のビンラディン殺害と同じである。人を殺すことは「悪」である。問題はこの小悪を善とする大義、大善があるかということである。革命防衛隊は、イラン国内では、経済組織であり、反政府の 1000 人を超える殺害を行った弾圧部隊、海外でも超法規的諜報機関である。ホメイニ師・革命防衛隊と、大統領は一枚岩でもない。個人的には、客観的にこの殺害が多くの人の命を救う可能性が大きく「小悪を善とする大義があった」気がする。アメリカの諜報機関が小善だった例である。国際法上の問題はともかく、この一般化はできていない。

さらにその上に次の問題がある。同じ問題かもしれない。

・宇宙にとって、全員の正しい生き方と知恵の結集を目指した方がいいのか、それとも全体としてある期間のエネルギーを最少にする方がいいのか。
2019.12.07,2020.12.11,2021.07.20 知識を持つと、その知識についての実現にも非実現にも責任が生じる。だから、自由になればなるほど、自由になって得た力は、自己を対象化,相対化し相手やと他のものと一体になり相手や他のもののために使わなければならない。
ほっておくと人間は必ずしもそうせず、自分のためだけに使いがちになる。一体になるものを、親子や国に広げるのではなく他人や他国に広げなければならない。
実は、この文を、親子や国に広げる「だけではなく」と書き始めかけた。「国」に広げるのは当然だろうか？自分の「国」と他の「国」を同格に扱う気持ちにならないと、つまり、国を県や市と同様に扱うようにならないと戦争はなくならないのではないか？今の「国」を誰も疑っていない。注意しないと「一体化」を単純には扱えない例である。戦前の「忠君愛国」も一体化であった。「忠君愛国」は全否定すべきか？それともかつての「忠君愛国」だけが間違っていたのか？今は、全政党全マスメディアが国家第一主義であるが、オリンピック中継でアナウンサーの愛国心押し売りに嫌気を感じる人も多かった。2020 東京ではだいぶ良くなった。2021.10.01 価値と事実を対象化相対化する態度が常に必要である。自分を対象化相対化し続け、より大きな全体を求め続けなければならないが、その中で**自己、自組織、自「国」の対象化,相対化、相手を含む他オブジェクトとの一体化意識、敬意**が、常に同時に必要である。これは全体を求めないと一部も得られない好例でもある。
2020.05.10 対象化と一体化、自由と愛の統一の実現がより大きく新しい価値を作る。一体化、愛は扱う範囲対象化範囲を広げる最大の手段である。

2.3) 解決方法：態度と手順

1. 常識を捨て論理のゼロベースと事実のゼロベースで考える

ゼロベースに二つ意味がある。

11. 事実のゼロベース；今の事実である現実は、宇宙誕生以来今までの歴史の網羅的総括である。常識を捨て、今をゼロとし現実を細部までそのまま認め、これからの変化、過程を重要視する。この根拠は、今の事実である現実は、論理によるのであれ、偶然の微細な差異によるのであれ、
宇宙誕生以来の歴史の網羅的総括であり、細部にも意味がある、ことによる。

12. 論理のゼロベース；分からない時はゼロから考え直し網羅し直す。**価値、目的、論理を見直してみる。**

問題解決、矛盾の解は、価値を具体化した目的と現実の差異解消を行うものが大半である。価値、目的、論理が違っていると、当然、正しい解は出ない。実際に、価値、目的、現実把握が違っていることは非常に多い。例：お金を価値とする資本主義

の矛盾の解は、生産手段の社会的所有、管理ではなく、お金だけが価値でないポスト資本主義に進むことである。個々の検討で、今までの検討のさらに一段階上の問題の検討をしている際に、今までの内容の間違い、修正点に気づくことが多い。これから「より大きい課題を考えることは、無意識に今までの総括をしている」という仮説ができる。

根源的網羅的に考えることは、既存の改良でなく、過去の客観と思考の**歴史全体の総括によるこの二つのゼロベースでの再構築**である。既存のものの改良より、ゼロからの再構築が結果は必ず同等か優れている。既存の思考資産を使えないという欠点はある。結果重視か、物理的資産は必ず活用しながら既存の思考資産重視か、の程度は問題の根本性に依存する。

2. 異なるものを両立させる 2021.10.01

21. 客観的事実については、各事実を両立させる仮説を作り検証する。検証には時間が掛かるものが多い。結果が分かるまでは分からないと明確に示す。例：第2部の新型コロナウイルス問題。

22. 一つの事実の二つの対立意見について

今、対立しているものこそ、両立するべきもので、両立できるものである。

3. 一瞬の変更は全体化で、時間的実現は究極的に一体型矛盾で。

2021.10.22-24

31. 概念、価値の一瞬の変更は、全体化で

推論の例：演繹と帰納も含みながら弁証法的に否定して仮説設定で統一する。

2021.10.17,18

価値、目的の例：対象化から対象化（自由）と一体化（愛）の統一へ。2021.10.24

32. 認識は個々の事実要素が整合的に両立する仮説で、態度や事実の時間的実現は、究極的に一体型矛盾で

時間的実現は、究極的に発展する一体型矛盾を見付けることによる。究極的根本的手段は一体型矛盾で、事実の弁証法的否定は一体型矛盾に進むこと。

2021.10.17,18

例：哲学の中の弁証法論理学と世界観、この例は、弁証法論理学が世界観より優位で２項が対等でない例である。３章参照。例：復讐の克服のためには、1 双方向一体化が必要、2 その前提は相手の行為の全体把握。（うろ覚えだが、何十年前、犯人がバスに油をまいて放火し何人か亡くなった事件があった。遺族の何人かが(犯人に同情したわけではなかろうが) 犯人が事件を起こした事情を理解した。この一般化が必要 2021.10.23）例：(第２部に書いた)エネルギーの未来のように、未来の本質が正しく、実現構造の容易な案が良い。本質が正しいゆえに実現構造容易になる。2021.10.19

人類の存続－個の生－個の属性」の順の価値系列が前提で、あるものへの態度の時間的順番は、１．扱う事実を決める。2．扱う事実の全体の中の位置を知り、要素の論理的網羅を行う。**個々の事実要素が整合的に両立する仮説**を作る。3．２で事実像が深まり、より大きな価値とより正しい真実を求めることができる。（1 の補足：事実像を作るのは世界観によるのでなく実は認識の論理によっている。2021.09.27,10.04,15）例：コロナ問題(第２部)について特にこれを意識した。2021.10.13 4．必要な場合、論理により変更する。これらの行きつ戻りつ,の相互作用の連鎖である。（4 の補足：４の論理は操作の論理。1,4 の論理はいずれも両立の論理）５．究極的には**一体型矛盾**にする。これが当てはまる範囲？2021.09.27,10.04,15,24

4. 全体と部分の方法原理

41 問題はなるべくローカルに処理するのがよい。

小さい粒度、範囲のままで問題をなるべく広げず個別に解決するのが良い。エネルギーと もの はローカルに処理が完結するのが合理的であるのと同じである。第二部 ポスト資本主義の準備のところで触れる。充分な検討が進んでいない。部分が全体になっていることを目指す。2020.12.11

42. 複雑な問題の解決

1 本来の空間的態度１：大まかな解から細かい解に移る。例：[IPSJ1991]、本稿 2021.02.13

2 本来の空間的態度２：全体に貢献するように部分を解く。全体の中の位置を知って解く。

問題の内容の本質を理解し、全ての個々の問題を同時に部分毎に統一的に解決する。あらゆる物事は、相互に関係しながら、運動、変化をしている。したがって、内容の本質全体を理解し全ての個々の問題を同時に解く。しばしば、1 大きな問題を網羅的に分割し、分けた個々の領域で（自動的に）論理を展開して行くと、全体像が分からなくなる、2 しかしその中で、全体の構成部分の複数の粒度（抽象化の度合い）の統一的同時成立が解決に近づく、というサイクルがあった。[FIT2016]。

3 とりあえず空間的部分の解決、より大きな問題としての解決

問題が解けない場合、1 問題を部分に分け、部分を解決していく、それに行き詰ったら、別の部分の問題を解いてみる、2 より大きな問題としてとらえ直してみる。問題は関係し合っているので、どちらもお互いに有用である。3 より大きな問題の解決に、部分の解決が役立つことがある。例：推論を仮説設定で統一する検討（4.2 節）。2021.04.07

4 副作用の時間的解決

何かを変えると通常副作用が生じる。それを解消するための変更をする。これは普通の機能と構造の矛盾の場合と同じである。何をする場合にも当てはまる。

5. 極限を考える

あるものの粒度を、1 極限まで変えてみて、そうしたらどうなるか考える。2 その実現のための手段を考える。1 概念を極限まで変えてみる。例：一般、特殊の区別は相対的なので、特殊を極限まで拡大し、仮説設定(特殊化の別の特殊化)に演繹（一般の特殊化）、帰納（特殊の一般化）を含ませる。[IPSJ2021 改] 2021.03.18 2. もし手段があるとしたらどういう形のものだろうかと考えてみる。数学で、任意の関数がもし級数の和で求められるとしたらどういう形になっているだろうかという、およそ数学とは関係ない発想をした人がいた。この工学的発想でテーラー展開などが生まれ、その後、級数の和で求められる条件などの全体も分かっていった。この発想から、デルタ関数、虚数などが生まれた。

3) 負の原理：判断を間違わせ、相手を騙し騙される経験原理

論理的網羅思考に反し、誤判断を起こすあるいは相手を騙す経験則をまとめる。

1 事実の粒度の間違い：例の一般化、例を証明に使うこと、部分だけを取り出してそれが全体だと一般化する。これらは極めて多い。殆どだと言ってもいいくらいである。

2 価値の粒度の間違い：感情に入り込み易い小さな価値の問題を大きな価値と思い込むあるいは思わせる、自集団の価値が普遍的と思わせること等。

3 感情、論理、行動のすり替え、誹謗中傷は網羅できていない。

31 感情のすり替え

1，2 等とあいまって、宗教上の折伏などに利用される。感情を利用して小説「異邦人」の主人公から虚無主義の生き方を作り上げる例があった。私は、この虚無主義を肯定する美文[http://maganetoru.blog.fc2.com/blog-entry-1373.html] から抜け出すのに2，3日かかった。人は、努力して結果を得る論理,哲学、生き方が身についていないと、努力せず楽をする生き方に惹かれてしまう。難しいのは、自分の態度になってしまった、この対象化しにくい 内なる陰湿な敵への対処である。彼は、この敵を、努力する論理,生き方を知らないため報われなかった時を代償に、合理化し半ば本気で外に出した。この美文で、多くが努力しない気楽な生き方を意識するようになった。このブログを初めて読んだ時、私は、努力して結果を得る論理,哲学、生き方が身についていなかった。2021.02.11,03.05

32 論理のすり替え

・相手の言に悪意を含んだレッテルを貼る。

・相手が正当な理由で発した言を、悪意でそう言ったと言い張る。

・相手を誤解しあるいは誤解したふりをし、相手が間違っていると言い張る。あるいは混乱して理解し、混乱していると言う。これらは多い。政党などが堂々と使いマスメディアが同調する。批判対象の意図を理解した上で批判するのがよい。

例：何年か前、関西電力が『原発推進のため、原発を再稼働させないと夏の電力需要が満たせず、停電を余儀なくされる』と言ったことがある。実際は停電せずに済んだ。「左翼」政党

は、電力会社をうそをついたと非難した。実際は、省エネが行われ、電力会社は、停止していた旧型火力発電を再開させるなど必死の努力をし、停電を防いだ。例：うろ覚えだが、旧民主党の某氏の質問に、法務省の役人が、東京地検の前の検事長はなくてはならない人だったと国会で証言した。某氏は、当検事長の退任後、退任後に同氏がいなくなり何か困ったことがあったかと役人に質問したら「特になかった」という答えだった。これらを某氏は「矛盾」していると非難した。これも努力で乗り切ったのである。この二つは、野党の劣化の例である。
2020.08.13

33 行動のすり替え

・行動すり替えに、単純な軍部、諜報部門、外務部門の政治力学、政治心理学戦略がある。例えば、外部に敵対物を作り対立しながら自分の組織の発展のために帰属意識を高め内部を団結させる。今の「国」は資本主義が作った「国民国家」で、国を管理するために他国を排除する「愛国心」も作られた。日本の右派、リベラル（ごく一部を除く）左派の全てが「愛国」であり、かつこれが作られた固定観念であることを自覚していない。昔からある宗教内部の対立、覇権争い、戦後作られた資本主義国家と「社会主義」国家の対立、9.11 事件以降のアメリカと「イスラム」の対立などは、明らかな「作られた」共同幻想であり普及している。諜報部門の問題には下記の例がある。・自らが自国で行う非公表超合法の行為(「平和的」な知識人や世論への働きかけ)、

・外国で行う非公表の行為（政権転覆クーデターの支援、騙しやすい精神構造の原理主義宗教などのテロを支援し戦争を起こさせる行為[Tana]、特に敵の弱点把握による働きかけ、例えばカジノを含む統合型リゾート IR では、米中の、相手国の政治家や官僚などの弱点把握による働きかけ等）

・やり過ぎて失敗し元と正反対の目的を達成する。昔から内部の一部が挑発して全体を故意にやり過ぎ失敗させることはあった。今も多い[Tana]。

1.2.3. は、労働以外の日常の判断の大半を占めている。1,2,3の全てについて、この間違いを直す努力が必要である。また、特に2と3は、対象化と一体化の統一ができればなくなる。このことで、対象化と一体化の統一という、一見将来の遠い課題と思っている内容の実現していないことが、現実の殆どの論理を支配していることに気づく。2020.10.20,12.08

5. 対象化と一体化、自由と愛の統一による生き方

論理学の主に論理的な検討が終わった。次は歴史的に見た論理学による(世界観と)生き方である。

5.1 弁証法論理と歴史

1) 客観世界と人の違い

1. 客観世界と人の生に、共通なことがある。

・何事も、始まりとその後の運動の歴史がある。

・二項のモデルでの、外部または内部の差異とエネルギーが運動を作る。この双方向運動（矛盾）の、入れ子と直並列,階層的並立の全体がある。

2. [THPJ2015/1]の冒頭に、次のように書いた。

人は、世界と人の事実を認識し、より大事な価値を求め、その価値実現のため努力してきた。

1 時に抗しがたい状況もあったが、それでも懸命に人が生きてきたことを表現し伝えてきた。

2 事実認識、より大事な価値認識と価値実現方法について、分かっておらず解決できていない課題を表現し伝えてきた。

3 事実認識と価値認識の結果及び価値の実現方法を表現し伝え実行してきた。

人が生き、世界に対し行ってきたことはこれだけだと思う。[THPJ2015/1 改]

人の生活、思考や対話は、論理と感情から成り立つ。ここでは論理を扱う。上の 3 を言い換える。

人類は「無意識に又は意識的に価値と考えているものから仮に作った目的と現実との差異」＝問題を設定し、論理,方法を作ってその解決を図り、実現がうまくいかなければ、目的か論理,方法を変更しさらに繰り返す、というサイクルを続けてきた。[FIT2016 改] 新しい価値を見つけそれを実現することが人類の歴史だった。

他生命との共通点である「食べて個体を維持し子を作って種を保存する」ことについても、人のこの特徴が反映されたものになっている。

3. 偶然の微細な差異がその後の歴史に決定的な影響を与えてきた。

おそらく客観世界もそうである。人による客観世界の近似モデルがある。客観世界は、ある粒度での（その粒度は後から分かる）差異が生じ運動が行われる。ある粒度の差異により運動が起動されて起こった結果、複数の物事の両立がある。それらから宇宙や太陽系や地球の生成の歴史、人類の歴史、それらの原理が得られる。閉じた客観世界は、エネルギーを最少にする原理、物質・エネルギー保存則を内蔵している。以上は一般論である。

2) 人類に残っている論理的課題

1. 準備

・価値は、今までは、漠然と個々の人にとって良いことの内容またはその基準だった。価値とは、良いことまたはその基準である。この良いことは、今は主体による対象化を前提にしている。

究極の価値は日常の歴史を総括して得られる。価値 ←目的 ← 機能 ← 意味 ← 事実の属性（1 章）[THPJ2012]。事実が変わると属性、共有価値が変わる。自分と別のオブジェクトとの一体志向である一体化が加わると、自分の価値だけでは語れなくなる。一体化が加われば、理想は全てのものの価値の最大化になれる。

・文化・文明成立後の人の歴史では、歴史と論理は大まかには一致する。

究極の価値は日常の歴史を総括して得られる。文化・文明成立後は、歴史から本質だけでなく価値、理想を求めることができる。この事実の本質、価値は、扱う歴史の長さ、どういう前提の歴史であったか、歴史が成熟しているかに依存する。

この成熟した歴史とは人類の場合、物々交換から今までの約六千年の歴史だった、というのが仮説である。この歴史を扱う時間範囲は、マルクスたちの「唯物史観」と一致する。つまり、扱う時間は、農業革命後の生産量増大を受けて、物々交換が成立して以来の六千年間である。

資本主義は「唯物史観」の「今までは支配階級と被支配階級の歴史」という史観を、ほとんど壊してしまった。所得税、相続税の累進課税などによる再配分は行われており、企業年金も、長くなった退職後の生活を支えている。今、資本家と労働者という階級もなくなり両者間の「闘い」もない。

所得格差はある。この格差の「原因」は、実体経済の給料の差よりも株の操作や先物取引などの非合法に近い所得や金融経済によるところが大きい。困ったことに、背景にあるのは階級対立でなく、経験則で語られている「二割の努力する少数と、それに従う八割の多数で世界が回っている」という普遍的な原理らしい。階級対立なら簡単だがこの解決は難しい。

・求める前提と仮説を述べる。

求めようとしているのは、**種の存続－個体の生という価値・大事さの系列に続く「生の属性」**の内容である。但し、個体の生という価値についても、老衰で死にかかっている老人の価値と生まれたばかりの赤ちゃんの価値の差など、本質はよく分かっておらず表現できてないことが多い。建前では「人間は、皆、平等」である。どちらにせよ「種の存続－個体の生」は比較的に単純だが、「生の属性」は、そうでなく生き方によって動的に得られる価値で、殆ど分かっていない。

誠実であることを、検討の前提としている。嘘をつかない、約束を守る、偽善・欺瞞のないことは、誠実さの前提で、同時に生の属性の一部である。2021.07.21

人は皆、持っている無限の可能性(１章、5.6 節)を開花させることができず生き死んでいく。課題は、人の可能性を開花させ世界を良く変えるための論理学、世界観、価値観、生き方の検討である。

自分が他のあらゆるものに「生かされている」という認識は必須である。それを前提に、まず自分と現在をありのまま認め、価値系列上の生の問題の次にある、人のどう生きるかという生の属性についての根本的な矛盾がある。それは、人の可能性を開花させ世界を良く変えるための哲学、生き方の検討である。人の価値の全体は、客観的価値と主観的価値に分けられこの統一が課題である。

人の客観的価値は、人の外部に対する機能の価値（またはそれと一対一に対応している機能属性の価値）と、負荷のマイナス価値の総和である。

人の生命の存在を短期的な客観的価値とする。長期的には、人の生命の存在のための努力、全生命の存在のための努力と、他の負荷と自然負荷（自然の金属や化石燃料など資源採取および自然への廃棄）の少なさへの努力を長期的な客観的価値とする。さらに、より長期的には採取する金属や化石燃料など自然資源はゼロを目指さねばならない。

人の主観的価値は、主観の在り方の価値であり、主観と客観の一致である。これはさらに、1 主観と客観の状態の一致として、人の類の中の個という認識、人の宇宙の歴史と現実の全ての人と生命と物のつながりの中で存在できているという自己相対化認識、2 主観と客観の運動の一致として、自由と愛という客観的価値が達成されつつあるという実感、それをもたらす態度として個々の認識における謙虚さ、個々の行為における誠実さ、がある。

これら主観と客観の一致は、全ての思考と行為についてある。[TS2009]

2. 問題

人の主観的な幸せと客観的な世界の価値への寄与が両立する生き方を作りたい。これが**第一の問題、目的**である。この両立は自明の要件と考える。このために、人類の歴史を貫いている基本法則、基本原理、新しい世界観、価値観の把握、これを作る論理学、これらによる生き方を作ることを目指す。これが**第二の問題**で、第一の目的、問題にとっては**手段、方法**である。この基本原理は、今後数百年千年の、全ての人や生命にとって共通の基本原理、生き方であるとよい。

これを次の準備と仮説で論理的に検討する。

前提：自分１人だけの幸せはだれも望まないだろう。主観的な「幸せ」が、客観的な全てのものの価値の増加と両立していることは前提である。実際には、人も宗教も人生の相談者も「幸せ」だけを求めて終わる。この「主観的な「幸せ」と、客観的な全てのものの価値の増加との両立」という表現は、一般的抽象的過ぎ、具体

的内容が伴わない。一つ一つの行動、態度を規定する具体性が必要である。これが解決しないと、いつまでも「幸せ」だけを求めるだけになってしまう。

よく分からないので、求める内容は置いてゼロから考え直し行動、態度そのものの根本を考える。

1 **根本的に今の何かを画期的に高めるには？**

（仮説）何かの本質（正）とその真の反対の本質（反）の弁証法的止揚（合）が画期的解である。

2 **論理的に、対象化と一体化（愛）は反対概念**

（主体の）はじめに、**対象化**があった。対象化は、対象を、自分と切り離した対象として操作する態度、行動である。人の対象化は他の生命と異なり後の一体化を生む可能性を持った対象化だった。

人の今、扱う対象であるオブジェクトに対する態度、認識、行動は、今の人類の行動の基本である対象化と、その反対である一体化の二つで網羅されている。対象化の真の反対が一体化である。対象化は、あつかうものを自分と切り離した対象として扱う態度、行動である。**一体化**は、自分と対象を一体として双方の価値を高める態度、行動である。今、人類に必要なのは、対象化と一体化の統一の一体型矛盾の解、弁証法的止揚であるかもしれない。この解なら、人類を画期的に進歩させ得る。

3 **対象化と一体化（愛）の一体型矛盾**

一体型矛盾では、二項それぞれの内容と矛盾の作用は、共に矛盾が進むにつれて発展していく。

当初はどちらも初期的形態であった対象化も一体化も、次第に変化していく。したがって、具体的に、歴史の中から、態度、行動を規定する対象化と一体化の対の初期形態が見つかれば、対象化と一体化の一体型矛盾が、態度、行動を規定する基本法則、原理であるかもしれない。態度、行動である生き方の指針を作るためには、客観と主観の関係を具体化し活性化する矛盾が必要である。

文化・文明の成立後は、対象化を担う技術・科学と一体化を担う制度・芸術の既成の蓄積が外部にあって、人の認識、外部への働き方を支えるようになったことがこの検討の背景にある。2020.10.27,11.01 これ自体、対象化と一体化の統合の一つの検証になり得る。2020.10.27,30,2021.11.25

以上が論理的検討の全てである。この粒度は、論理的に正しく、かつ歴史的に確認されたものでなければならない。

5.2 物々交換の開始以前

1）生命が登場する以前の歴史

地球が生まれ、マントル運動が大陸、山を作る。マントル運動が起きるのは、惑星が生まれた時にあったエネルギーとその後の地球の自転による。マントル運動、地震が起き、山が誕生し、風が吹くのは変化変更矛盾である。

差異を起こすのは、外部からの力である。例えば、風が吹くのは、惑星の自転、恒星エネルギーによる水の蒸発などによる。地球は多様な環境の星になった。

2）農業革命までの歴史、技術の誕生

生命が生まれ進化が起こる。生殖によって子孫を残す生命の進化の形式は、「通常の」遺伝子組み合わせと、遺伝子コピーミスによる突然変異の二種あると考えられる。いずれも、生き残るとは生きるエネルギーを確保することである。

1 日常的にエネルギーを確保できたものが生き残る。その前提で、2 通常の気候変動や共存する他生命との関係変化など、緩やかな生きる環境の変化に対処し、生きるエネルギーを確保できたものが生き残る。さらにその前提で、3　千年以上の単位の大きな気候変動や、小惑星衝突、100年程度に一度というかなりの頻度で起こる大きな太陽嵐や、千年程度に一度の大きなカルデラ噴火など突発的な危機を、遺伝子変更によって、エネルギーを確保できたものが生き残る。

数十億年を要して、生き残った生命は意図的な変化変更矛盾、つまり意図的な変更を始めることができるようになる。目的を持って行動する動物が生まれ、狩猟、採取が始まった。

オオカミやライオンなどの集団による狩りも、人の集団による狩りも、獲物を取るという機能を、空間的な複数の動物の意図的連鎖行動という時間構造を作って実現する。おそらく、最初の、かつ本質的な意図的構造は、行動の時間的連鎖の構造、及び複数の行動の時間的連鎖の構造である。これは、人が実現した対象化を必要とせず実現できている。数百万年前、サルから分岐した人という種が、言葉を作り、石器の利用、火の利用をする。火の利用が始まったのはこの中で比較的遅く十万年くらい前らしい。ここまでに人の歴史の殆どが使われた。[https://ja.wikipedia.org/wiki/初期のヒト属による火の利用]

技術上の機能と構造の矛盾は、人類発生以前を含む歴史を持つ。**技術**とは、技術手段と、それを作る過程、利用,運用する過程の総体である。[TJ200306、TS2008-09] 生命と対象の間の媒介物が技術手段である。技術の始まりは、最初に技術手段を作る過程で起こる。生命と対象という対立項（これが、項-関係-項の二項である）と、相互作用(これが、項-関係-項の関係である)がある。この相互作用を良くする運動、矛盾があった。この矛盾の解は、生命の手の作用機能のある属性が独立

し、それが実体化し外部から道具という技術手段による媒介化を行うことだった[IEICE2012]。

制度と違い技術は、媒介だけで完了する。人の内の属性の外化、実体化と、外のもの、例えば石を使うことが同時に起こる。

技術は、人の作りだすエネルギーを前提にして始まった。（操作する手の外化の）操作系である道具の利用による動物、植物の採取は人が自分のエネルギーを使って行ってきた[THPJ2015/3]。

技術の要素が、操作する手などの機能の代替である**操作系**、持ち運び動かす手足などの機能の代替である**容器・輸送・動力系** [ここまでは資本論第１巻第13章]、頭などの判断機能の代替である**情報系**の三つである。

産業革命以降、容器・輸送・動力系(ものの保存・輸送系、エネルギーの生成,変換・保存・輸送系)が加わり、情報革命以降、3. 情報(の処理・伝達・保存)系 が加わる。2020.11.02, 2021.01.19

容器・輸送・動力系は、機能で見ると１ 誰、何のためにという目的、２ 何を、３ 貯めるか、運ぶか、で網羅される。１この「目的」は、誰かにとって良い何かを作り、貯め、運ぶことである。容器がその媒体になる。例：消化器、血管（・エネルギーを運ぶ、・タンパク質、ホルモン、ミネラルなど、直接、からだを生み出すものを運ぶ、・老廃物を運ぶ）、水路（・上水道、・土壌；水そのものと、土の中のミネラルなどの栄養を植物に届ける、・下水道；老廃物を運ぶ）、天然ガスタンク、石油パイプライン、電力網、道路、橋。２「何を」は、21 物の場合、気体、液体、個体、22 エネルギー（物の属性）、23 情報（物、エネルギーの誰かにとっての属性、ここでは検討しない）2021.01.19

容器・輸送・動力系を、機能の実現構造で見ると、操作系と異なり、形状、大きさ、長さ、トポロジーが、直接貯め,運ぶ機能に大きく関係する。（情報系もトポロジーが機能に関係する）。産業革命当時と違い今は、エネルギーはあるところで電気に変えられ電力網で各地に配送されている。電力網の場合、物理的トポロジーは複雑だが、論理的にはエネルギー生産と消費は直結している。もの、エネルギーは情報と違い、ローカルな実現が理想であるが、そうなっていない。2020.11.08

情報革命以降、情報系の進化が進む。ソフトで実現できる機能は、原理上必ず論理回路のハードでも実現できる。理由は、ソフトを解釈して実行するハードであるノイマン型コンピュータに、**1** 対象(アドレス) と操作(命令)を１語上に同等に表現、記憶して実行に使い2021.02.09、**2** 操作の機能に、21 論理演算（と論理演算が実現する「算術演算」、「比較」判断）の機能、22 ジャンプ機能や、プログラムで a=a+1 は、a に１を加えて新しい a にすることを使い、逐次、次のステップに進んでいく時間管理機能があることによる。（付１ 平松さん）

5.3 物々交換の開始とその後 [FIT2017] [IEICE2018]

農業革命後の人類の歴史を概観する。その目的は、歴史の中から今の仮説の論理を探すためである。そしてそれが徐々にあきらかになってきた。

対象化の反対概念である一体化の初期形態は一方向の一体化である所有や帰属である。

農業革命の時点では、人が起こす運動には、偶然の客観的要素がまだ多く、矛盾の開始条件は、殆ど外部から与えられる。人類の歴史の原理を求める課題探求に問題がある。そもそも、データがない。農耕の開始や、物々交換、四大文明の誕生という「事件」が、元ネタである。しかし、これらの開始時期、場所も、広まった時期、場所もはっきりしていない。それがどういう概念、属性を持っていたかについても、想像するしかない。その上で仮説を作らないといけない。しかも長い時間が経つに従い概念が変化していく。概念が変化していく内容を推測し、その中で変わらないものと変化するものを確定しないといけない。

1. 物々交換の成立、交換制度開始の条件

制度とは、複数の人の共同観念とその生成、運用の総体である。共同観念は、実体化してものと人に担われるものと、人だけに担われるものがある。前者は，交換制度（例：言語，お金）、後者は，個人の感じ方、思考、行動を規定する共同主観（例：常識、哲学、道徳、宗教）、内部構造から組織制度、帰属制度（例：国家、企業、家族）、機能から社会制度（例：法、政治、経済、教育）という三つがある。[TS2008]

制度の場合、外部運動が、共同体の２個体間の観念の２項と、両立,共有をめざす相互作用により矛盾を作り、共同観念の両立,共有という媒介化の解を見つける。[IEICE2012]　技術の開始と制度の開始を比較すると、制度の開始が高度であることが分かる。技術の開始は人と対象の間に媒介物を入れれば済む。技術の場合と異なり、制度の開始には大きな条件が要った。

制度の開始には、「人－関係－人」という矛盾を生成しなければならない。[THPJ2015/3]

ここでの「関係」は、1 共同観念の共有（誰と誰の間で共有が行われているかという共有の範囲と、共有の内容）と、2 個々の共同観念から得られる推論結果（例えば、いつまでに何々の手続きをすると何々のサービスが受けられる）の共有を条件とする。3 特に困難なのは前に述べた物々交換を始める矛盾の開始条件である。この三つの困難さが文化の要素のうち制度の誕生が遅くなった理由であろう。

2020.01.31,31

運動に、何かを始める開始と、運用,運動がある。物々交換や言葉のように、**観念とものの二つに関わる、交換制度における両立矛盾の開始**に必要なのは、[0] エネ

ルギーが前提で、[1] 始めるための条件があり、かつ、[2] 始める矛盾の生成（物々交換の場合、所有意識があること、交換の時間場所の「二人」の観念の共有）と、[3] その矛盾の解の実現が同時でなければならない[THPJ2012]。これは困難な条件だった。奇蹟的に次のように歴史が進む。

[1] 人の火と道具のある利用段階に達する技術の発展時期が、[1] たまたま氷河消失という条件と重なり、一万千年から八千年前に農業革命を起こした。狩猟や漁業と異なり、農業は [1] 人の努力で自在に耕作地を増やし[1] 長期保存可能な、でんぷんと蛋白質を含む生産物(produce)の生産量を増やすことができるようになった。農業革命によるエネルギーと自然の対象化が、四千年かかって徐々に、[1]生産量と人口を大幅に増やしていく。太陽エネルギー利用による農耕の**対象化**がその後の人類の進歩を開始する。農耕地開拓により生産物が増え保管が進む。

物々交換をもたらした歴史が、その後の人類の発展をもたらす。物々交換に限らず、制度における両立矛盾開始という運動の矛盾のためには、始めるための条件があり、かつ始める矛盾の生成とその矛盾の解の実現が同時でなければならない[THPJ2012]。物々交換のように、意志を持った二人の観念が関係するものの運動の開始の場合、これは難しい。

保管している食料を奪いに来る相手との闘いで死者が出るようになる。この問題をどう解決すべきかが集団のリーダーの悩みの種だった。正確にはまだ、「奪う」「奪われる」という意識は双方にない。この闘いが続く中で次第に[2]「所有」という意識ができていった。

まだこの「所有」は法的所有ではない。

六千年前のある時、[3] **物々交換**という偶然の解が得られ広まっていった[THPJ2012] [IEICE2012]。解は、闘いを物々交換で解決するものだった。約六千年前のことである。[TS2010] [THPJ2012] 物々交換の成立の直前に、グループ間で、[2] **所有**という概念が生まれる。所有という概念は物々交換と同時にできた。

[0] 物々交換を行うエネルギーは十分にあった。それに物々交換が成立した効果として、大きなエネルギー節約がもたらされた。

物々交換の場合、条件と矛盾の解が偶然にでき、しだいに偶然であいまいな運動が確定的な運動になっていく。[TS2010] [THPJ2012] [IEICE2012]
[3] 物々交換は、[2] 所有というあるものを自分(達)に引き付ける**一方向一体化**概念の成立直後に生まれた。

これが、前に述べた「最も根本的な矛盾は、今の人の態度、行動の根本を決めている概念とその反対概念の矛盾であり、その解はこの二者の弁証法的止揚であるという仮説」の最初の答えになる。

一体型矛盾ではその運動が外部により大きな変化をもたらすだけでなく、構成二項も次第に変化させるので、ここではまだ初期的概念のままでよい。物々交換の開始について、モースなどの従来の論者とは、第一にこの闘いの中でどうしても現実の死者を減らさないといけないという人類の歴史の問題＝矛盾のとらえ方、第二に「起源」のとらえかた、の二つが違う。

極論だが、人の歴史にとって、こうして始まった人の物々交換以外に根源的な物々交換はない。これ以外の、動物が行う「交換」には人にとっては、意味はない。人の物々交換が、その後の人類の種としての発展に必要な制度を作り発展させた。人の重要な歴史の転換に関わる矛盾の中核に、必ずその時代に解決が必要な課題がある。人に特殊な問題の解決に資するものは、先行する動物の問題解決を含め取り得る全てを取り入れなければならなかった。

そしてある時、偶然の物々交換が行われた。物々交換が正確に物理的にいつ行われたかは重要でない。物々交換はなかったという説さえある。起こったことが論理的に重要である。歴史的に必要なことが論理的に起こったのだから、物理的にも起こったのである。[TS2010] [TS2012] [THPJ2012] [IEICE2012] [CGK2014] その結果は余りに画期的だった。物々交換は次第に着実に広まっていった。たまたま起こった最初の代表者二人の間の物々交換で最初の制度が成立した。最初に成立した共同観念は、「所有」だった。それを作ったのが物々交換だった。

物々交換の成立には、次の三つが必要だった。

・自分の前にあるものが自分の共同体所有であり、相手の前にあるものが相手の共同体所有であるという認識。

・自分の共同体の所有物を相手に与え、相手も同じことを同時にするという物々交換予定像。

・いつ、どこで、どのぐらいの量を受け渡すかという物々交換実行の場所と時間の予定像。

両者を考慮したこの共同観念を、別々の共同体の代表が共有することが、物々交換という画期的制度の始まりである[TS2010]。

奇蹟としか言いようがない最初の物々交換の成立がどうして起こったのかは今となっては謎である。謎の解決のための仮説は次のようなものである。

最初の物々交換は、女系社会が男系に転換したとされる仮説「女性の世界史的敗北」と同時期くらいに起こったと推定される。その時、物々交換の交渉者は、女と武力に優れた男であり得る。

この二人の恋が最初の物々交換を可能にしたのではないか？たまたま、両共同体に、生産物がやや余っている時期と、恋によって生じた、お互いが相手にプレゼン

トを与えたい感情が重なるという極めてまれな条件が生じた。地球で、当初は、生産物が増えれば、増えた分は人口増加に使われたので、いつも生産物は不足だった。生産物は数か月単位で変化するが、人口増加は常にあるいは年単位に変化するというズレがある。

このズレのため、ある時偶然二つの集団に食料がやや余った状態が生じるという奇蹟が起こった。

これが、強奪によって生じるいさかいで死者が増えるのをどうすればいいかという、共同体リーダーの悩みの種を解決した。物々交換が成立すれば、分業によって共同体双方の生産力が向上するという認識は、当時はなかったと思われる。この認識不足を埋めたのが恋だった（という仮説である）。

こうして、物々交換頻度の増大が、働き手の確保と分業による全体の生産力の増大をもたらし、自分の共同体の生産力の増大になっていく。[IEICE2012] [THPJ2012] こうして最初の物々交換は奇蹟的に成立した。

物々交換はなかったという説や、物々交換から貨幣が生まれたというのは間違いだという説がある。しかし物々交換(と同時に生まれる「所有」)があったからこそ、物々交換の不備を補う「経済」とそれを補完する「政治」が生まれる。経済や政治が生まれるにはまず物々交換がなければならなかった。

道具の誕生＿＿▼
400 万年前？
人類の誕生＿＿＿＿▼
200 万年前？
言葉の誕生＿＿＿＿▼
200 万年前？
最初の農業革命＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿▼
1 万年前？
最初の物々交換＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿▼
6 千年前？
文化・文明の誕生＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿▼
4 千年前？
貨幣の誕生＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿▼
3 千年前？

図 5.1 物々交換の各段階（推定）[TS2012 を簡略化し農業革命を追加]

物々交換は、新しい「もの」と「観念」の両方の運動が同時に起こる、特別な矛盾の解だった。同じような矛盾に言葉がある。

物々交換の運動の開始の検討が遅れたのは、この複雑さも要因であろうと思う。[THPJ2012]ではこの中の六つの矛盾を図で分析している。（付 1）

最初、偶然の物々交換が生まれ、最初はあいまいだった所有が次第にはっきりし、次第に普及していく。最初は集団の所有だった。

2. 物々交換がもたらしたもの：制度と科学の基礎である等価原理

物々交換は、同時に等価原理（等しさの原理）を生む。等しいものどうしを交換するのが物々交換だから、何が等しいかは当時の大きな課題だった。このため次第に、等価原理、等しさの原理が生まれ物々交換以外の領域に広まる。

等価原理が意識に発生してしまえば、等価なものが、実物であろうが、貨幣であろうが、何段になった負債、信用であろうが同じである。

21. この等しさの原理は、制度では、婚姻に関する集団内の共同観念と並び、所有や「罪と罰」という集団内、集団間の共同観念を作り法制度の一部を作った。ウル・ナンム法典、ハンムラビ法典などで法的所有が述べられるのは、物々交換が始まってから二千年後である。

最初、特定の集団間で行われた物々交換とその前提の「所有概念」は、次第に広まっていく。物々交換制度、所有観念は次第に定着し普及して法的概念になり制度化される。ある社会の中の全ての意識的主体が、物々交換の共同観念を共有し、生産と生活の前提になる。

交換の場所は次第に市場に変わり、貨幣ができ、生産量が増大し、交換が利益を生むようになると、経済制度が発展する。経済制度の発展は、生産、流通、交換、消費において起こる。交換は、交換主体、交換対象、媒介物、媒介形態のそれぞれで起こる。

22. 等しいことと差があることは同じことの二面である。等価原理、等しさの原理は、天秤、等式、差の意識、推論、科学を生む。物々交換は、制度や、物々交換が起こした「等しさの原理」、等価原理の形で科学の本質と密接に関係する。つまり物々交換、等価原理は、経済制度、法制度などの制度の根幹、科学、技術の発展に関わる。等価原理が生んだ罪と罰や復讐は、芸術の大きなテーマになっている。罪と罰や復讐は、宗教や芸術作品によって強まっていく。

3. 物々交換の開始後の機能と構造の矛盾の発展

物々交換が成立した後、制度ができ文化が発展すると**機能と構造の矛盾(内容と形式の矛盾)**という実用的な両立矛盾が大々的に開始できる条件が整う。

機能の事実とあるべき機能の姿の**差異**の認識が、差異を埋める構造の可能性を認識し、構造手段を作り機能と構造の矛盾の解を実現する。意志、意図が、運動を合法則的に行い、農耕の開始後にそれが加速し、生き延びる条件が大きくなっていく。

機能と構造の矛盾が、高度な構造の道具、機械や水路などを作っていく。これを実現しながら持続的進化を可能にする歴史構造ができていく。

4. 四千年前以降の生産量と人口の増加、帰属という制度（宗教、政治制度）の誕生

41. 物々交換が始まった当時は、個の意識もなかった。[TS2010]で物々交換開始の検討をした時に、地域共同体意識を挙げている。この地域共同体意識は、帰属意識の初期形態であろう。

地域所有意識、地域共同体意識、地域への初期の帰属意識、物々交換は同時に生まれたか？

最初に生まれた所有意識は、共同体の所有意識だった。物々交換がなく強奪しかなかった時には、個と他という意識がないのはもちろん（なお、個人がお金で売買をするようになってから、個の意識が徐々に広まっていったという趣旨の説明が資本論にあったと記憶する）、所有意識もなく自共同体意識、他地域共同体意識の区別さえなかった。当時の「強奪」は、あったものを持ってきただけである。

最初の物々交換は、地域共同体の代表が別の地域共同体の代表と行ったのであろう。その時、代表である彼または彼女が持っていた所有意識は地域共同体の所有意識だった。このときの彼または彼女の自己意識はまだ地域共同体意識に等しく、自己意識と地域共同体意識は分離していなかった。しかも、この地域共同体意識を持っていたのは、地域共同体を代表して物々交換を行う彼または彼女だけで、他の全てのメンバーはまだ地域共同体意識すら持っていなかったであろう。

強奪の場合との違いは、物々交換を行う彼または彼女だけは、他共同体意識を持っていたことである。

おそらく自共同体所有意識、他共同体所有意識が、自共同体意識、他共同体意識を作った。はじめは、物々交換の行為の瞬間だけ存在したかも知れない自共同体所有意識、他共同体所有意識とこれに起因する自共同体意識、他共同体意識と行動予定像は、物々交換が継続して行われるようになってくるにつれ、次第に定着し次第に明確な意識になってくる。物々交換を直接担う共同体双方の先進メンバーの、共同体所有意識、共同体意識の萌芽と偶然の行動の予定像の一致が、一時的に偶然の物々交換を可能にし、その継続が一時性、偶然性の

程度を下げていき、それが共同体所有意識、共同体意識と行動予定像を強化し、さらにそれが一時的、偶然的だった物々交換を、次第に継続的、必然的なものに変えていく。

漠然とした自他共同体の区別のない観念から、自共同体意識と他共同体意識、それぞれの所有意識への分割と物々交換予定像から構成される共同観念が、物々交換という行為の成功と相互作用して起こり、長い相互作用過程の後、定着する。

この共同観念は、自共同体と他共同体双方のプラスになるものである。

相手のことも考慮したオブジェクトの変化と、その持続の決断が物々交換の成立に決定的で、それが歴史を作ったことに感動する。この過程はある共同体では成功し別の共同体では失敗するが、成功する共同体は次第に増えて行く。

資源が豊富という条件下では、物々交換に成功した共同体群は分業の大きな利を得るが、失敗した共同体群は衰退する。物々交換が成立する過程は、共同体の生存を賭けて制度を作る過程であった。

生成時に本質が見える。共同観念は行動と相互作用しながらオブジェクト分割をしていき制度が分割され高度化が進んでいく。

これらは、共同観念の生成と発展の歴史と論理、制度の生成と発展の歴史と論理である。[TS2010　2.2.2 項からの引用を一部変更]

42. 多くの個をまとめるために**帰属**という、所有と並ぶ一方向一体化がはじまる。

おそらく所有が帰属という意識を作った。所有が先でそれを基にして帰属が生まれた。所有がなければ物々交換はなく、物々交換の成立が帰属を必要とする大きな集団規模をもたらしたからである。

人の個が全く確立していない状態で、世界への意識的働きかけを担う技術、制度に、一部の指導者だけでなく、**多くの人**が関わるようになった。これが、多くの人の、個と全体のギャップを生んでしまった。このギャップの処理に必要になったのが、自分の周辺の自然、自分の属する集団への意識をうめる宗教（神）、集団への**帰属**意識である。この個と全体の差の意識発生が、初歩的な客観と主観を生み、それがさらに対象化と一体化の初期形態を生んだ。

これはせいぜい４千年前、文化・文明誕生後である。言語や道具の発生した直後は、脳内は、客観と主観の対比とは遠かったと思う。

421. 法、政治、宗教の始まり

ある集団リーダ間で、所有概念が生まれ物々交換ができ、それがグループ全体にさらに全集団に広がり、「相手の物を盗んではいけない、違反すると罰がある」という法ができるのに二千年かかった。

物々交換から初歩的経済制度が生まれ、約二千年遅れて、経済の発展による生産量と人口の増加がその管理のための法や政治制度を必要とするようになる。宗教と、政治・行政が同時に必要になった。これらが同時に必要になるような大規模な宗教と政治・行政しか意味がなかった。2020.01.31

歴史はヘーゲルの神による「自律」矛盾のように、次のことを自分で見つけたように見える。

・物々交換が開いた経済の発展に「法」「政治」が必要なこと。

・必要な「法」や「政治」の実現には、宗教との並立が必要であったこと。

・宗教と並立する独裁政治は、資本主義成立まで変わらないこと。

法制度や政治制度のために、宗教が形成される。四大文明、世界宗教が始まる。

宗教は最大の生産手段であった土地を、支配者が管理するための手段になった。

小集団や部族が超自然信仰を維持していたが、そのような信仰は権力者の支配権や富の移動を正当化したり、無関係な個人間での平和を維持するのには役に立たない。

組織宗教は次のように社会的、経済的安定を提供する手段となった。

・領民に社会や安全のサービスを提供する見返りに税の徴収権を支配者に認めることを正当化した。

・小集団や部族は血縁関係にある少数の人々からなる。しかし国のようなより大きな集団は何千もの無関係な個人からなる。

ジャレド・ダイアモンドは組織宗教が、それがなければ敵対的な関係に陥りやすい無関係の個人同士に結びつきを提供したと主張する。農業革命から生まれた国（古代エジプトや古代メソポタミアのような）は首長、王、皇帝が政治的と精神的な二重の指導者を演じる神政であった。人類学者は実質的に全ての領土的社会と首長制国家が宗教的権威を通して政治的権力を正当化していることを発見した。[https://ja.wikipedia.org/wiki/宗教の起源]

当時（資本主義開始まで）、**宗教**の意味には、次の三つがあった。

・人口増による人と人の関係を管理するための政治制度、

・土地という生産手段を管理するための政治制度、

・人の内面にとっての意味（特に謙虚さ）

中世の支配者は、土地を所有しているという意識はなかった。土地所有に特に価値はなかった。しかし土地を管理する必要とその根拠は必要だった。

宗教― キリスト教、イスラム教、仏教など――は四千年前から三千年前ころにかけて生まれた。

経済制度を補完し制度を実現するために、宗教と政治は同時に必要になった。大雑把に仮説を言うと、宗教と政治の同時並列、相互依存は、資本主義が始まるまで続く。資本主義成立までの政治は、独裁制だった 2019.02。これが、長く続く宗教と政治の一体化と関係している。学者による検討はされているのだろう。

資本主義成立までの宗教制度と並立する政治制度が純粋に成り立つのは、機械に頼らない農業の時代で、これと機械の産業が立ち上がってくる時代を分けたほうが良いかもしれない。

422. 文化・文明の始まり

すでに、科学、芸術はあった。四大文明が周囲に広がっていく。そのため、大雑把に言うと、世界宗教の誕生は、四大文明発祥とほぼ同期している。

・古代メソポタミア近辺のユダヤ教、キリスト教、イスラム教、

・インダス文明の仏教、

完全に対応していないかもしれない。時間にずれがあるかもしれない。

また、古代エジプトの宗教は、世界宗教にならなかった。

文化と文明は、通常、やや異なった意味に用いられている。文明はやや物質的なベースがあるニュアンスで、文化はその背後にある精神的なもののニュアンスで。

しかしここの文化は、両者を併せ持った意味の概念である。そのことを明示するため、文化・文明と書くこともある。ここの四大文明あるいは六大文明の「文明」とは、ここでの文化（文化・文明）の原型で、次の四者の複合体である。

1 生産を行う技術と労働の体系と運用、

2 生産、交換の管理のための経済制度、

3 そのための初歩的な政治・宗教制度、

4 行政機構。

1 が技術、2，3，4 が制度である。文化・文明の本質は、技術、制度である 2020.04。文化（文化・文明）の要素の近似として科学、技術、制度、芸術の四つがある。実際にはこれらの複合体がある。科学、芸術、技術の原型は、以前からあったので、制度がくわわり、ここで四つが初めてそろった。文化、文明の発生時期は、実証的検討がされていると思う。

例えば、日本の縄文時代は、多い場合三百人程度が同じ場所に定住して比較的高度な共同観念を共有し合っていたらしい。しかしそれは四大文明のような、初歩的ではあれ、生産を行う技術と労働の体系と運用、生産、交換の管理のための経済制度、そのための政治・宗教制度、行政機構の複合体ではなかった。

人以外の動物も努力をしている。個体の生を守り、子を育て、子孫を残すための努力である。

生きることができず子孫を残せなかった個体の遺伝子は失われる。人も、個体の生を守り、子を育て子孫を残す。人だけが、意識的苦労ができる段階に至り、その結果が人と外界を媒介する外部に蓄積されるようになった。他の動物と違うのは、外部の文化により生き方を新しくすることができた点である。動物の性欲と闘争欲が、一体化と対象化の動物的原型の一部ではあるかもしれない。

価値実現のため、人類はたまたま二種の異なった時間粒度の手段を持った。進化は、生命誕生以来、体内で、人の意志に無関係に働いている。進化は必要な機能を長い時間をかけて構造変化によって実現する機能と構造の矛盾の連鎖である。物々交換はなかったという説や、物々交換から貨幣が生まれたというのは間違いだという説がある。物々交換（と同時に生まれる「所有」）があったからこそ、「経済」とそれを補完する「政治」が生まれる。経済や政治が生まれるには、まず物々交換がなければならなかった。

文化・文明 (技術, 制度, 科学, 芸術)による運動 は、4000 年ほど前から、体外で、人の意志で、働いてきた。文化・文明による運動は、「対象化（自由）と、一体化（愛）の初期形態の矛盾」である。技術, 制度, 科学, 芸術は、それぞれが機能と構造の矛盾の解を担う手段である。

こうして、進化だけの他の生命と異なり、外界に働きかけることを、道具を媒介にして行う技術, 共同観念を媒介にして行う制度、認識を体系的に行う科学、一体的に行う芸術、の四つからなる文化・文明が誕生する。[OUYOU1990 吉本隆明は、1 対幻想から、2 国家の共同幻想(共同観念に等しい)、3 それが作る国家制度に進むと述べる] ここでは、物々交換が人を増やし、単にその管理のための制度として国家が生まれたと考える。[TJ200306] [TS2008-09]

表 5.1. 四つの文化・文明と対象化、一体化

	働きかけ	**認識**
対象化の手段	**技術**	**科学**
一体化の手段	**制度**	**芸術**

これ以降、全ての人の認識と操作の論理の分かる事実が扱える対象になり、本人の潜在意識や感じ方の内容は、常識,哲学に等しくなっていく。2021.02.18,03.14

5. 物々交換がもたらしたもの：等価原理（等しさの原理）のマイナス面

等価原理（等しさの原理）は、同時に様々なマイナスを生んでいる。

同じ等価でも「罪と罰」は良いが、復讐だけ悪いのか？「罪と罰」は「等価原理」によるが、復讐は「等価原理」によらないからいけないのか？

とにかく芸術作品がそれを強める。今は、私的復讐は法的に禁じられているが、テレビなどの時代劇で仇討ちは悪として描かれていない。忠臣蔵の仇討ちなどである。忠臣蔵は日本人に共感され、復讐は善という価値意識は、「復讐を起こす『正当な』理由とともに」ではあるものの、日本人の潜在意識に入っている。民放テレビで「水戸黄門」の再放送が行われている。十回に一回位、仇討ちが登場し、実際に仇討ちで相手を刺し殺し黄門が褒め

る場面が描かれる。これでは、復讐は善という価値意識は、「やむなく仇討ちをしないといけなくなった理由とともに」ではあるものの、日本人の潜在意識に入ってしまう。

子供向けのおとぎ話を要約した簡易版では、「良いことをしたら良いことがある。だから良いことをすべきである」ということがあからさまに強調される。これは有害と考える。良い結果を得たいから良い行為をする如何なる実利的な指向にも、現世の「ご利益」にも反対する。

等価交換から生まれ、ヨブ記など初期の聖書にあった文字通りのいけにえは、聖書においても徐々になくなり、キリストの時代には、キリストの「死」以外には残っていない。

復讐はなくさないといけない大きな概念である。「罪と罰」も変えないといけない概念かもしれないがよく分からない。

聖書の神の審判、黙示録、カトリックの煉獄、通俗仏教の地獄も、現世の「ご利益」を説く通俗新興宗教の偽善とともに、排すべきである。

結果を求めず、ただひたすら良いことをしようとするのが良いのではないか？同時に良いことは何かを常に求め続けなければならない。

本題に戻る。対象化による生産の増大が等価交換を生み、同時に生産増大がもたらした人の増加に対処して、人の心を一つにする神への信仰、集団への一方向帰属を生む。

しかし、等価意識が、いけにえ、「目には目を」、復讐、罪と罰を生んでしまう。集団への帰属は他集団の排除を生む。当時の対処は、緊急の一部の課題を解決しただけで大きな問題を残した。

一方で宗教の生んだ一途の謙虚さ、自己相対化は、全面的に良い態度と思う。謙虚さ、自己相対化を生むために宗教があったのではないかと思う。

6. 資本主義誕生後の歴史

資本主義後、大雑把に言うと民主主義、人権意識、「自由、平等、博愛」が始まる。

こうして、**物々交換→ 経済制度→ 資本主義成立まで、宗教制度と並立する独裁政治制度→ 資本主義成立後、民主制の政治制度** というモデルができる。

当時、独裁は当然で「悪」ではなかった。2017－2021 年の日本や米国の、二つのグループがお互いの足を引っ張り合い非難し合い、社会を悪化させる政治を見てあらためてそう思う。

政治制度の単位は、できた当初は「国」という比較的大きな単位だったが、その後、多様化に伴って分散傾向が強まる。それが次第に再び大きな単位に成長し、今の「国」の大きさが復活している、というのが世界に共通する傾向である。

別の問題として今の「国」を相対化し戦争の元をなくす必要がある。

政治成立後の四千年の歴史は、生産量と人口の増加に対応する経済制度、土地管理制度、人の管理制度、科学、芸術、技術の歴史である。そして、資本主義＝利益第一主義が生まれて後、「私的所有」の結果である「お金」が、唯一無二の「価値」、経済のただ一つの原動力になり大問題を作った。

もともと、人類の場合、「種の存続－生の存在」という基準があった。他の生命についても、「種の存続－生の存在」という基準はある。絶滅危惧種は、世界で保護運動が広がっている。

5.4 対象化と一体化の矛盾

これまでの歴史から対象化と一体化を抽出し、その変遷と本質を探る。

1) 対象化の誕生

人間の歴史は、単純化すると意識的な対象化の歴史である。人は対象化することのできる生命である。対象化の意識は、おそらく、何かを意図せず操作した時に、たまたま、人に有意な変化が起こる、ということが繰り返されて後、意図的な操作をするようになって発生した。

今までの人の歴史において、三種類の対象化があった。

仮に第一次、第二次、第三次の対象化と言うことにしよう。この三つはどれも人に画期的変化をもたらした。まず、人類の比較的初期の、言語の発明、道具の製作と利用という第一次対象化がある。言葉という媒介物によって初歩的主観が生まれ、言葉に加え道具という媒介物を得て主観と客観の原初的分離が始まった。これからが長い。数百万年経ち、十万年前の火の利用に続き、人類は一万年前**農業革命**によって本格的に第二次の対象化を開始した。これが世界に広がるには数千年を要した。250 年前には第三次の対象化により**産業革命、資本主義**が産まれた。次第に画期的事象の起こるサイクルが短くなっている。農業と工業の二つの革命のどちらも、太陽エネルギーに基礎を置いている。[IEICE2016] 農業革命では直接、太陽エネルギーを利用した。産業革命では太陽エネルギーを基にしてできた化石エネルギーを利用した。太陽エネルギーと自然の対象化以降の人間の歴史は、もの,エネルギー,それらの運動の仕組みを対象化し、対象化したものを道具や機械で置き換えてきた歴史である。この運動は**機能と構造の矛盾**である。

農業革命後の第二次対象化がより重要である。その理由は、農業革命が、生産物の所有を生み**一体化**の原型を作ったからである。新たな対象化と最初の一体化を引き起こした農業革命が人間の歴史の中の最大の変革である。

次のように六千年ほどをかけて一体化は起こった。

2) 一体化、その不十分な展開

1. 一体化の実態：不十分さと欠点

対象化は、扱うオブジェクトの多様化を起こし、オブジェクトを扱う方法を進歩させる。対象化された実用的世界観とともに技術、科学は画期的に進んでいる。

対象化は変更のために必要である。そして対象化が進むと対象に対する操作変更力が高まる。これは同時に対象そのものに対する責任も大きくする。また対象化だけでは対象の価値を高めることはできない。何か対象の価値を高める「手段」が要る。今の一方向一体化はその十分な手段にならない。

双方向**一体化**は、私と他の生命やものを含むオブジェクトを対等に再統合,一体化し一つのものとして高める態度、意志、行動である。この意味の価値を、ヘーゲルに倣い、私と他の生命やものを含むオブジェクトを一体として共に高める**愛**ととらえる[FIT2013]。

対象化の画期的進展は、この双方向一体化の必要性をますます重要にさせている。

対象化は、等価原理を生んだ。等価原理は、等式、天秤に始まる計量装置、差の意識、推論、科学を生み、対象化に一層、貢献するようになる。

11. 一方向一体化の利点

一方向一体化の利点は次のとおり。

・1 謙虚さ。

・2 所有したものを大事にし、責任を持って保管し管理するようにさせた。その方法も身に付けさせた。

・3 神や大きな集団への帰属意識によって、人は、集団としてまとまり安定した生き方を得た。

神や大きな集団に対して、謙虚に自己を相対化、対象化する可能性、謙虚に努力し続ける生き方の可能性 2020.12.11 を得た。宗教は、資本主義以前の支配者の土地管理を容易にした。

一方向一体化が解決できるものの最大限は何か？実際に何が得られたか？それによって本来得られないものはどういうものか？ よく分からない。

12. 一方向一体化の欠点の発生と歴史

一方向一体化がもたらした欠点がある。等価交換→生産増大→人の増加→人の管理の必要性→人の心を一つにする神への信仰、集団への一方向帰属、という流れがあり、今の集団への一方向帰属意識は、しばしば、他集団への排除、敵対帰属を生んでいる。

また、等価意識は、いけにえ、「目には目を」、復讐、罪と罰も生んでしまう。聖書でも、初期には、「神」はカインとアベルの内、取れた農作物を差し出すカインより、子羊を、いけにえとして差しだすアベルの方を良しとされる。これは「神」が等価意識により間違えた例である。後期には、いけにえは、内面化され自分のいっそう謙虚な内面

向上の努力がされるようにはなる。資本主義が始まるまで、世界各国に共通して、宗教が政治と一体になって土地の管理などを円滑に行い「国」をまとめるために利用されてきた。その後の資本主義の「国民国家」も「国」をまとめるために利用されている。

物々交換の開始後の６千年の間、対象化が進み、初歩的一体化は徐々に弊害が目立つようになった。2020.08.06

13. 一方向一体化の課題 2020.12.11,19 **他節と統合、全面書き換え**,2021.11.12 ,26

今後の課題がある。

1 新しい価値,、共同観念を作る課題：

・（一方向一体化そのものである）所有に代わる（または含む）価値を作ること：悪しき利益中心主義が世界規模で進み、弊害が大きくなっている。所有主体が、個人の場合と集団の場合があるが、いずれも必ず私的所有である。所有意識は、所有対象にならない大気や海のような共同物や他の人や集団が所有しているものを大事にしないあるいは敬意を払わない傾向を生む。私的所有が利益重視や経済格差を生んだ。

物々交換が所有物の等価交換から始まり、等価なのが、物の価値と労働時間（個の生）だったので、お金が普遍的価値基準に進んで今に至っている。所有に代わる（または含む）価値は、個の生（労働時間）と異なる価値である。可能性は、個の生より大きい,例えば種の存続か、個の属性（対象化と一体化の統一）の中にある。2021.03.01,05.03,11.12,26

・共同観念は、教育やマスメディアによって作られる。民間マスメディアは、広告収入というお金によって作られるので、どうしても視聴率目当てで、価値の大小、難しい事実より表面的に大衆受けするものを広めてしまう。NHKもその影響を受ける。新型コロナウイルスの問題はその典型だった。(第2部) 2021.08.01

2 個々の領域の課題1：共同体間の関係

一方向一体化が多様性を排除し、相手の排除という多様性否定（他を排除する帰属感）が起こり、他集団の排除を生む。宗教や国家、民族の二セの一体化意識による対立、戦争が続いている。

少なくとも今の帰属意識は、ほとんどの場合、自分の属する組織への正当な一体感と他への不当な排他意識とが一体になっている。「所有」が「帰属」を作ったことを前に述べた。一方向一体化の所有、帰属などの不十分さが制度化されてしまった結果、自集団の価値の所有を増やす目的のために、他国との戦争や覇権主義が続いている。最近話題の「共同所有」は、この解決にはならない。（付1）2021.07.21
これは自「国」を対象化できていないことにもよる。

一方向一体化が多様性を排除し、所有していないものを、十分対象化できず大事に扱わない、多様な価値の軽視をもたらした。

3 個々の領域の課題2：個と対象との関係の対象の側

対象の側の「疎外」がある。対象の価値が気に留められていない結果として環境破壊などが起こる。

4 個々の領域の課題3：個と対象との関係の個の側

疎外や生きがい喪失がある。間接化と「疎外」により二重に失われた一体性の回復が必要である。（分業は、マルクスが長い間反対した。今では分業の中から全体への道は見えるようになった） マルクスの魅力的な労働疎外論は、彼の所有の把握ミスによる。正確な労働疎外論が要る。

5 個々の領域の課題4：共同体内の人と人との関係、共同体と人との関係

個または共同体の「生き方」が、主観的にも客観的に十分でないと、いじめ、復讐は起こる。いじめは、弱い相手を餌食にする,涙に似た無意識の自己防衛である。とりあえず、そういう把握を普及していく必要がある。復讐も、SNSや「評論家」による（最近では、交通事故で辞職した東京都の木下元議員に対する）個人への誹謗中傷も、間違っている等価意識による、相手を餌食にする自己防衛である。2021.11.12,26

これは自分、共同体を対象化できていないことにもよる。自己、共同体を対象化しない謙虚さ不足、一体化における謙虚さ不足、謙虚な愛が不十分という条件の下で対象化は急速に進行している。[FIT2016]

6 個々の領域の課題5：共同体と人との関係

3）対象化と一体化の歴史総括：[FIT2016] [CGK2016] [IPSJ2017]での総括考察は、個々の認識における謙虚さ、個々の行為における誠実さを前提とする。

1. 問題

理想の目的は、意志のある誰もが（可能なら全てのものが）、いつでもどこでも相手、全てのものの「価値」をお互いに高めて行く客観と、その主観的な実感である「幸福」の二つの両立であるような全体、本質、方法であることを最初に述べた。主観と客観の二項の原型は、言葉や道具の使用と同時に産まれた。地球で数百万年の歴史がある。しかしこの客観と主観は一般的抽象的静的関係である。

生き方になるためには、客観と主観の関係を具体化し活性化する矛盾が必要である。それは人の態度、行動を最も根本的に変える矛盾で、かつ永続する一体型矛盾でなければならない。

2. 人が生きる最も根本的な矛盾は、今の人の態度、行動の根本を現に決めている概念である対象化と、その反対概念である一体化の矛盾である。この矛盾の原

型は、六千年くらい前、物々交換とともに初歩的形態が生まれた新しい矛盾である。

3. 四千年前、進化だけの生命と異なり、次の四つからなる文化・文明が誕生し、対象化一体化を行う要素が出そろった。外界の変更を、・道具を媒介にして対象的に行う技術、・一体化を、共同観念を媒介にして行う制度、認識を、・対象的体系的に行う科学、・一体的に行う芸術。

4. 他生命は遺伝子によって前の世代の知恵を受け継ぐ。中で、人以外の哺乳類は、親が、子が一人前になるまで必死に生きるすべを教えて育てる。人は、遺伝子と文化によって前の世代の知恵を受け継ぐので、だれかが、必死に世界観と論理、これらから作られる態度を教えなければならない。これが今、少なくとも日本では、必要なのに欠けている。この「基本的歴史理解、世界観のための内容の抽象化」の内容は、特に小学生中学生の生きる態度や行動の前提にもなるので、短く理解しやすく覚えやすいのが良い。

人が**今、生きること**を抜き出してとらえると、次の系列となる。生きるとはこの繰り返しである。

1 知覚、

2 歴史と現実を総括して得ている論理学、世界観、価値(観)、

3 人の潜在意識、態度、感情、これらが規定する論理,方法（粒度決定＝抽象化具体化、推論＝仮説設定）、それによる認識像と行動像の生成、

4 技術・制度・科学・芸術からなる文化・文明の支援による認識と行動。

3, 4 を動かす運動は、対象化を前提とした機能と構造の矛盾である。

さらに、2, 3, 4 の「各階層への分割」とその「各階層内の対象化と一体化の矛盾」は、両立矛盾である。[IPSJ2017 改]

人類は、この過程を無意識に実行してきた。そのためノイズがあり、歴史は長い目で見て論理と一致するという結果は、実際の歴史から抽象によりそのノイズを除去しないと得られない。2021.11.26

これらの矛盾は個々の一体型矛盾より一段高度な一体型矛盾である。

そしてこのように統一的に把握できる形になっているのは、実現エネルギーを最少にするためである（がうまくいってない）、というのが仮説である。

1 知覚は検討の対象に含んでいないが、1 知覚自体も、地球の条件の下でエネルギー最少のため今の形になったと推測できる。

人によって無意識の内に、不十分な一体化と対象化の矛盾を中心とする矛盾が働いていった[FIT2016]。人の行動は、無意識に、次第にエネルギー最少になっていった。これを、意識的に十分な対象化と一体化の矛盾、自由と愛の矛盾に変えていくことが課題になる。

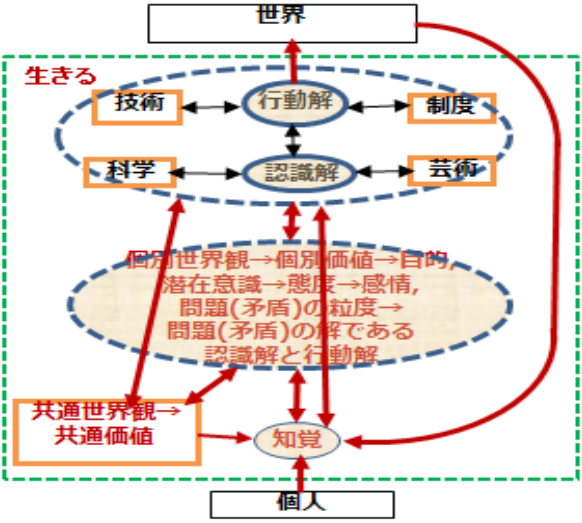

図 5.2 人類の生きる構造(FIT2016 を改良、FIT2017 スライド)

「各階層への分割」と「各階層内で統一された矛盾があること」の両立は、これ自体、複雑な両立矛盾である。この１２３４の各階層への分割がどの程度一般化できるか、歴史的発展の論理検討は課題である。これは人の活動全体を表す矛盾であった。1．この矛盾が一体型矛盾に限定されるか、2．限定される場合、対象化と一体化という一体型矛盾に限定されるかという検討すべき課題がある。おそらく一体型矛盾に限定される。それが対象化と一体化の一体型矛盾に限定されるかどうかはよく分からない。この前に、この矛盾を開始する条件；地球の多様な環境、氷河期の終わり、言葉、道具や火の利用開始などがあった。

5．愛と自由の関係

最初に、自由と愛を対比したのは、[TS2009]であった。自由は対象化についての価値（の基準）で愛は一体化についての価値（の基準）であった。まだ 2009 年には、自由と愛を統一すべき矛盾としてはとらえていなかった。矛盾と把握したのは 2010 年[TS2010]である。

自由は大きなテーマで、それだけを扱った本も多い。その中では必ず「何々からの」自由、「何々への」自由を扱う見方が扱われる。しかしこれらは自由と「何々」との関係を言っているだけである。この二つで自由は網羅されてない。エンゲルスの「自由とは必然性の認識である」という定義も有名である。サルトルが「ドイツ

軍に占領されているとき我々は自由だった」と語ったのも忘れ難い。何をすべきかが彼にとって必然的に明らかに見えたからであろう。彼はこの時エンゲルスを思い浮かべていたのではないか。

必要な対象化の価値として自由を選んだのは2010年である。対象化して操作できる力が大きいほど、人はより自由になるというのが正しい気がした。これは形式的で中立的な意味を持っている。エンゲルスとサルトルの二例はこの自由に含まれる。「何々からの」自由、「何々への」自由も併せ含んでいる。2010年以来7年経って始めて、自由の意味を書き対象化の価値とした理由を、書いた気がする。(双方向)一体化は、私と他の生命,ものを含むオブジェクトを、包み込み一体化する態度と行動である。この意味の価値を、私と他の生命やものを含むオブジェクトを一体として共に高める**愛**ととらえる。これは、自分のための価値である自由と違い、他人だけでなく全オブジェクトの価値である。[FIT2013]「愛とは、私と他者が一体であるという意識である」と言ったのはヘーゲルである。このヘーゲルの他者は、他の人に限定され、人以外の生命、ものには適用されない(と思う)。

批判と謙虚さは、本来、自分と相手を高めあうので、どちらも「愛」かもしれない。ここでの本来の（弁証法的）批判は、自分と相手の双方を止揚し含むものだからである。

6. 多様化と一体化

対象化がもたらす多様化に対処する必要がある。

対象化の不足、謙虚さの必要性、努力を続けない人をどうとらえるか、多様性の問題、これらは同じような問題らしい。多様化とは、対象化と一体化、自由と謙虚な愛の矛盾の内容そのものである。これは、何を対象化するか何と一体化することから始まるだろう。しかし、生まれて以来の教育やマスメディアに作られた固定観念が邪魔をして、自己、一体化の内容はおそらく相対化、対象化しにくい。これは多様化、特に個性の開花は難しいということだろう。

[FIT2016]で一連の過程の各階層で、対象化と一体化の「一体型矛盾」が現実化されていることを示した。これも結果的に、複雑化、多様化への対処のためだったと後で、分かった。

この検討の中で、多様化複雑化は、直接、意識しない検討だった。

61. 何が多様性をもたらしたか

どこから多様性は生じたか？二つある。

・進化のような偶然の微細な差異による多様化がある。今の事実である現実は、論理によるのであれ、偶然の微細な差異によるのであれ、宇宙誕生以来の歴史の網羅的総括であり、多様な細部にも意味がある。（その細部を活かして生きることがで

きるはずであるが、どのようにしたらそうできるかが分からない）2019.09.04,10.25, 2020.09.28

・前に論理的検討として対象化が多様化をもたらすことを述べた。対象化は他のオブジェクトを複雑に多様にしていく。

62. 多様性が何をもたらしたか、何をもたらしうるか

多様性が何をもたらしたか？もたらしているか？

621. 進化において偶然の多様性が人類を存続させた。その意味で多様性が種を存続させた。

固体どうしの生き残りの闘いは環境変化に対応するために「強い」あるいは「賢い」個体を残す手段と考えられる。生物進化において種が環境変化などに対応でき、生き残れたのは、1. 通常の両性生殖において親と異なった遺伝子の多様性が生まれ、変化する環境に長い時間をかけて対応できていける遺伝子が保存されていったこと、2. 突然変異による遺伝子変化によって生まれる多様性により、急な気候変動のような突発事件などに対応できたことによる。進化における偶然の多様性と種の存続は、相互作用していることが分かる。

622. 個は産業革命を経て対象化多様化が進み個性が発展していく。多様性が価値を広げ、本稿の対象化と一体化の統一が、全ての人の多様な個性的能力が発揮される未来像を、具体的に実現する。（第２部平松さん）

63. 多様性の可能性と必要性 2020.09.29,2021.03.02,15

うまく整理できない問題を一つ片付け、変数を少なくしておく。

双方向の一体化は、相手が人の場合と、それ以外の生命、オブジェクトの場合がある。

後者、相手が人以外の生命、オブジェクトの場合は、多くの個が、ただ他の生命や他のオブジェクトと一体になり、それらの可能性を十分に伸ばし、周りに害を与えないために、できる全てを行う。容易ではないが、それだけでいい。

相手が人の場合、相手の可能性を十分に伸ばすためにできる全てを行うことは、自分と相手と対等を対等に意識し、多様な可能性を伸ばすことである。しかし、これは不可能に近いように思える。人の可能性を見つけ伸ばすことはできていない。そこで、歴史的、科学的には、成立した個は、本来、多様な可能性を持って生まれているという仮説を作る。多様性に気が付いていないだけで、多様性などという以前に、今は皆、全く違う人間なのではないか？個が確立したなら、その個は必ず多様である。つまり、個の確立と個の多様化は同義である。確立した個は、十分な判断力を持ち、他と議論しなくても必要な判断はすべてできるということを前提に話を進める。

1 生物的な個の多様性の無限の可能性が生まれた時期の探求は課題である。おそらく、主観と客観の二項の原型が言葉や道具の使用と同時に産まれた時と、文化文明誕生の時の間のいつかである。2021.03.02,15,05.11,06.07

2 一方で、農業革命の時代に一体化が不十分だったのは、一体化の一方向性によるだけでなく（つまり一体化の不十分性によるのでなく）、十分な対象化がなくそのため多くの多様な個が広がらなかったことにもよる。そして多様でなかったゆえに一体化が不十分に終わった。当時の一方向一体化制度の場合、多様な個は要らなかった。当時は、生物的には多様な個が可能だっただけで社会には必要なかった。

3 つまり、個の多様性の開花には生物的な可能性だけではなく社会的必要性も要る。2020.09.28,29, 10.12,12.01 対象化と一体化の中の一体化のもとになる所有が六千年前、帰属が四千年前に始まった。文化・文明誕生は、思考と、多様化の可能性を、全ての人に広げる。2021.03.15

4 そして、産業革命、資本主義は、個の多様性の開花の社会的必要性と可能性への道を拓いた。2020.11.30,2021.02.07 一方向一体化から双方向一体化への「発展」も、論理的には多様性の展開である。多様性の論理的展開が双方向一体化を作る。本稿で仮説として書いたのはこれだった。

以上は、地球人の個に限定した自分と他人の話である。こういう論理と歴史を経ない宇宙人がいるだろうから、宇宙論理学のためにも重要である。

64. 多様性と単一性

多様性と単一性という一体型矛盾は、対象化と一体化の矛盾の一面の別表現か、対象化のもとでの矛盾である。どちらも対象化と一体化の矛盾の下位の矛盾である。

無秩序な多様化が進むとバラバラになるように見える。つまり、一見、多様性は単一性と相反する。この「物理的」矛盾をどう解くか？多様性と単一性の矛盾の例が多いことを別の場所で述べた。

641. 共有すべき同一価値があれば一体化に役立つ。共有すべき同一価値は、一見、多様性と相反する。これについては、少なくとも人類という種の存続や個体の死より生が良いという価値などが共有,統一されてさえいれば、後は多様な個性が発揮されればよいと考え、分離して議論を進める。

単純に TRIZ の分離原理によって分離する。価値についてだけであるが、共有すべき同一価値と個の多様性を分離し共に重要な価値としたい。

642. 多様化が進むと単一的管理が必要になってくる。

多様性は、対象化から生まれ、かつ次のように、対象化と双方向一体化を統一した管理を必要とするようになる。管理が必要なのは、人の単なる多さ、個の多様性と生産物の多様性ゆえである。

地球は多様な環境を持つ星なので、この環境下で、対象化により多様な生産物が生まれたことを述べた。多様な生産物のための多様な労働が多様な個を産む基である。農耕においては、人の努力で耕作地を、したがって生産物を多くすることができ、それによって人口も増えていく。より多くの人口、より多様な生産物、より多様な個が、今のように複雑な制度、技術とその管理を必要にさせた。対象化が進んでいき生産が多様で複雑になると、分業の中の管理の問題が起こる。管理は、対象化による多様化がもたらす機能上の一体化である。多様なものと大量のものの管理が必要で可能になっていく。管理がうまくいくと全体の価値が増す。この管理は対象化と一体化を統一する必要がある。

生産の多様性、個性の多様性がなくても、多くの感情と肉体を持つ人々をまとめていく管理という課題がある。仮に、全く一様な個体数が多くなるとどういう問題が発生するか？ 縄文時代三内丸山のような大きな集落でも人口は300人くらいだったらしい。この人数なら、全ての人はお互いに血縁共同体の仲間と認識できる。血縁であろうがなかろうが、お互いが顔を知っていることは、ある種の一体化を作るのではないか？血縁共同体から地縁共同体に移っていくと、全体を一体にまとめる何かが必要になる。それが法や宗教などの帰属の制度だった。

7．対象の拡大のための一体化

一体化が対象化の拡大にも寄与する。これは、問題でなく、新たな認識であるが、これを解に利用する必要はあろう。これらの問題を今から悩んでも無駄かもしれない。しかし、今から悩むことは現在の問題をよく解決するかもしれない。

一体化を双方向にする必要性が実感にならない。一体化を双方向にする利点、必要性があるとしたら、全てのオブジェクトを、自分を対象化し続け、対象化と一体化の範囲を広げる必要性である。双方向一体化は、人間中心主義を克服し、他の生命も、地球のものもお互いを対等に扱うために必要である。

今後、全ての他生命、全地球、宇宙へ、価値を含んだオブジェクトを広げ続けなければならない。科学の進歩により知識を得たら、その知識の利用には責任が生じる。これも大きな一体型矛盾を作る。より正しく広い科学的真理、求める価値を含むオブジェクトの認識の展開と、人の価値実現を含んだ全ての運動に対する責任との矛盾である。これを、プラスの変化の連続になるようにしなければならない。

多くの人にとって、一体感は、今は残念なことに、とりあえず、地球に独特の、静的な帰属感、帰属意識（自分が何かに属している、包まれている意識）と、所有感、所有意識（何かが自分に属している意識）である。この所有感、所属意識に代わる新しい意識が必要である。

双方向一体化は、1 相手が人の場合と、2 それ以外の生命の場合、3 それ以外のオブジェクトの場合がある。

8. 得られつつある解のまとめ

2019.07.06,2020.09.26,2021.03.14,06.14,07.26,08.05[FIT2017]

解決は、対象化と一体化の両立であることが分かった。人間は意識的に努力し、文化・文明を介し認識と世界の変更を行える稀な生命になった。

物々交換後六千年かかって、初めて、論理学が主導し、**1** 弁証法論理による思考と労働が個人の能力を発達させることが分かった。同時に**2 個人の主観の中の抽象的な客観と主観の一体型矛盾は、一瞬毎の、具体的な対象化と一体化の一体型矛盾の解で解決**でき、一人一人の一瞬毎の努力が、世界、宇宙に貢献し、かつ自分の幸せ、喜びになるようにできることが分かった。2021.04.15,06.13

新しい論理学を作り哲学、常識を変え続けることが生き方になり、自分の生き方と新しい社会を作ることを同時過程にする。2021.08.05,10.02, 11.20

始めて全ての人のための生き方、制度を、全ての人が考える時代になった。

この解決過程が進むと、**3** 人の廃棄物ゼロ,省エネルギーなどの条件を満たして、長い時間をかけて、もともとの客観と主観自体が、お互いを高め合う地球と人類全体の客観的一体型矛盾に成長していく。こうして将来は、二つの一体型矛盾、「対象化と一体化」と「客観と主観」の矛盾が並行し同時に進んでいくようになる。別の事象、運動である。それが同期して進んでいくようになる。お互いに含み合い入れ子になっている新しい高次の一体型矛盾ができる。

前者は一人一人の主観的生き方を作り、後者は、最初は、抽象的な主観と客観の統一だったが、今は、客観的になった。粒度が異なるだけで、共に全宇宙を網羅している。さらに理想的には、自由と愛の統一、対象化と一体化の統一により、意志のある誰もが（全てのものが）、どこでもいつでも全てのものの「価値」をお互いに高めて行ける。

この実現には大変な努力を必要とする。また、過去の歴史から学んだ論理が根拠である。論理と結論は見直しが必要である 2021.07.15。

目的、価値は、手段、方法の実現可能性が生まれた時、始めて分かる。一般化すると、目的より手段、解より方法、結論より論理が重要である。手段や方法は、目的、解を超えて進んで行く。2018.09

本書は、種の存続－個の命－個の属性、の順に大きい価値の系列を前提にしている。本書は、この価値の系列に沿っている。(500 年に一度程度の大災害、日本の場合、それぞれ 100 年に一度程度の東南海大地震、関東大地震、三陸大地震への対処が、不思議なことに、極めて部分的にしかなされていない。お金より個の命の価値が大きいことは意識されていない。(第２部）)

4 所有という一方向一体化の解決：お金だけでない価値の実現は、個の属性の一部である。**お金だけでない価値の実現は、所有の解決に(ほぼ)等しい** 2021.07.26。その気になれば、この理想の価値は、個人の労働と生活の具体的行為においては、意外に簡単に実現できる。さらに労働組織の目的などが、対象化と一体化の統一を少しでも意識するものになれば、より現実的になる。

5 帰属という一方向一体化の解決：残る難題は、帰属の問題解決である。これができると戦争や諜報機関の不法はなくなる。支配層、マスメディアによる常識が浸透していてこれは難しい。(第２部）2021.07.11

対象化と一体化の統一は、個の属性に属し、一応、所有を解決した。所有が何段階を経て帰属を作った（前述）。どちらも一方向一体化である。しかし良き帰属もある。他を排除する一方向一体化がだめなのか？と考えたが、悪しき帰属は、所有の増加を求めて戦争さえ起こすので、やはり双方向一体化が必要というもとの結論になった。(所有を求めない組織への帰属は良いか？)

おそらく、本質的に、**所有と悪しき帰属は、同時に弁証法的に否定**するしかない。その時、所有が本質的に解決する 2021.07.26。超私有と超帰属かもしれない。その時、お金だけの価値と戦争は同時になくなる 2021.06.29,07.15,07.24。その時、復讐などの問題も解決する。同時にこれを可能にした人の論理把握の進展は、人と世界の同時発展の最大の原動力になる。2021.06.29,07.25

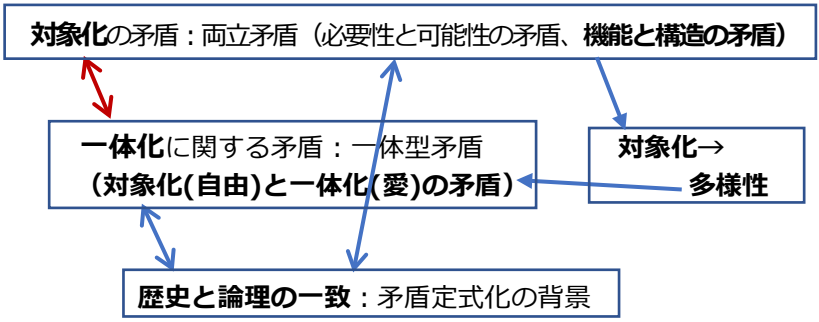

図 5.3　対象化と一体化の矛盾の位置

とりあえず、どうしたらいいか。第一に理想的には、本来、全ては関係し合い変化しているので、本来、何かを良くしようとすると全てを良くする必要がある。特に、目の前の課題を解決しながら、自明である種の存続、個の生物的生以外の生の属性(の何か) を見つけ実現する新しい生き方を作る。

第二に最低限ケースである。取り組んでいるのが空間的時間的属性の粒度の狭い小さい下位の価値の場合、全体の中の位置を明確にし、上位の価値を優先するのがよい。[FIT2016] [FIT2017、同スライド] [CGK2017] 現実的に、世界の問題の中の私の認識、変更の位置を知ると、世界の問題の全体に関わっている意識が得られる。

これも努力が必要な生き方である。自分は他のあらゆるものに「生かされている」という認識はとても大事であるが、もう一段進む必要がある。理想の生き方は、対象化と一体化、自由と愛のそれぞれをより完全にしながら、統一する [Naka-2016] 新しい世界観を持つ生き方である。これは、全ての面で努力を続けないといけない要請である。

人間は、意識的に努力して、文化・文明を介し認識と世界の変更を行える稀な生命になった。

一体型矛盾は、項が時間とともに内容を変化していく。

今まで、一体化が一方向から双方に形を変えることだけに着目していた。

対象化も、自分以外の対象の対象化から、自己を含んだ対象化が必要な段階が明確になって行く。

対象化は、対象を自分と切り離した対象として操作する態度、意志、行動であると同時に、最新の目標形態が、対象の拡大と、自分も相対化し、対象として操作する態度、意志、行動になった。

今、気づくのは、自己の対象化が実現すると思考、議論の殆どの問題が解決し、自国対象化が実現すると「国」など自分の帰属している組織の相対化ができ、紛争の解決に近づくことである。

根源的網羅による仮説設定という論理学の積極的態度は、自分でやってみないと身に着かないと同時に、生き方、社会を作っていく原動力になる。**論理学が主導して、哲学（論理学と世界観）、生き方、社会は、将来、同じようになる。**2021.01.07 これは、同時に、今の世界の問題解決の基本原理でもある。 [EPM p.153]

対象化と一体化の中の一体化のもとになる所有が六千年前、帰属が四千年前に始まり、多様化の可能性が出てきた。しかし当時の一方向一体化制度だけの場合、多様な個は要らなかった。つまり、当時は、生物的には多様な個が可能だっただけで、社会には必要なかった。個の多様性の開花には生物的な可能性だけではなく社会的必要性も要る。2020.09.28,29, 10.12,12.01（5.6 節）

そして、産業革命、資本主義は、個の多様性の開花の社会的必要性と可能性を拓いた。2020.11.30

一方向一体化から双方向一体化への「発展」も、論理的には多様性の展開である。多様性の論理的展開が双方向一体化を作る。

世界に共通に、下記の優先度の高い順の実現を図る。

1. 世界を壊滅させ得る災害の克服（2020,21 年の新型コロナなどは日本では小さな問題である）、2. 民主主義を実現し、「東西対立」「国境」と戦争をなくし、お金だけが価値でない、全世界に共有されるポスト資本主義制度の生成（ひょっとしたら私有と帰属は同時に止揚するしかない。つまり、お金という価値と戦争は同時になくなる。2021.06.29,07.10）、各人の生き方が確立していく中で身近な問題、復讐、いじめ、労働疎外など解決 2021.11.19、3. 同時に、各人各「国」の多様な展開。

数千年かかって生まれた問題の根本的解決策も示した。2020.07.01,04　数百年数千年に一度の変革である [Tana-2010] [Taka-51]。

例 1：労働の場合、対象化と一体化の矛盾、自由と愛の矛盾が重要である。一体化は双方向一体化であり、対象化は、自分以外の対象化と自己対象化である。**労働、**良いものを効率的に作り利益を増す「合理的」目的から、材料や使う人など**対象の価値を増す目的を加えた労働と個人の能力を発達させる**弁証法論理による**労働**に代える 2021.06.13。労働、生活を、自分の能力の全面的発現と、全てのオブジェクトの価値のための二つの実現にする。労働と生活の、人の意見以外の対象を相手にする場合、キーは、今より大きな全体に向かうための網羅の態度と「一体化」である。

全体に向かうための網羅と一体化：喫茶店社員の場合の態度と一体化の検討例、

[1]　[2]のための商品の改良。例：コーヒーを紙、布や金属のフィルターを通さず濾す方法。

[2]　1) 自分の店の顧客層の種類の網羅。2) それぞれを増やすとしたらどうすればよいか。3) 顧客種類毎にまた一人の顧客にどういう商品をどう提供するとその人のためになるか？それに応える商品。例：全ての顧客に、その都度、必要で良い量、質の飲食品を提供。

[3]　これらの社会全体の中の位置の把握。例：コーヒーを喫茶店で飲むということは？コーヒー生産国のコーヒー生産の位置。全体の制度をどう変える？

[4]　コーヒーのためにはどうすればよいか？

これらが同時に社員の力も伸ばす。

人とオブジェクトの双方を活かすためには、人の価値と、入手する素材の生産過程、流通、包装、消費、廃棄などの全過程を含め、対象であるオブジェクト全体の価値を共に高める（愛の）ためにはどうすれば良いかも考慮することが必要である。

全ての人が労働と生活の場で、動いている全過程に自由と愛、対象化と一体化に目を配る意図と仕組みが必要である。教育内容（特に初等中等教育）の変更が必要である。

お金は、対象化、自由だけの価値だった。働き方改革において働く条件の改善の問題は小さい。大きな問題は、働く目的と得るべき価値である。今の労働運動は、労働条件の向上運動にしかなっていない。例えば過労死の本質的対策は、労働条件の改善でなく、働く目的の「正しい」把握であり、間違っている場合はそれをただすことである。2015年電通の社員だった高橋まつりさん自死という痛ましい事件が起こった。報道されないだけで同様の原因による自殺はおそらく多い。2020.10.19 内容である資本主義における働く目的の問題（と、それによる上司の生き方の一部、指導のしかたの問題）が一義的で、労働条件は二義的問題である。利益増という働く目的が問題で、極論すれば労働条件の不備だけで過労死は起こらない。今は、右派、リベラル、左派、マスメディア全てがこれと反対である。

他のオブジェクトのための労働の変更が、全世界でどれだけの良い結果をもたらすか、もたらしたかが示せると良い。こうして、客観的価値実現と私の主観的幸せの統一が得られやすくなる。

以上は、生活の場合にもほぼ同様に当てはまる。2018年「虐待死」した船戸結愛（ゆあ）ちゃんの親の裁判が2019年に始まった。手紙「おねがい。もうゆるしてください」ではじまる日記、「えいえいおう」で終わる日記がある。五歳がこれだけ自分の思いを書けるのがすごい。自分を客観的に見つめ、とても客観的にはできないことを必死に努力し、親へも懸命に言う生き方に感動する。これだけ書けることは、親の「教育」によるだろう。しかし日記の内容は親に伝わらなかった。この事件は親の生き方の問題である。この問題が解決しないため「どうしたら結愛ちゃんの命を救えたか」という二次的問題が出た。学校でのいじめが、いじめる側の生き方の問題であるのと同じである。

例２：思考を、自分の前の意見と自分の新しい意見とを、弁証法的に統合するものにする。**議論**を、相手の言の整合性を理解し相手の世界観に敬意を持った上で、相手の意見と自分の意見とを弁証法的に統合するものにする。これには、対象化と一体化の矛盾、批判と謙虚さの矛盾が重要である。

思考や議論の場合、キーは、今より**大きな全体に向かうための網羅**と、**相手への敬意、自己の対象化、客観視、相対化の態度**である。

今まで自己対象化、相対化ができないことが、ほとんど思考、議論の妨げだった。目的は、本来の議論、思考そのものの変更であるはずである。しかし、今は、思考も議論も豊かな内容はない。今の民主主義は名前だけで、中身がない。

復讐に至ってしまう感情の悲劇を防ぐキーも、一体化不足以前に、おそらく、個人間、国家間を問わず自己の相対化、対象化である。

この二つの例の実現が（本稿で論じていない感情や芸術を付け加えて）、ほとんどポスト資本主義と豊かな生き方の全てである。いずれも、今の一瞬に、今後のあらゆる可能性を思い浮かべ、その中から如何に選択をするかがキーである。これは、

今、何をしているかに関係なく同じ課題である。そしてベストな選択だと思っていても必要なら違和感を覚える感性が要る。

その感性と論理があれば、人の労働も生活も思考、議論も、全ての人の能力を高め続け、世界のオブジェクトの価値を求め続け、実現することができる。

今、やっと大きな問題が定式化できた。全ての人々の英知を結集して考え、人の新しい生き方とポスト資本主義を作らねばならない。実現に千年かかるとしても始めないといけない。

歴史上初めてのこのチャンスが、既存エネルギーに代わる空間、時間、自然危機から独立な新しいエネルギーを作る時となぜ重なるのかは謎である。人類は、あらゆる空間時間に関係ない新しいエネルギーを利用する責任を負うことが必要で、かつ、できる段階に至ったのだと思う。[FIT2016 改]

今まで、種の存続、個の生を、生の属性の前提にして考えてきたが、対象化と一体化、自由と愛を統一する「生の属性」が得られる可能性があれば「種の存続」を取りあえず究極の目標にしても良いのではないか。宇宙の存続はこれより大きい価値だが、今、このための努力はできない。できないことを目標にはできない。理想、価値と目標は異なる。

持続可能な社会というスローガンがある。過程のスローガンに見えるが、何の持続なのかこれだけでは不明である。全てのオブジェクトの価値向上を表すスローガンが良いのではないか。そうすれば全生命の持続、地球の持続を含み、各人の具体化もしやすい。2021.02.18

アルフレッド・アドラーの「自己像、世界観、自己理想」からなる「ライフスタイル」は、本稿で提案する生き方に近い。しかし、アドラーは世界観を今の世界の現実像に限っている。

自己について現実像と理想像があるように、客観の世界像には過去の世界像、未来の理想世界像と続く流れがある。その中に原理、法則を見つけられる。この人類の過去、現在、未来像から導き出される客観的原理（法則）が、対象化と一体化の統一、自由と愛の統一である。それが、この客観的価値実現と私の主観的幸せの統一の内容である、というのが私の主張である。

対象化と一体化の統一とは、論理的なオブジェクトの関係についての統一である。

ユバル・ノア・ハラリの「サピエンス全史　文明の構造と人類の幸福」(河出書房新社 2016, 原著 2011) [YNH]と、ジャレド・ダイアモンドは、一種の人類の統一理論の試みをしていると理解できる。この二人は人類の歴史の優れたまとめを与えてくれる。必読と言っていいと思う。

本稿で、既存の哲学、現代哲学によらず、知覚と、事実と人の関係の歴史蓄積だけに基づいて、少ない概念と原理によるシンプルで合理的、正確、厳密という点、時代に合った論理学・世界観という二つの利点を持った哲学の骨子が得られた。哲学は歴史と共に変わっていく。ユバル・ノア・ハラリの書は、主観の誕生を重視し本稿より前の時間を重視するが、運動の今後の展望を明らかにしない。[IEICE2018] 本稿のような、今後の展望を導く歴史の世界観,価値観、論理が必要である。

今、歴史上初めての画期的チャンスを迎えている。これらの実現のためには、多くの人の「常識」を転換し、対象化と一体化、自由と愛の一体型矛盾を世界観にする必要がある。そのための矛盾モデル、論理である論理的網羅思考の普及も必要である。

この「哲学」（世界観と方法）に多くの人の賛成が必要である。また、この価値を超えるより大きな価値も全員で求め続ける必要がある。

今後千年の課題である。

地球誕生後、生命が生まれた。生命の系統樹の末端に、人、他の動物種、植物種が対等の立場で存在する。人が、もし、ペスト菌や他の動物種、植物種に比べて優れているとすれば、それは、得ている知識を、人のためだけでなく、ペスト菌や他の動物種、植物種の「価値」のために使える画期的な存在であるからである。人が一瞬でも傲慢になればこの優位は消えてしまう。論理的に言い換えると、人のあらゆるオブジェクトに対する謙虚さ,愛、自由の二つと、人の他オブジェクトからの優位性は同時にだけあり得る。訂正する。人のあらゆるオブジェクトに対する謙虚さ,愛、自由の二つがある時だけ、人は他オブジェクトに優位である 2021.02.11。

本稿では、物々交換後の文化誕生後の文化の歴史が、ここでの人類を特徴づけるとした。

人の歴史が対象化を生み、さらに文化において一体化を生んだ対象化が、人を画期的な存在にする。この変革は、所有や帰属、「罪と罰」のような一方向一体化から生まれた今までの常識を考え直す変革である。

人類の今後の展望も示すことができた。一体化と対象化は、二つのエネルギー革命から生まれた。一体化と対象化、自由と愛の一体型矛盾は、物々交換以来の約六千年の時間粒度を持つ。今は、新たな必要性と可能性の矛盾が熟し、新たな時代を拓く課題の中にある。本稿の粒度の歴史認識を前提とした、より大きな粒度の矛盾が問題になる。今までは、手段変更は個別には意図的だったが、全体を意図的に制御する論理はなかった。それが得られる画期的段階に人類は達している。

理想の生き方は、一瞬の中に、大きなものへの謙虚な態度「祈り」、苦しみ悩み、自分の全ての力をふり絞って努力をすること、それが客観的に全ての世界の全ての問題に繋がっている認識を同時に持つことである。[FIT2013]

ポスト資本主義という制度は、「正しい」原動力により、ものに関する生産量を必ずしも増大させず地球への環境負荷はゼロ以下にし、人や他の生命、他のオブジェクトの価値を増大し続ける制度である。この制度は、その中で生きる人の新しい生き方と同時に実現する。ポスト資本主義は、はじめて、個の確立と多様な能力発展が価値になり、必要で可能になる。マルクスが抽象的にしか夢見、語ることができなかった全ての人の個性的能力が発揮される未来像が具体的に実現されるとしたら、資本主義の、少数が大勢を支配するのに使っている 1 常識,哲学,お金という価値,生き方と 2 政治経済を、同時に変えなければならない。この生きる原動力が同時に政治経済の原動力になることが可能な時代が、今、始めて来ようとしている。（付 1 平松さん）2021.04.24

個人に解放された SNS での誹謗中傷など、経済を管理すべき政治の機能不全、正確に伝えないマスメディアは、新しい時代への過渡期の混乱の現れである。同時に、全ての人の個性的能力を発揮する必要があることの現れかもしれない。（第 2 部）2021.04.24,06.25,07.15

今まで「種の存続」「個の生」を「生の属性」の前提にして考えてきた。対象化と一体化、自由と愛を統一する「生の属性」が得られる可能性があれば「種の存続」を取りあえず究極の目標にしても良いのではないか。「種の存続－個の生－生の属性」という価値の系列が一回りして、最も小さな価値,生き方と大きな価値の関係が分かった。これも実証には時間がかかる仮説である。しかも入れ子になっている。この実現まではもちろんのこと、その後も、1 自分を対象化、相対化し続ける、2 より大きな全体を見続け、3 価値と正しい真実を求め続ける必要がある。

一方向一体化である所有（持つ）、帰属（属する）の 状態から、常なる 双方向一体化（愛する）へ。これら個々の努力のもとで**対象化と一体化、自由と愛の統一へ**。2021.02.23,05.13

5.5 実現の課題

しかし得られたのは安らかな「幸せ」ではない。これは今の努力を永久に行い続けないといけない生き方であり、今の一瞬が、世界の把握であり、過去の総括であり、祈りであり、思考であり、科学,芸術,技術,社会制度の変革行動である生き方である。それは良いとしても、次の課題がある。昔の把握 [THPJ/2015/01]より複雑になった。以下、課題を、網羅でなく、整理できていない形で羅列するにとどめる。（書き始めた 2018 年から殆ど進展していない）

1. 一体型矛盾は、項が時間とともにその内容も変わって行く。項である一体化も対象化も不十分である。

2. それぞれの完全な実現のために、この矛盾をできるだけ完全に運動させること。

一体的努力を全ての人が行うなら問題の解決に寄与する。この一体的努力は、本来、一体化（愛、謙虚さ）の結果として得られる困難な課題であり堂々巡りになる。

3. これに関連する悪い副作用、良い効果など他との相互関係の検討を行う必要がある。

まとまらないがいくつか気になる問題を見ておきたい。

31.「一体化の一体的努力を全ての人が行う」結果、できる社会は画一的な「善人」だけからなるつまらない社会かもしれない。

32. 気になることは、常識を変え、常なる努力を必要とする生き方を本質的に受け入れない何かがあるのではないかということである。

5.6 実現の課題の考察

この順に検討する。分からないことをそのまま書いている。読みにくいと思う。書き始めた当初からの進展が少ない。多様化のところだけやや進展した 2021.06。

1）矛盾の項：一体化、愛、謙虚さと、対象化自体が不十分

1. 一体化

一方向一体化により、集団としてまとまった安定した生き方と、神や大きな集団に対して自己を相対化、対象化することもでき、謙虚で努力し続ける生き方が得られた。この長所は残す必要がある。一方向の謙虚さは態度として必要である。一体化には、多様な人の心が安んじて謙虚になり大きなものへ帰属し信じるという下からの一体化は前提としてある。神との双方向の関係があり得るのかよく分からない。あるのかもしれない。

根源的網羅による仮説設定という態度は、自分でやってみないと身に着かない。同時にそれ以上に、弁証法的止揚によって、過去の思考を高めること、自分と相手の双方の意見を高めることが、思考、対話の目的である。実際には、全肯定で相手に同意して終わるか、全否定の非難をして終わることが殆ど全てである。

これには、相対化、対象化の不足と同時に、謙虚さという一体化の不足が大きい。ほとんど全ての問題と言って良い。相対化、対象化、謙虚さは、必ず同時に必要である。その前に各人の固定観念への無意識の執着があり「原因」になっている。入れ子になったこの構造を直すのは大変な課題である。日本に特有の課題として、周りと同化し過ぎ「空気を読」み過ぎる傾向がある。「相対化、対象化と同時

に、謙虚さという一体化が必要である」「その前に固定観念の無意識の執着がある」のは、全ての人に当てはまる。

11 一方向一体化により解決できるものの最大限は何か？何が得られたか？一方向一体化で得られるものの最大のものは人の謙虚さである。一体化には、多様な人の心が安んじて謙虚になり大きなものへ帰属するという下からの一体化がある。今向き合っている全てのものに対する祈り、集中、一体化、愛かもしれない。

12 一方向一体化によって得てはいけないのはどういうものか？（済んでない）

13 一方向一体化が実現してどういう欠陥が見えてきたか？（一部済んだ）

次は謙虚さと一体化について述べた[FIT2013]からの引用である。

粒度特定、方法を規定するものが態度である。態度の極限は、徹底的に誠実であること、オブジェクトに対する対象的態度と一体的態度の極限である。一体的態度の極限が謙虚さ、対象的態度の極限が批判である。謙虚さと批判は、独立していながら、両方がそれぞれ相手を高めながらより高くなっていく一体型矛盾を作る。

謙虚さと批判の一体型矛盾は、時間分離 [LB]により分離でき、前項が、とりあえずまず全面的にとる態度、後項が、その一瞬後相手と対象をより高い次元にするための全面的批判の態度である。理想的には、その後、後項が前項に肯定的に反作用し、両項が良くなっていく好循環を作る。

謙虚であることは、本来の一体化の面から相手と対象に感謝する（相手と対象から自分に気持ちを「受け取る」）こと、相手と対象をほめ（相手と対象に自分の気持ちを「与える」）、ともに喜び合うこと、相手と対象の現在、現在をもたらしたもの、可能性の全体を理解することであり、相手、対象との同一性である。副次的な対象化の面からは自分を相対化することである。つまり、謙虚であることは、対象化の面から自分の既存の固定観念を相対化し、同時に他と高い次元での一体化をもたらすという構造がある。この謙虚さは、高い認識をもたらして自分を高め、他集団の悪意的排除をする悪しき帰属を排除し、(私的)所有に代わる、まだ名前のない愛に似た対象に対する意識をもたらす機能を持つ。

相手、対象を高める批判は、本来の対象化の面から、対象との差異性の対象化処理の態度であるが、副次的に相手と対象を自分とともに向上させる一体化の面もあるという構造がある。

この批判は、変え与え教えることによって相手と対象を高めるという機能を持つ。感謝し、ほめ、謙虚である対象は、自分であり、相手であり、対象であり、これらを含んだ「事実」である。努力が実れば、お互いに感謝し合い相手を褒め喜び合う。

感謝し相手を褒めお互いに喜び合うことは、勇気と能力を要する実に難しいことである。

しかし、誰も、褒められることだけが、自分を良い方向に導いてくれる。自分を相対化しない固定観念は、謙虚さを妨げる。この態度は、謙虚さと批判性、対象化と一体化を、極限まで徹底して求める論理的網羅思考と、謙虚さと批判性、対象化と一体化を統一する弁証法であった。論理的網羅思考には、態度として、謙虚さと批判性の矛盾が特に適用される入れ子構造がある。

[態度を規定するもの]

態度、弁証法と論理的網羅思考を規定するものがあるだろうか？あるとすれば何だろうか？

1 態度を直接規定するものは、第一に、その最大のものが、価値とそれによる目的であることは明らかである。より良き価値のために相対化と追求を続けねばならない。この追求も論理的網羅思考による。第二に、謙虚さと批判性という矛盾を何が意識させるだろうか？これは実感できず今後の課題である。

態度、弁証法と論理的網羅思考を直接規定するものも、弁証法と論理的網羅思考という入れ子らしい。

2 次に、態度を間接的に支援するものは何か？網羅的でないが、思いつくことが二つある。

一つは、弁証法では、全てが関係し合っているため、あることの達成には他の達成も必要になる。同時にこれはあることの達成が他の達成にも貢献することを示す。一事が万事、一時が万時、我がことの今が世界の今と今後につながる。

この可能性の実感は、態度、姿勢、方法の内容を良くしていく原動力になるのではないか？

二つ目として、もし、生き方つまり態度、方法の複雑さに統一性があり、態度、方法内の各制約が合理的に充足されれば、態度、方法それぞれの改善が進み易く、人はその態度、方法を取り易いであろう。

生き方、態度、方法の内部を規定する制約には、価値と事実についての生き方、態度、方法が、1「何」に依拠するか？ 2「何」を対象とするか？ 3「何」をどのようにより良く変え続けるのか？の三つがある。

制約の一番目、謙虚に依拠すべきは、事実とその歴史である。謙虚であるためには、自分より大きいものを受け入れることが十分条件である。自分より大きいものを、歴史を含めた事実とすることができる。制約の二番目。事実は、対象的、批判的により良く変更していく対象であり、一体化の対象でもある。制約の三番目について、弁証法、論理的網羅思考の論理は、事実の歴史の総括で得られた。歴史は論理と一致するという結論自体、事実の歴史から得られた教訓である。

以上から、この「何」を、歴史を含んだ事実とすると、方法と態度についての三つの制約が統一的に充足される。[FIT2013]

まだ、一体化、愛、謙虚さという項自体が不十分である。謙虚さという一体化が、一方向一体化でいいか、双方向一体化が必要かは微妙である。これは重要で、自然や神に対して謙虚であることの位置に関わる。とりあえず一方向一体化と双方向一体化の二つがあるとし、双方向一体化の内容は保留しておく。

謙虚さは、対象化から間接的に得られる――つまり、対象化が生産を増大させ、それによって物々交換が起こり、経済が発展し人が増えるため、人の心をまとめるための,神や自然への謙虚さを必要とする――が、もう一つの別の流れでも得られる。対象化は、自分という対象を相対化することによっても起こる[FIT2013]。このいわば直接の自己相対化と一方向一体化による謙虚さの、意味合いの違い、歴史順序と価値への寄与の度合いが重要になる。両者は別の謙虚さかもしれない。整理できていない。宗教の生んだ謙虚な態度は今も必要と思う。

しかも、謙虚さは、今まで宗教あるいは宗教的感情によってしか得られなかった。

求めなければならないのは、一方向一体化から得られる謙虚さ、双方向一体化の中身と、双方向一体化の実現方法の三つである。

理想的な双方向一体化で思い浮かぶのは26歳のマルクスが経済学・哲学草稿で描いた意識のないもの（**太陽と植物**）どうしが相互にお互いのプラスになる作用を行いあう双方向対象化から敷衍される3 双方向一体化の姿である。（付1）一方向一体化と言う時、思い浮かべるのは、2 聖書「詩編」などで表現される謙虚さと、3 強制された悪しき政治的独裁者への服従、悪しき独裁者の管理の容認という対極の二つである。

「愛」という価値は、この1だけでなく2も含む。3は含まない。一人一人が相手や他オブジェクトの価値を高めるには、必死にその実現方法を考え実行する小さな神仏にならないといけないのではないかという状態から前に進まない。罪と罰を超える新しい原理が必要である。そのときに復讐がなくなる。とりあえず、一方向一体化である所有（持つ）、帰属（属する）から、双方向一体化（愛する）へ。

2021.02.23

2. 自己対象化、自組織、自「国」対象化

2018年末に気づいた。今まで、一体化が、一方向から双方向に形を変えていくことだけに着目していたが、これと同時に対象化も、自分以外の対象の対象化から、自己対象化を含んだ対象化に進化して行かなければならない。本人は意識していなくても、客観的に傲慢になっていて思考、議論が深まっていかないのが、一体

化の困難さに劣らない問題である。自己対象化ができないことは、自組織と自「国」対象化ができないことに繋がる。マルクスは国の消滅さえ観ていた。

2）多くの人の努力が必要だが困難であること

矛盾の解の完全な実現のために、この矛盾を完全に運動させることが必要である。

制度と人の生き方の二つを同時に変革することは困難なように見えるが、数千年の歴史において、不十分だが無意識に二つを同時に行ってきた[FIT2016]。意識して努力すれば短期間で二つは実現可能だろう。おそらく全員が同時に目的を持ち必死に意識的に没頭して努力することなしには実現できない。全員の努力は大きな課題である。努力というのは、次の「諸個人の力」[DI]である。

（マルクス、エンゲルスが理想とする共産主義という運動の）「従来のあらゆる運動と異なるところは、それが従来のあらゆる生産関係と交通関係の基礎をくつがえし、あらゆる自然発生的前提をはじめて意識的に従来の人間たちの産物として取り扱い、それらの自然発生性を剥いで一体となった諸個人の力に屈せしめるところにある」[DI 国民文庫 p.132]　「ドイツイデオロギー」第一巻ＩＣ [DI 国民文庫 p.132]に、実現の力としての一体化ないし一体という言葉が３回出てくる。一体化によって没頭して皆が集中して取り組む一体化、一体となった諸個人の力が実現の原動力になることを表しているように読める。これはマルクス,エンゲルスが理想としている共産主義という運動についての文からの引用を基にしているが、一般に理想について当てはまると考える。だが、マルクス、エンゲルスは、実現の原動力としての「一体となった諸個人の力」に何の疑問も感じていない。彼らの検討も新しい社会をどう作るかについては不十分だった。それに、ここでは個人は一様に扱われている。人類の客観的原理が、対象化と一体化の統一、自由と愛の統一である。この客観的価値実現と私の主観的幸せの統一が求めるものである。

この統一が理想の生き方を作るというのが私の主張である。全員の努力と普及が課題になる。

弁証法的止揚による思考や議論は、まだ、政治、行政、マスメディアなど、生産労働に直接関わらない領域においては、殆ど行われていない。かつ、政治、行政、マスメディアが実質、支配層を作っているという問題がある。2021.04.26 (4 章)

3）画一的な善人だけのつまらない社会になる問題、努力しない人の問題

1. 画一的な善人だけのつまらない社会になる問題

「一体的努力を全ての人が行う」結果、できる社会は「善人」だけからなるつまらない社会かもしれない。実際には理屈どおりにはならないから大丈夫と言ってはならない。多様化の重視で一部は解決するが、単純な一方向一体化は、この多様性を

排除してしまう。相手の排除という多様性否定(他を排除する帰属感）と多様な価値の軽視（所有していないものを大事に扱わない所有観）をもたらすからである。

一方向一体化がもたらしてきた欠点を排除するために、次の双方向一体化へ発展すればいいのか？

多様化と統一すればいいのか？二つ方向がある。一つは、「彼らを非難してはいけない。非難自体、彼らを上から見ている。彼らの生き方も別の生き方として尊重し、それで良いのかもしれない。しかしそれだけでよいのか？」と考える。二つ目は、「あくまで努力する生き方が正しいので、そうしない人の立場に立って、何とか自発的に努力するようにさせるようにしなければならない、彼らを生むのは目指す価値が必ずしも完全に正しくないからではないか？

だから目指す価値の正しさは常に見直さなければならない」と考える。

どちらがいいのか分からない。後者の「目指す価値の正しさは常に見直さなければならない」気持ちを継続すればどちらも同じかもしれない。別の答えがあるのかもしれない。これらが解決しないなら、今の常識が、対象化と一体化の統一に変わっただけになる。それでもそれは進歩だろうか。答えの見通しがない。

2. 努力しない人の問題

提案している生き方は、常識を変える常なる努力を必要とする。努力する人は全能力、全人格を発揮し、自分と他人、他オブジェクトを良くし続ける。しかしそうしない人との差はどんどん広がる。

背景にある根本的問題は、経験則で語られているわずかの支配層(後で触れる)と多くの非支配層、一,二割の努力する人とそれに従う人という構造の普遍的な原理がある。これは、常識を変え、常なる努力を必要とする生き方を受け入れない本質的構造があり、目先の楽を取る本質的に保守的な人がいるのではないかということである。文化・文明成立後、常に少ない支配層と多くの非支配層はある。一方、階級対立などは、マルクスの言うところと異なり、すでに実質的に資本主義が壊した。資産の格差は、資本家と労働者の差によるものではなくなった。

努力する少ない支配層と努力しないで周りに流される多くの非支配層、時流に乗って生きていく人とそうでない人、という社会心理要因による区分は残っている。2019.11.10, 2020.03.22 今の左翼やリベラル、一般的に「昔」の流行思考者には、ただ時流に乗って自分では余り考えず生きていただけの人が多い。そういう人は今も自分では余り考えない。

人は経験と教育で常識を身につけている。半数は、目の前の意識的対処の必要な物事を判断し意識的に努力し方法を使える。残りの半数は、1 常識に過剰適応しているか、2 自分の目の前以外に興味がないか、3 小さな善の偽善的欺瞞的生き方である狂信的宗教や「主義」の作られた固定観念によりこの判断をせず努力しない。1

常識への過剰適応、2 自分の目の前以外への無関心は重大で、初等中等教育の感性と論理の教育見直しも必要とする。実現の見通しがない。3 は、事実を見ないことと特定の書かれたものの異常な重視で、両者はよく似ている。4 何でも自由に述べる権利はある。ある抽象度、粒度でだけ正しい内容を一般化し、論理的に正しいように述べてしまうこと,人がいる。論理がなく感情に作用するだけの文は、論理的に全て有害である。これを防ぐため、論理的内容について他からの批判を拒絶しないことは必須である。2020.02.20, 04.23

さらに 5 日本では、今は意見を言うと、SNS で匿名の右派、リベラル、左派からの誹謗中傷を受ける。女子プロレスラー木村花さんの、誹謗中傷を受けての自死も痛ましく衝撃だった。匿名の誹謗中傷は、フツウの小心な人のはけ口になっているらしい。フツウの人がやむを得ず生きていくためにいじめを起こしているのと同じ構造である。日本特有の「空気を読め」という意見も気になる。これらは重なりもある。実態把握とそれぞれを改善していく必要がある。努力する人とそれに従う人・周りに流される人は、支配層と非支配層の中にもそれぞれ程度こそ違え存在するという複雑な構造がある。今の所得の格差だけなら、不法に近い金融経済を規制し配分を外部から見直せば取りあえず解決する。階級対立が問題ならそれをなくすだけでよい。

問題は三つ。**21.** この、努力しないことは「悪い」と単純に言い切れない。この問題は生き方、価値観によるもっと大きな差である。全員の能力の全てを発揮しないかもしれないが、少数の努力する人と多くのそれに従う人の分離は、おそらく全体のエネルギーを少なく抑えることができるからである。つまり、これは、今のお金だけの価値であること、多様な個の属性を伸ばすことが価値でなく一様価値の条件がある今の社会では、なくならない。人世界がエネルギー最少基準だった時には、この構造は合理的だった。それに、原子力エネルギー技術・科学の進歩により、人類が、今まで従わざるを得なかった最少エネルギー制約は今後なくなる可能性もある。

22. 文化・文明成立後、資本主義が発達した今の課題は、この条件を変え、お金だけの価値であることをやめ、多様な個の属性を伸ばすことを価値とする論理・世界観を作り、ポスト資本主義を作る努力が必要である。解は、一人一人が世界の動きの中のどこにいるかを知り、一人一人の一瞬毎の努力が、世界、宇宙に貢献し、かつ自分の幸せ、喜びになるようにすることである。自分の幸せ、喜びは、単に、主観のうれしさでなく、世界、宇宙に貢献しているからのうれしさでなく、ただ両者が同時でありその統一であるから良い2021.01.16.04.15。これは本書の結論である。

23. 21.22.のそれぞれと関係をさらに検討する必要がある。この技術・科学の進歩と、生き方、哲学（論理学と世界観）には相互作用が起こる。双方を最大限発展させ、準備する必要がある。全ての個が自由に多様な個性を発揮して労働と生活をすることができ、それが社会全体の価値を高め自分の「幸せ」にもなることが、全員に共有されること。これは内からの要請である。外からは、エネルギー制約の制約条件の変化がある。生き方とエネルギー技術の個別の努力を全力でするしかないような気がする。2021.01.15

対象化と一体化の統一の実践の例として、労働と生活、思考と議論の二つしか挙げなかった。この二つを次の各領域に合った形で伝えることが画期的革新のキーになるが、まだうまく言えてない。

これらが解決できないなら、提案は、今の常識を、対象化と一体化の統一を目指し事実と価値の全体を求める運動に変えただけになる。それでも進歩だろうか。

付１ マルクス再考

1.「経済学・哲学手稿(草稿)」の４文

マルクスは若いころ「対象の自分(たち)への一方向の一体化」の弁証法的否定をすることが必要と考えた。内容は経済学・哲学手稿(草稿) [EPM]で述べられている。1844 年に書かれた「経済学・哲学手稿(草稿)」[EPM] は未完のメモで、しかも多くの部分がネズミにかじられ失われた状態で 1933 年に見つかった。

「経済学・哲学手稿」が、一体化そのものについて教えてくれる。

「太陽は植物の対象であり、植物には不可欠の、植物の生命を保証する対象である。同様にまた植物は、太陽のもつ生命をよびさます力の発現、太陽の対象的な本質力の発現として、太陽の対象なのである」[EPM 第３草稿, 岩波文庫城塚登、田中吉六訳, p.223]　まず、マルクスの「対象」の意味、双方向対象化、一体化を考える。彼はこの時、アニミズム一歩手前まで行っている。ここで彼は「植物Ａの対象である太陽Ｂ」は、太陽Ｂが植物Ａに価値のある作用を与える存在であることを言っている。ここでは作用を与えてくれる相手が自分にとって対象である。本稿では、主体に意思がある場合、主体ＡがＢに作用を与えることをＡのＢに対する対象化と言っていて、誰にとって何が対象かについては正反対である。ただ、植物Ａも太陽Ｂも意思を持たず、この二文では逆も成り立っている。彼は意識のないものが相互にお互いのプラスになる作用を行いあう双方向対象化を述べている。意識のある対象どうしの場合、双方向の対象化が双方に共有されているお互いを高めあうプラスの価値観によって行われると、一体化が実現する。

片方だけ意識のある場合、意識のないほうの価値を増しそれが意識のある側に反作用することを想定できるなら、擬人的に一体化が実現する。これは次の「人間が彼の対象のうちに自己を失わないのはただ，」の文章で述べられる。

意識のないものどうしの場合も、客観的にお互いのプラスになる作用を行いあう双方向対象化を、擬人的にお互いのプラスになる作用をしあうため、一体化ととらえることにする。

機能と構造の矛盾を、擬人的に自然にも適用したのと同様である。

2019.12.02,18,19 ,2020.09.21

もう一つの文章。「人間が彼の対象のうちに自己を失わないのはただ，この対象が彼にとって、人間的な対象あるいは対象的な人間となるときだけである。このことが可能であるのはただ，対象が人間にとって社会的な対象となり，彼自身が自分にとって社会的な存在となり，同様に社会がこの対象において彼のための存在となる場合だけである」[EPM 第３草稿，p.153、岩波文庫ではp.138]

この文が分かりにくいのは、目的達成が最初に静的状態で述べられ、解決の条件も２段の形の静的状態で述べられるだけで、矛盾の形で定式化されていないことにもよると思う。（「経済学・哲学手稿」には、矛盾についても考察があり、マルクス、エンゲルスのドイツイデオロギーでは、条件から矛盾にいたるプロセスが述べられる）2021.12.03。

文庫の三つの訳と英訳を何十回読んでも分からなかった第三草稿のこの二文が、十数年前、何となく理解できた気がした。さらに2019年12月やっとマルクスの言いたいことが分かったと思う。二文の抽象的な概念から、具体的網羅的な様々なイメージを思い浮かべることができるようになった。2020.08.24

この意味の説明を試みる。

1）人間についての認識

一文目の「命題」で仮の**本質**が述べられ、後はその内容を一文目の後半の「条件」、二文目の「条件」と徐々に、**網羅的に**展開していく過程が文章になっている。何かを把握するとは、全体の中の位置を述べその何かの本質を語ることができ、何かの要素を論理的に網羅できることである。一部を得るためには、全体を得なければならない。ここでマルクスは意識せずこの二つの全体を述べている。2020.04.27

一文目に対象的、二文目に社会的という言葉が出てくる。**社会**は、（人にとってものでなく）自己と他の関係の共同観念を本質とする。一文目は、自己と対象の関係を考察する。人間が主語の命題、「人間が彼の対象のうちに自己を失わない」は、人間が対象との技術的、生活的関係において人間としてあることは、自己に働きかける対象の中に自己があると言っている。

続いてマルクスは、その条件が対象が主語の命題「この対象が彼にとって人間的な対象あるいは対象的な人間となる」ことを言う。

条件は、人と対象に相互作用があり、人間と対象が一体になっていることである。これは一部を得るためには全体を得なければならないことの表現でもある。2020.04.27,2021.07.13

マルクスは、一文目の条件である二文目で、自己と対象の関係に社会との関係を加えて考察している。その条件は、人間、対象、社会の三つがお互いに一体になっていることである。これも一部を得るためには全体を得なければならないことの表現である 2020.04.27。

この二つの文章は、二段階で条件を語る形をとりながら、人間の本質を述べその内容の**論理的網羅**を完成させ、一部のために全体が必要であることの把握になっている 2020.04.27。第一の人間の認識の教訓である。この彼の把握は、網羅の論理だけによってだけ得られたように見えるが、前提には、歴史の網羅的総括があったと推測する。2019.12.19, 2020.04.26

2) 価値認識

第二の価値認識の教訓：対象化が自分の価値しか扱わないのに対し、一体化は、他人や社会の全体の価値を扱える。2020.04.26,2021.07.13

3) 生き方と社会変革の統合

第三の人の生き方と社会変革の教訓は、「対象化と一体化の統一」という生き方を作ることと、世界を変えること「社会、制度を作ること」は、同時に必要であることである。生きる原動力と政治経済など世界の原動力は同じでないと統合できない。両者が正しくないと同じにならない。世界を変える人が生きることと、生き方の新しい発見だった。2020.08.05,2021.03.10

新しい生き方を作ろうとしない人、常識を変えようとしない人に、新しい労働、新しい発見、新しい弁証法的批判はできず、新しい政治・経済、新しい何事も作れない。マルクスは、1844 年に 175 年後 2019 年の一体化の結論を先取りしていた。手稿であるからこそマルクスは、この問題の可能性と現実性の矛盾の萌芽を述べることができた。2020.03.09 マルクスはこの時、概念を変える問題,論理学を作る問題,世界観を作る問題の統合、歴史と論理の一致を意識していたかどうか。2020.03.13,8.01

マルクスは、同時期に、エンゲルスと共同で「聖家族」を書いていた。「聖家族」の 第４章３.「愛」という名前の節で、エドガーの愛を批判している。[マルクス・エンゲルス全集第２巻 聖家族. 大月書店. p.16-19 原著. 1844.] この節のエドガー批判の「愛」と一般論の愛の見分けが難しい。これに対し「経済学・哲学手稿（草稿）」の一体化（「愛」）は明快である。2020.07.06,31,08.06, 2021.05.10

エミール・ポッティジェリは、「経済学・哲学手稿」フランス語訳の序文で、「ヘーゲルが絶対理念の弁証法で解決した主観と客観との同一性の問題，それをマルクスは具体的に解決する」[EPM p.256]と述べた。しかし、マルクスはここで問題提起しただけで「解決」はしていない。

「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間的本質の現実的な獲得としての共産主義」[EPM 第３草稿，岩波文庫 p.130]

「人間と自然のあいだの，また人間と人間のあいだの抗争の真実の解決であり，現存在と本質との，対象化と自己確認との，自由と必然との，個と類との争いの真の解決である。」[EPM 第３草稿，上の岩波に続く p.146]

「私的所有の積極的止揚は，人間的生活を我がものとする獲得として，いっさいの疎外の積極的止揚であり，したがって人間が宗教，家族，国家，等々から彼の人間的な，すなわち社会的なあり方へ帰ることである」[EPM 第３草稿，p.147]

「活動と享楽は，その内容にとってと同様に，存在様式からいってもまた社会的であり，社会的活動と社会的享楽である。自然の人間的本質は社会的人間にとってはじめて存在している。

なぜなら，ここにはじめて自然は人間にとって，人間との絆として，他の人間にとってのおのれの現存在およびおのれにとっての他の人間の現存在として，同様にまた人間的現実の生活のエレメントとして現存しているからであり，ここにはじめて自然は人間自身の人間的あり方の基礎として現存しているからである。ここにはじめて人間にとって，彼の自然的あり方が彼の人間的あり方となっており，自然が彼にとって人間になっている。こうして社会は，人間と自然の完璧な本質一体性であり，自然の真の復活であり，貫徹されたる，自然のヒューマニズムである」[EPM 第３草稿，pp.148-149]

「私的所有の積極的止揚は、すなわち、人間的な本質と生活、対象的人間、人間的製作物を人間にとってかつ人間によって感性的に我がものとする獲得は、たんに直接的、一面的な享楽の意味、たんに占有の意味、持つという意味においてのみ解されてはならない。人間は彼の全面的本質を、ある全面的なしかたで、つまりある全体的な人間として、我がものとする。世界にたいする彼の人間的諸関係の各々、すなわち、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触感する、思考する、直感する、感覚する、意欲する、活動する、愛すること、要するに　彼の個性のすべての器官は、直接にその形態において共同的器官として存在する諸器官と同様に、それの対象的ふるまいにおいて、すなわち対象にたいするふるまいにおいて、対象を我がものとする獲得である。」[EPM 第３草稿，p.151]

「私的所有の止揚は、すべての人間的な感覚と性質の完全な解放である。しかしそれがこの解放であるのはまさしく、これらの感覚と性質が主観的にも客観的にも人間的になっていると

いうことによってである。目は、その対象が一つの社会的、人間的な対象、人間から起こる人間にとっての対象となっているように、人間的な目になっている。」「だが事物そのものが、それ自身にたいする、および人間にたいする、一つの対象的な人間的なふるまいなのであり、またその逆でもあるのだ。」[EPM 第３草稿, p.152]

「私的所有はわれわれを非常に愚かで一面的なものにしてしまったので、ある対象がわれわれの対象であるのはわれわれがそれを持つときにはじめてそうなのである。」「もっとも、私的所有は、占有のこれらすべての直接的実現そのものを、再びただ生活手段とのみ解するのであって、それらが手段として奉仕する生活とは、私的所有の生活、すなわち労働と資本家なのである。したがって、すべての肉体的および精神的な感覚のかわりに、これらのまったくの疎外、すなわち持つことの感覚が現れた。人間存在は、その内的な富をおのれのそとへ生みだすために,この絶対的な貧しさへ還元されねばならなかった」[EPM 第３草稿, p.151-2]

2.「資本論」

1) 所有について

エンゲルスは「フォイエルバッハ論」でフォイエルバッハの「誰にもどこにも当てはまる普遍的愛」を非難している。マルクスは、これに対し、経済学・哲学手稿で、アニミズム一歩手前と見まがうような、あらゆるオブジェクトと人の対等の一体化の関係を目指した。アニミズムは、単純否定すべきものではない。「神」が謙虚さをもたらしたと同様、それは自然への敬意をもたらした。

当時、徐々に広まる自共同体への帰属意識、一体化意識には用語がなかった。今も,ない。

マルクス自身は、一体化の把握と実践にあと一歩まで行きながら、その後展開できなかった。マルクスは、この双方向対象化、双方向一体化に対するのが一方向一体化の法的私的所有だととらえ、この疎外された労働の結果が資本家の私的所有となるという単純化し過ぎたモデルで扱い、労働を疎外されたものと等値し、法的私的所有をなくすようにその後の論理を展開してしまった。

マルクスが作った「私的所有」は、ヘーゲルの「所有」観念にとらわれてしまった。ヘーゲルにおいては「所有」は「法」概念である。本来、所有は、主体が個人だろうが集団であろうが私的所有である。ヘーゲルは「法の哲学」（岩波文庫, 下, 客観精神 A 法 a 所有 pp.193-195）で、法的概念である「所有」の説明を完璧に行っている。

「対象の自分(たち)への一方向の一体化」やその否定を表す適切な概念や用語がなかったので、マルクスは、ヘーゲルによって定着していた「所有」概念を使ってしまった（所有についての第1の間違い）。ヘーゲルは、法的概念でない「一体化」そのものを扱わなかった。そしてマルクス自身、それを引き継いでしまった。これは今の「マルクス主義者」において事情は変わらない。

世界の何人かが「富」の何十%を占有していることが、格差拡大の「悪」の証拠として述べられる。これは主として実体経済ではない分野の「利益」が増した問題である。「ブルジョワジー、資本家階級」と「プロレタリアート、労働者階級」の対立や、資本家による無秩序な生産や、今の資本主義の労働の対価としての収入の差が、格差の主「原因」ではない。

そのため、マルクスが否定すべきは「対象の自分(たち)への一方向の一体化」で、実現すべきは「双方向のあらゆる対象との一体化」だったにもかかわらず、その後、マルクスが言葉で語ったのは、単なる「法的私的所有」の否定になってしまった。問題は、マルクスがあたかも法的私的所有を否定しさえすればいいように語ってしまったことである（所有についての第２の間違い）。このヘーゲルやマルクスを責めるのは酷だろう。

最近、ある所有については、共同所有、コモン(ズ)が、唱えられるようになっている。本質的な一体化に対する、過渡的部分解ではあると思う。なお、物々交換誕生当時は、集団の共同所有だったので(５章)、今唱えられている共同所有は原点回帰である。2021.07.12,28

2)「必要労働」について

マルクスは、その後、この「誤解した」所有概念と、「所有」しない労働者と「所有」する資本家の完全分離という単純すぎるモデルで「剰余価値」の間違った展開をし、単純すぎる資本主義経済理論を作ってしまった（所有についての第３の間違い）。

彼の資本主義経済理論の前提は「剰余価値」は「資本家」に渡り「労働者」には行かないことである。これは作られた当時はほぼ百%正しく事実に近かった。しかし百数十年でこの前提は変わってしまった。それに今、日米ではGNPの６，７割が国内消費である。生産量を上げるには労働者の給料を上げることは不可欠になっている。

一方「労働者の生活に必要とする労働（必要労働）と、それを超える剰余労働（不払労働）から構成され、この剰余労働によって生み出された価値が剰余価値である」[WIKI剰余価値]というような単純化し過ぎた「定義」が横行している。労働者と資本家しか存在せず、剰余価値は「資本家」に渡り「労働者」には行かない単純モデルでだけ、この定義は正しい。今、労働者の生活に必要となる「必要労働」から生ずる必要価値に相当する金額は、日々の自己の学習費用、人口が減らない数の子を産み必要な高等教育を受けさせる費用などを含む大きな額である。従って上の「必要労働」の定義は明らかに意味がおかしいので変える必要があると考える。

平松民平さんと高原利生の（平松さんが 2020.09.14 のメールで言われた内容を高原が定義にした）仮定義：「**支払い労働（**資本主義の前期までは必要労働）とは、労働者が雇用者から（お金や現物等として）受け取る対価に相当する労働」。

従来の、資本主義に限った定義が一般化され、意味が明確になるという二つのメリットがある再定義である。デメリットは「マルクス主義経済学」の用語と異なることである。2020.09.17

これに基づく時間の区分の大雑把なくくりは次のとおり。

1 物々交換経済（6 千年くらい前から 4 千年くらい前の文化・文明成立まで）。
2 お金が媒介する経済 1。
21（文化・文明成立から資本主義成立まで）
22（資本主義前期）
3 お金が媒介する経済 2（資本主義後期）。

3)「資本論」第 1 巻第 1 章

5.3 節と重複するが、ここで資本論第 1 巻第 1 章についてだけ述べる。5.3 節で、交換制度開始の条件を述べ物々交換を詳しく書いた。物々交換や言葉のように、観念とものの二つに関わる交換制度における両立矛盾の開始に必要なのは、[0] エネルギーが前提で、[1] 始めるための条件があり、かつ、[2] 始める矛盾の生成と、[3] その矛盾の解の実現が同時でなければならない[THPJ2012]。

資本論第 1 巻第 1 章で、マルクスは「商品ありき」の前提で検討を始めてしまう[THPJ2012]。貨幣がない状態での「商品ありき」は「物々交換ありき」ということである。これが私の矛盾概念見直しの大きなきっかけになった。つまり物々交換という制度の開始の検討、何かを始めるという運動の検討をしなければいけなくなった。資本論第 1 巻は（冗長なのは別にして）第 1 章以外は見事な論理が展開されている。しかし、第 1 章の、運動の開始や外部条件を十分扱えない、従来の弁証法論理、その単位である矛盾は使えないので、新しく作り直さなければならなかった。（2,3,4,5 章）

物々交換は、人の共同観念と商品という二つの矛盾からなる特別な制度で、二つの矛盾の同時運動を表現する次の三つの段階で実現される。しかしマルクスの扱うのは最後の第三段階だけである。

第一段階の二つの矛盾：共同体代表者の観念に、私たちとあなたたちがいて、このものは私たちが所有し、そのものはあなたたちが所有しているという共同観念が共有され（共有は、二項間の関係の一種で、矛盾を作ることができる）、被交換物に使用価値と交換可能性という二項の両立矛盾ができる。この二つの矛盾は、二人の代表者の観念に共同観念の共有が生じた瞬間に、被交換物に、使用価値というもの

としての属性に、交換可能性という制度上の属性が加わり矛盾が生成されるという、不思議で奇蹟的な生成の仕方をする。[THPJ2012 図4.物々交換の第一段階。マルクスの書かなかったこの矛盾の原動力も図に書いている]

第二段階の二つの矛盾：交換可能性という制度上の属性が交換価値に転化し**物々交換**が成立する矛盾。

それに対応する共同観念の矛盾。[THPJ2012 図5.物々交換の第二段階。同上]

第三段階の二つの矛盾：被交換物の使用価値と交換価値の矛盾が、交換価値が実体化し**貨幣**として分離独立し解決される。それに対応する共同観念の矛盾。[THPJ2012 図はないが図4,図5と併せて一つの図に書くこともできる。cf, [FIT2005/1 表示法] [TS2006] [TS2008、同スライド] [THPJ2015/1]]

3. マルクスの長所、短所、展開すべきところ

マルクスの長所の大きなものは、次の４点である。

1 常に常識の「全てを疑い」全体を求め続ける態度を持っていた。2020.11.05,12.11、

2 **対象化**された把握として、生産力と生産構造を機能と構造の矛盾としてとらえ、労働が価値を作る構造を解明した。

3 対象化行為である労働が人間の可能性を全面的に発達させ、そのことが新しい社会を作るという対象化の可能性を明らかにした。

4 **一方向一体化**の初期的形態、所有と帰属を止揚する(国の消滅など)可能性を示し、**双方向一体化**の道を拓いた。悪しき所有と悪しき帰属を同時に止揚し双方向一体化を目指すしかない。超所有と超帰属かもしれない。実現で、お金だけの価値と戦争は同時になくなる。2021.06.29,07.15,07.24 （5章）

マルクスの惜しむべきは、次の３点である。

5 未来像については、「所有」概念の把握ミスから一体化の可能性をとらえきれず、対象化と一体化の矛盾をとらえられなかった。それによる一面的な「労働疎外論」を作った。2020.06.24、彼の労働疎外論は、当時のお金という価値の所有が前提の論になってしまった。今の労働は、実質、彼が述べた人間の能力の全面発展をもたらすものに近づいている。

6 政治・経済について所有の当時の現実を一般化しすぎ社会の間違った設計図を作ってしまった。当時の所有の問題は大幅に解決されている。今の所得「格差」の多くは、労働の「剰余価値」の所有に由来しない。お金を価値とする資本主義の矛盾である、生産がもたらす一切の機能と生産構造の矛盾の解は、お金だけが価値でないポスト資本主義の生産がもたらす一切の機能と生産構造の矛盾に進むこと、つまりお金だけが価値でないポスト資本主義に進むことである。生産力や生産の機能

と,生産構造の矛盾は従的な課題であり、前提である価値の弁証法的否定に進むことが解である。これは制度を作るだけでなく、哲学・常識、生き方を同時に変える努力、闘いと同時にしか得られない。数十年、数百年後、所有という一方向一体化は、双方向一体化に姿を変えていく。同時に帰属という一方向一体化からも他を排除する意識はなくなっていく 2021.06.29。（５章）

7 小さな弱点は、一面的と取れる表現で分業に長い間反対したこと（人間の全体的発展を求める善意からではあったが）、価値を交換価値の意味で使ってしまったことなど。

1,2,3,4 は、マルクス本人の再評価である。5 のもとはマルクスの「所有」の把握ミスで、5,6 は、後の「マルクス主義」批判でもある。その後、マルクス以後の「マルクス主義」は、生産手段の社会的所有、管理という「国家社会主義」的「理想」像を作ってしまう。これは生産が「資本家」によって「無秩序に」行われる欠点を扱うだけである。これは，問題のごく一面しか解決せず管理の方法も明らかにならず、何より経済の原動力にならないことは歴史が示している。

これは事実を見ないこと、書物を解釈するだけという初歩的な二重の間違いによる。

8 彼の見直すべきところは、弁証法論理と今後の展望である。いずれも案を本稿に書いた。

大阪学院大学 中川徹 名誉教授による高原利生論文集解説

『TRIZ ホームページ』は、高原利生さんの研究の重要さに注目し、2003 年以後の同氏の学術発表・研究ノートなどのすべてを収録・公開してきております。前回は、高原利生論文集第４集（2018．8.30 掲載）で、論文[37]～[47]の 11 編を掲載しました。今回は、その後のもので、2018 年秋～2019 年末までのものをまとめて掲載します。ただ、第５集ではなく、その中間期での簡単なまとめの形式にさせていただきました。

2018 年８月に、高原さんはそれまでの研究の集大成として、「矛盾モデルと論理的網羅思考による人類の生き方の基本原理についてのノート --未完成の哲学ノート (2018 年)」を（本ホームページに）発表しました。その後、その全体を（少しずつ推敲して）自費出版することに努力され、2019 年３月にその初版『未完成の哲学ノート（2019 年２月）』（B5 版 208 頁）を発行、さらに推敲して、2019 年９月に同４版（B5 版、170 頁）を発行しています。

http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Takahara-Papers2019/Takahara-Papers2018-19-200105.htm

高原さんは、ものごとを根源的に、一般的に、体系的に考察し、独自の理論体系を構築してきておられますから、いろいろな概念・用語を定義／再定義して使われており、馴染みにくいことも多くあります。一つの方法は、論文集(1)(2)(3)(4) の紹介（中川の編集ノート）を順に読んでいただくこと、もう一つは、高原さんの今回の概要 **注** (はじめに) をはじめにして、順にじっくり読んでいただくことか、と思います。

論文集第１集（2003～2007 年）では、問題やシステムを捉える単位としてオブジェクト（普通には構成要素、ここでは、認識される「もの」と「こと」のすべて）を考え、その属性（性質）、機能（働き）、粒度（考察するオブジェクトの空間・時間および性質の範囲）を考察し、オブジェクト間の関係（変更、作用、対立など）を考え、これらを記述する図式表現を作っています。

また、現状とありたい状況との差を「差異」と呼び、「差異解消」が問題認識・問題（矛盾）解決・目標達成などの広範な人間活動を表現するものだと考えています。

論文集第２集（2008～2012 年）では、5 年間 13 編の論文で、随分と概念が拡張されています。考える方法として、論理的網羅思考を掲げ、考察する対象の範囲を粒度として明確に意識することで、論理的にすべての場合を尽くすことを志向しています。

その結果、（広義の）差異解消には、普通には「変更」「変化」と言われる（狭義の）差異解消の他に、外部との関わりを持つ二項（二オブジェクト）間の関係の生成と運動（プロセス）とから成ると捉え、この後者を「両立」あるいは拡張した「矛盾」と呼んでいます。これらの論理的網羅思考と拡張した矛盾の考え方が、弁証法論理を一層柔軟・強力にするといいます。

さらに、従来の技術分野を中心とした視野を広げて、いろいろな社会システム・制度を考えています。特に、これらの考えを身につけた「生き方」を重視し、「TRIZ という生き方」を提唱したことは、驚くべきことでした。

論文集第３集（2013～2015 年）では、議論がさらに明確になり、テーマの展開が見られます。

その理論体系を著者が始めからきちんと説明しようとしているのが、『TRIZ ホームページ』に投稿された THPJ2012 の研究ノート（20 頁）、および、THPJ2015 の研究ノートの三部作です。特に後者は、「分かっていることより分かっていないこ

との方が圧倒的に多い。何が分かっていないかをこそ書くべきだと思っている」として、あえて「（未完の）研究ノート」と位置づけています。

前述の拡張した「矛盾」の概念を明確化する作業が行われていて、矛盾の二項を一体化する過程を含んだ（だから何重にも入れ子になって表現されるような）「一体型矛盾」という考えが出てきます。また、弁証法論理を展開・整理した結果、中川の「6 箱方式」とよく対応すると分かったと言います。「世界を統一的に捉え、人間の生き方の土台を理解する。そのための論理的な方法を作り上げる」という大きな構想で、いくつもの学会発表が行われていて、咀嚼し・紹介することが私にも困難になってきました。

論文集第４集（2016～2018 年）

さらにテーマの深堀と拡張が行われており、最新の段階をまとめたものが「未完成の哲学ノート（2018 年）―矛盾モデルと論理的網羅思考による人類の生き方の基本原理についてのノート」です。

矛盾の概念（特に「一体型矛盾」）と論理的網羅思考とが考察の主要道具です。対象化（＝分析、客観視、個別化、自由、批判など）と一体化（＝総合、主観取り込み、統合、愛、謙虚さなど）とを、繰り返し・階層的に・入れ子的に考えていくことが、問題解決・課題達成（＝差異解消）の鍵であり、生き方の土台であると、論じています。

また、人類の歴史（その意味）を大局的に捉えることも繰り返し論じていて、物々交換の開始の意義を説き、農業革命と産業革命をエネルギー革命と位置づけています。

高原利生論文集第四集 http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2018Papers/Takahara-Biblio4-2018/Takahara-Biblio4-180823.htm　（以上、中川 徹先生）

後書き 2020.03.13,2021.07.18,09.24

My ISBN、デザインエッグ株式会社に出版機会を与えられ、2019 年 3 月に「未完成の哲学ノート」初版を出してから 2 年 5 ヶ月で 17 版、本書はそれに続いて 2 冊に分けたものである。

残念ながら全く売れていないので、他人に役に立つことはなかった。提案している論理的網羅思考は、読むたびに自分の文の内容、哲学,生き方をより良く大きくし続け、単純にし続けるので終わらないが、改版は区切りである。その時にはこれで画期的に改善した,これで理解してもらえる、と思って改版するが 2 ヶ月経つと古くなる、その繰り返しであった。

なぜ今、世の中の政治、評論、マスメディアに、反論理、間違った事実像と将来像が横行しているのか？その怒りが書く原動力だった。できた内容は、横行している常識の間違いを気づかせ、同時に事実と真実の仮説、価値を増し続け実現し続ける論理の仮説になった。副作用で、分かった論理で世の中の政治やマスメディアの初歩的な論理の間違いは明らかになり、ますます怒りも増す。

本書の論理の実現は、足をお互いに引っ張り合い罵りあう日本では絶望的である。しかし、取りあえず、本来の、必要な精髄を含む、論理学による、可能な限りの単純さを求めてできた哲学書ができた。歴史だけに基づいて、少ない概念と原理によるシンプルで、時代に必要な論理学・世界観という利点を持ち、既存の哲学に代わる哲学の骨子が得られた。

態度を参考にした哲学はある。

1）デカルトの網羅から論理的網羅を中心にした方法を作った。2）パースが探求した仮説設定について、演繹、帰納を含む定式化をした。3）初期マルクスと TRIZ から、全体を求め続ける態度を持つ論理学を作った。三者をまとめたのが論理的網羅の概念である。

残っている感情論を除き、第一部の長く有効な、哲学、生き方と、第二部の 10 年程度の短期間有効なポスト資本主義のための課題解決提案からなる。根源的網羅による仮説設定という論理学の積極的態度は、自分でやってみないと身に着かないが、同時に生き方、社会を作っていく原動力になる。

論理学が主導して、哲学（論理学と世界観）、生き方、社会は、将来、同じようになる。論理学が主導するゆえ経験によることが少なく習得しやすい。対象化とその下での機能と構造(内容と形式)の矛盾の先に、対象化と一体化の統一という生き方が出てきた。

論理的網羅思考では、誰が考えても簡単に従来の常識と異なり、かつ従来の常識による感情の流れとは無縁の結果が出る。理想的には、一文でせめて一節で、全体が分かるように書きたかった。

論理的網羅思考を考えないといけない理由に、アルコール依存症で死んでいる頭でも考えられる思考法を作るということもあった。結果として凡人やコンピュータに適した論理ができた。

本稿では触れなかったが、芸術作品の働きは大きい。芸術は、感性、感情に影響があり、実世界では、感性、感情は、常に論理に勝つ。芸術作品の最大の論理上の機能は、既存の固定観念を壊すことと新しい価値を検討することだと思う。しかし少なくとも多くの文学作品にはどちらもない。多くの作家には、固定観念や世界観の影響下で起こる小さな問題の表現しかない。

本を読んだのは学生時代だけである。会社時代の後半に読む時間はなかった。幸か不幸か本が散逸した定年退職後は、なるべく本を読まない主義を通した。小さな課題だが孤立した生き方を強いられる。書いていて楽しくはなかった。分かったことは伝え実行しなければならないが、目先の楽を取り失うものを恐れ勇気と努力が足らなかった。しかし、2003 年 3 月に病院で書き始めてから 18 年 5 ヶ月、短い頁で必要最小限の統一的な全体を書くことができた。

謝辞と詫び辞

本稿は、大阪学院大学名誉教授中川徹博士の 2005 年以来長年に渡るご理解と励ましの賜物である。先生は、ご自分のホームページに長大な「高原利生論文集」http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/indexGen-Paper.html#paper0 の (C)「学会等発表・研究ノート・技術ノート」 までお作り頂いた。

内容について、矛盾モデル、論理的網羅思考とも、直接間接にほとんどを中川先生に負っている。本稿は、中川徹先生の次の三稿へのコメントと言ってもよい。

・「TRIZ のエッセンス」[Naka-2001]、・「六箱方式」[Naka-2005]

・「人類文化の主要矛盾「自由 vs 愛」」[Naka-2016] [Naka-2017]

また中川徹先生のホームページの「子どものための創造的想像力の開発（CID) コース : 新しいことを思い描く力をつける (小学校 1-3 年生向け) (Natalia V. Rubina (ロシア)、英訳 Irina Dolina)」は、論理的網羅思考を考える上での参考になった。[HKD 福田ちはるさんが訳を進めている]

今まで L. Ball,「階層化 TRIZ アルゴリズム」[LB]や、Denis Cavallucci[DC],D. Russo, S. Duci[RUSS]、Ed Sickafus [ES]などの本や論文の翻訳の中川先生のお手伝いをさせて頂いてきた。いずれもその後の生き方を変えるものになった。いくつかは古謝秀明さんとの議論と共訳による。

2003 年以降、生き、努力を始めることができたきっかけは、当時の The TRIZ Journal 編集長 Ellen Domb 博士とのやりとりと励ましであった。本稿の執筆には、平松民平さんから教えられ励まされることが多く、対話が有益だった。石井強(つよし)さんから大きな知識と励ましを頂いた。

会社生活で上司は、私の能力を伸ばそうと懸命の努力をしてくれた。生きていくことができたのは、上に記した方々や、富士通、富士通ネットワークエンジニアリングの上司、特に当時の、村松課長、有本部長、安東(押方)さん、嘉屋課長、樋下部長、岡本部長、浅野部長、龍部長、新谷(しんがい)洋人君（いずれも当時の肩書)、さらに岡本内科小児科の岡本博士、林病院の前田先生、榊原病院の多くの医

師・看護師各位、人との対等の関わりと努力することを教えてくれた孫,結菜、他の多くの人々のおかげである。

アルコール依存症のため会社と家族に迷惑をかけた。本稿はお詫びとお礼である。

文献

[RDI] デカルト,「精神指導の規則」野田訳, 岩波文庫, 規則第 3-8. 11, 1950. (同じ訳者による新訳あり), 原著 1701. 未完成のノート。次の AMAZON 書評内の高原利生の書評参照。http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4003361342/ref=cm_cr_dp_hist_five?ie=UTF8&filterBy=addFiveStar&showViewpoints=0 近代合理主義を作る苦闘の中に近代合理主義を超える何かがあった。何かが未完成のメモの中にあるのは、マルクスについても同様である。完成した「本」は思考の搾りかすである。

[KNT] I.カント,「純粋理性批判」篠田訳, 岩波文庫上, 1961. 原著 2 版 1787.
pp. 149-159, （ここではカテゴリーの二分、三分について述べている）
pp. 286-294, （ここでは存在と関係の関わりについて教えられた）

[EPM] K. マルクス, 「経済学・哲学手稿」藤野訳, 国民文庫, pp.98- 157, 1963, 原稿 1844. 本文で何度か触れた二文は国民文庫訳だけがよく分かった。

[DI] K. マルクス, F. エンゲルス「ドイツイデオロギー」古在訳, 岩波文庫, 1956, 原著 1845-46.

[F] F. エンゲルス, 「フォイエルバッハ論」松村一人訳、岩波文庫、1960. 原著 1888.

[CSP1] C.S.パース, 「論文集」上山、山下訳, 中公バックス, 世界の名著 59, 中央公論社, 1970, 原著 1931-1935. 原論文 1877-1905.

[CSP2] C.S.パース,「連続性の哲学」伊藤編訳, 岩波文庫, 2001, 原講演 1889.

[JPS] J.P.サルトル, 「方法の問題」, 原著 1960. 平井啓之訳, 人文書院.

[DV] ダヴィドフ,「疎外と自由」（ロシア語原著名「労働と自由」1962、ドイツ語訳 1964、藤野訳, 1967. 青木書店.

[SM1971] 清水正徳（まさのり）,「人間疎外論」紀伊国屋新書. 1971.

[UEYM1] 上山春平, 「弁証法の系譜」第二版, 未来社, 1968.

[UEYM2] 上山春平, “プラグマティズムの哲学”, 中公バックス 世界の名著 59 パース、ジェイムス、デューイ, p.7, 中央公論社, 1980.

[HDK] 日高敏隆, “虹は何色か”,「現代思想」青土社, 1978.5.

[TRSW] 寺沢恒信:「弁証法的論理学試論」大月書店, p.157, 1957.

[YSMT1] 吉本隆明,「論註と喩」言叢社, 1978. [YSMT2] 吉本隆明,「『反核』異論」深夜叢書社, 1982. [YSMT3] 吉本隆明,「反原発異論」論創社, 2015.
[YSMT4] 吉本隆明,「初現への言葉」青土社, 1974.「論理的に語る」態度を教えられたのは、彼の「言語にとって美とは何か」の序文である。
対象化のマルクス主義と一体化のキリスト教の双方に優れた見識を持った思想家に、田辺元、吉本隆明がいる。一体化、対象化とともにエネルギーも重要である。吉本隆明は原子力についてもすぐれた見識を持っていた。
[STP2016] "科学技術基本計画", 閣議決定, p.11. 2016.
http://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5honbun.pdf
[YNH2011] ユバル・ノア・ハラリ「サピエンス全史, 文明の構造と人類の幸福」(河出書房新社 2016. 原著 2011, 英訳 2014)
[DIA] 中山正和, 「演繹・帰納・仮説設定」産能大, 1979.
[Tana] 田中宇の国際ニュース解説 http://tanakanews.com/
[TSK] TRIZ 塾. http://www.trizstudy.com/
[RH] R. Horowitz, "ASIT's Five Thinking Tools with Examples", The TRIZ Journal, Sept. 2001.
[LB] L. Ball,「階層化 TRIZ アルゴリズム」, 高原, 中川訳, (ドラフト版, 創造開発イニシアチブ 2007.) クレプス研究所, 2014.
[RUSS] D. Russo, S. Duci, "アルトシュラーの 76 の標準解から 新しい 111 の標準解へ From Altshuller's 76 Standard Solutions to a new Set of 111 Standards",
ETRIA, TRIZ Future 2013. 下記に高原、中川訳. http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2014Papers/Russo-TFC2013-Standards/Russo-TFC2013-Standards-140427.html
[DC] Denis Cavallucci, "How TRIZ can contribute to a paradigm change in R&D practices?" , 高原・古謝・中川共訳, 2012年第8回TRIZシンポジウム基調講演. http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jforum/2019Forum/FromReaders2019/FromReaders-1811-1901.html 高原のコメントも掲載されている。
[SB] Southbeach Modeller, http://www.southbeachinc.com/
[ES] Ed Sickafus, "Subconscious Problem Solving Using Hazy Heuristics", International Journal of Systematic Innovation, Vol. 3(1) . ICSI2015, 2014. 7. 2014. 高原、古謝、中川共訳、2015年7月1日. http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2015Papers/Sickafus-ICSI2014/Sickafus-ICSI2014-Subconcious-150721.html

[TKHR T] 高原友生,「悲しき帝国陸軍」中央公論新社, 2000.「商戦―伊藤忠 火の玉社員の半生記」中央公論新社, 2002. 高原友生は兄である。お礼を言えないまま亡くなってしまった。昔の企業人は世界を観ていたと思う。山崎豊子の小説の主人公のモデルになった。友生の三男 明生は東京大学公共政策大学学院 前院長で、本書について常識を変えようという態度を学びたいと言ってくれた。長男孝生も大学教授である。
[YN1994] 安井信子,「<個>を超えて―現代アメリカ文学を読む―」和泉書院, 1994. 川崎医療短大助教授時代の著書。個の展開についての感性と論理が感動的。本書はこの対案、続きでもある。
[HKD] 福田ちはる, http://ipmainly.com/category/triz
https://ipmainly.com/triz-edu/
[MM2009] 森久光男, "TRIZの普及と定着への活動理論的アプローチ", 第5回日本TRIZ シンポジウム, Sept. 2009. お互いに敬意を払い長時間の対話をした数少ない人である。
[HT2020] 平松民平. "資本主義の余命はどれくらい残っているか、史的唯物論に照らして診断するヒント集 1st edition 生産力と技術の歴史的位置 我々は今どこまで来ているか", 2020年 基礎経済科学研究所秋季研究大会, Oct. 2020. 高原と同じ技術者出身で情報の扱いが秀逸である。本稿の２個所は平松さんとの対話をまとめたものである。
[THPJ] 中川徹, TRIZ ホームページ,
http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/index.html
[Naka-2001] 中川徹, "TRIZ のエッセンス－50 語による表現".
http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/Essence50W010518.html
[Naka-2005] 中川徹, "創造的問題解決の新しいパラダイム－類比思考に頼らない USIT の 6 箱方式－" 日本創造学会第 27 回研究大会 2005.
http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2016Papers/Naka-JCSJournal2015-USIT/Naka-JCSJournal2015-USIT-160608.html
[Naka-2016] 中川 徹, "社会の貧困の問題に TRIZ／CrePS でアプローチする：人々の議論の根底に、人類文化の主要矛盾「自由 vs. 愛」を見出した", 第 12 回日本 TRIZ シンポジウム. Sept. 2016.
[Naka-2017] 中川 徹, "人類文化の主要矛盾「自由 vs 愛」を考察する(2) 個人における「自由 vs 愛」の矛盾・葛藤と「倫理」",

第 12 回日本 TRIZ シンポジウム. Sept. 2017.などの発表論文をまとめ直したもの。
[Naka-2019] 中川徹, “6 箱方式”, 『デザイン科学事典』, 日本デザイン学会編, 編集委員長 松岡由幸、丸善出版、2019.10, pp. 274-277.
http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Naka-DesignEncyclo-2019/Naka-Encyclo-SixBox-191120.html
[CS2] 高原, "通信サービスへの構造的アプローチ", 信学会通信サービス時限研究会第二回通信サービスシンポジウム, pp.27～40, 1988.5.
[SITA1990] 高原, "通信過程の論理構造について", 情報理論とその応用シンポジウム SITA'90, pp.687-692, 1991.
[OUYOU1990] 高原, 龍, “理想技術論と情報ネットワークシステム”, 応用科学学会誌, Vol.4. No.1, pp.19～25. 1990.
[IPSJ1991] 高原, 新谷他 "センサベースシステム等の設計過程と論理構造の構造関数", 情処 42 回全大, 5G-5 1991.
[OTW1992] 高原, “決定・ハムレット・コンピュータ”, 音羽の森 28 号, 講談社, 1992.
2003 年以降の高原の参考資料は、中川徹教授のウェブサイト参照。
http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/indexGen-Paper.html#paper0 の (C)「学会等発表・研究ノート・技術ノート」高原利生論文集 1,2,3,4。
[TJ2003Jun] Takahara, “Application Area of Thinking Tool or Problem-Solving Tool”, The TRIZ Journal, Jun.2003.
[FIT2004] 高原, “オブジェクト再考”, FIT2004, K-053, Sept. 2004.
[FIT2005/2] 高原, “オブジェクト再考 3 －視点と粒度－”, FIT2005, K-085, Sept. 2005.
[TS2010] 高原, “理想的 TRIZ　TRIZ という生き方その 2”, 第 6 回日本 TRIZ シンポジウム, Sept. 2010.
[TS2011] 高原. “一体型矛盾解消のための準備的考察―生き方の論理を求めて―”, 第七回 TRIZ シンポジウム, Sept. 2011.
[IEICE2012] 高原, “物々交換誕生の論理 ― 矛盾モデル拡張による弁証法論理再構築のための ―”, 2012 信学総大, A-13-1, Mar. 2012.
[TS2012] 高原, “論理的網羅思考と矛盾”, 第 8 回日本 TRIZ シンポジウム, Sept. 2010.

[THPJ2012] 高原, “技術と制度における運動と矛盾についてのノート”, TRIZ ホームページ, 2013.
[FIT2013] 高原, “世界構造の中の方法と粒度についてのノート”, FIT2013. D-001, Sept. 2013.
[THPJ2015/1] 高原, “粒度、矛盾、網羅による弁証法論理ノート:ノート 2015-1”, TRIZ ホームページ, 2015.
[FIT2016] TAKAHARA Toshio, “Radical Enumerative Thinking and Contradiction of Unity for World View, the Way of Life and the Future of Human Being”, FIT2016, Sept. 2016.
[CGK2016] TAKAHARA Toshio, “A Note on Energy and Post-Capitalism”, 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2016.
[FIT2017] TAKAHARA Toshio, “World View, Attitude and Logic of Life to Survive in the Universe”, FIT2017, O-018, 2017.
[IPSJ2017] 高原, “大きな問題の解決方法”, 情報処理学会 79 全大, 7F-02, 2017.
[CGK2017] TAKAHARA Toshio, “Radical Enumerative Thinking and Contradiction as the Way of Life”, 電気・情報関連学会中国支部連合大会, R17-25-07, 2017.
[IEICE2018] 高原, “矛盾モデルと論理的網羅思考による人類史の論理と価値実現”, 2018 信学総大, A-12, 2018.
[FIT2018] TAKAHARA Toshio, “Logical Possibility of Ideal Way of Life; Barter as a Background of Homo Sapiens”, FIT2018, N-018, 2018.
[FIT2019] 高原, “弁証法論理学の生成構造”, FIT2019, O-028, 2019.
[CGK2019] 高原, “網羅についてのノート－事実と価値の本質と全体のための－”, 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2019.
[FIT2020] 高原利生, “事実から作る 価値,真実,シンプルな論理学の骨子”, FIT2020, O-012, 2020.
[CGK2020] 高原, “思考の構造と論理の原理”, 電気・情報関連学会中国支部連合大会, R20-27-01-02. 2020.
[IPSJ2021] 高原, “通常の推論を仮説設定に統一する条件”, 情報処理学会 83 全大, 2F-05, 2021.
[FIT2021] 高原, “弁証法論理学が作る哲学、その歴史的論理構造”, FIT2021, O-026, 2021.
[Taka-51] 高原,「永久に未完成の哲学ノート第２部４版」MyISBN,デザインエッグ株式会社, 2021

高原利生論文集(4) 解題 抜粋 http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2018Papers/Takahara-Biblio4-2018/Takahara-Biblio4-180823.htm#Guide (2018.04.12) を修正。
2003 年から 07 年の論文集(1)、2008 年から 12 年の論文集(2)、2013 年から 15 年の論文集(3)、2016 年から 19 年の論文集(4)。

2003 年から 2007 年までの検討では、基本概念（**オブジェクト**，それを組み合わせたオブジェクト世界，オブジェクト変更、オブジェクトの**属性，粒度，機能**）を明らかにし、差異解消の方法、表示方法を追求した。2003 年からオブジェクトとは何かをまとめるのに、結果的に 2 年、オブジェクト変更の一応の定式化に、結果的にさらに 3 年かかった。

2008 年から 2012 年までの検討内容は、（広義の）差異解消の理論になっていた。（広義の）差異解消が（狭義の）差異解消（通常の意味の「変更」「変化」）と両立であることは大きな発見であった。自然の運動、人間の行動、思考の全体は、内容的には、（広義の）差異解消である。これをもたらすのは運動である。全ての運動を動的な構造の面から見たのが矛盾であった。 粒度を管理するのが論理的網羅思考である。これらの検討を続けながら、生き方の検討も 2009 年から始めた。

2013 年からは、**矛盾、論理的網羅思考を構成要素とする弁証法論理**、それが**「生き方」**を実現すること、それが最少概念で実現されること、「生き方」以外へも適用できることを検討している。

2013 年の[FIT2013]、2016 年の[FIT2016]は、論理的網羅思考を意識的に適用した例になった。2018 年、生き方を決める世界観と矛盾と論理的網羅思考を併せて、哲学なのだと気づいた。

次図で、上右が 2003- 2007 年の主テーマ、上の左が 2008- 2012 年の主テーマ、下右が 2013 年以降の主テーマを表す。

論文名の表記を、[2003 年以来の発表順の通し番号] [発表の場の略称　発表年] 著者名, “論文名”, 発表の場, 発表年. の順に示す。

発表の場は, The TRIZ Journal、TRIZ シンポジウム、情報科学技術フォーラム（FIT）、電子情報通信学会総合大会、情報処理学会全国大会、 電気・情報関連学会中国支部連合大会である。

発表の場の略称は、FIT：情報科学技術フォーラム Forum on Information Technology。

IEICE：電子情報通信学会（信学会）総合大会、IPSJ:情報処理学会全国大会。

CGK：電気・情報関連学会中国支部連合大会（電気学会、照明学会、電子情報通信学会、情報処理学会などの中国支部が、毎年、合同で行う発表会）THPJ：中川徹先生の TRIZ ホームページである。

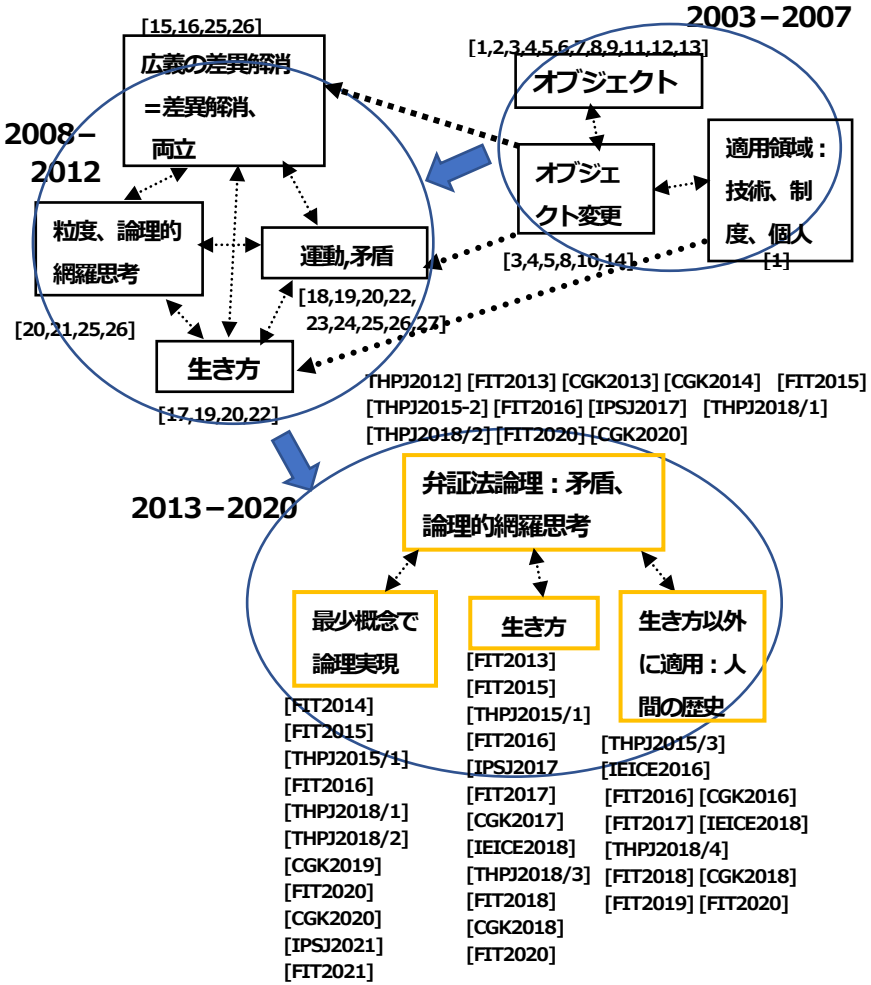

図　2003－2021 年の論文構造

（著者 高原利生 たかはらとしお）

1945 年産まれ。早稲田大学 理工学部 電気通信学科卒。 富士通（株）入社。関連会社の富士通ネットワークエンジニアリング株式会社（FNE）（今この名前の会社はない）に移った後定年退職。

会社ではシステム設計に従事し、ISO9001 の業務や技術者教育、管理にも携わった。システム設計の対象は、河川管理システム、ダムゲート自動制御システム、ダムゲート操作訓練シミュレータ、ネットワーク管理システムなどである。システム設計の内容は、仕様決定、システムの全体設計、電子回路設計を含むハードウエア設計、ソフトウェア設計、デバッグである。設計は、一つのシステムの初めから終わりまでを一人で担当することが殆どだった。回路設計、機械語のソフトウェア設計を行ったので、数理論理がハードウエアでもソフトウェアでも全く同様に実現できることを実感できた。某電力会社の、管内全ダムに対処できるダムゲート操作訓練シミュレータを、同社の研究所と共同で設計し実現されたことがある。会社生活の前半は、終身雇用の時代、後半は、能力主義の時代だった。全体として、条件を生かして自由に生きてきた気がする。